

恒川遺跡

《田中・倉垣外地籍》

店舗等建設に先立つ埋蔵文化財
緊急発掘調査報告書

昭和63年3月

長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡

〈田中・倉垣外地籍〉

店舗等建設に先立つ埋蔵文化財
緊急発掘調査報告書

昭和63年3月

長野県飯田市教育委員会

序

昭和59年度飯田市座光寺地区に国道153号座光寺バイパスが開通しました。これを契機として座光寺地区には、開発の波が押し寄せて来つつあります。その波は、飯田市街地寄りの西方から順次始まり、店舗等の建設など様々な姿で現われています。

この恒川遺跡群では、国道153号バイパス建設に伴う発掘調査、それに続く重要遺跡範囲確認調査を含めて発掘調査を12年間行なっていることとなります。その結果からみて、古代伊那郡の役所があった場所にはば間違いないものと考えられております。

本書に関する調査では、弥生時代の住居址や溝址、古墳時代、それに続く奈良時代・平安時代の住居址や建物址などの遺構が発見され、それらの時代に属する土器や装飾品などの遺物が出土しました。

それらの中には、古代伊那郡衙址に関係するとみられるものもいくつかあります。しかし、発見された個々のもので、具体的に何がどうだと決めることは、難しいことですが、調査により明らかになった事実のひとつひとつの積み重ねが、歴史を形成していく重要な要素になることはいうまでもないことであり、本書の成果が、地域の歴史研究にさらには、日本古代史解明の鍵となることを確信しているところです。

本書の刊行にあたり、発掘調査等に対して深いご理解と多大なるご協力をいただいた飯田市座光寺片桐卓治氏及び飯田中央農業協同組合ならびに、様々な形でご協力をいただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

1988年3月

飯田市教育委員会
教育長 福島 稔

1. 本報告書は、飯田市座光寺 4598 番地ほかの店舗及び同 4601 番地の飯田中央農業協同組合座光寺給油所建設に伴う恒川遺跡田中地籍の発掘調査報告書である。
2. 本書は、前述の緊急発掘調査報告書であるが、昭和61年度に実施した恒川遺跡群範囲確認調査箇所の飯田市座光寺 4599 番地と互いに接した位置にあり、その調査結果等についても合わせて掲載した。
3. 発掘調査は、飯田市教育委員会が開発主体者である片桐卓治氏及び飯田中央農業協同組合より委託を受けて実施したものである。
4. 発掘調査は、昭和61年3月から4月までと、昭和62年3月から6月まで現地での調査を行い、整理ならびに報告書の作成をそれに引き続き飯田市考古資料館で行なった。
5. 遺構の番号については、昭和51～53年度に実施した一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査により検出された諸遺構の番号に連続して付した。また、調査区の設定は、一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ調査で路線方向に設定したグリッド配置を延長して設定した。
6. 本書の記載にあたり、現地での調査順に各地点を遺構種類毎に記述した。
7. 本報告書は、佐々木嘉和・山下誠一・佐合英治・桜井弘人・吉川豊・馬場保之・小林正春が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお、遺物及び図面等の整理については、執筆者のほか本文に記載の整理協力者が補佐した。
8. 本報告書の編集は、執筆者の協議により行ない、小林が総括した。
9. 本報告書に関連する遺物及び図面類等は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

序	
例言	
目次	

I 経過	
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
1) 田中・倉垣外地籍 4598 番地他（集合店舗建設地）	1
2) 田中・倉垣外地籍 4599 番地（昭和61年度恒川遺跡群範囲確認調査）	2
3) 田中・倉垣外地籍 4601 番地（飯田中央農協給油所建設用地）	2
3. 調査組織	3
II 遺跡の環境	
1. 自然環境	5
2. 歴史環境	5
III 調査結果	
1. 田中・倉垣外地籍 4598 番地（集合店舗建設地）	
1) 住居址	
① 107号住居址	9
② 108号住居址	11
③ 109号住居址	12
④ 110号住居址	13
⑤ 111号住居址	14
⑥ 112号住居址	14
⑦ 113号住居址	18
⑧ 114号住居址	19
⑨ 115号住居址	22
⑩ 116号住居址	23
⑪ 117号住居址	22
⑫ 118号住居址	24
⑬ 119号住居址	25

④ 120号住居址	26
⑤ 121号住居址	27
2) 掘立柱建物址	
① 建物址14	28
② 建物址15	29
③ 建物址16	29
④ 建物址17	29
⑤ 建物址18	30
⑥ 建物址19	31
⑦ 建物址20	35
⑧ 建物址21	35
3) 土坑	
① 土坑24	37
② 土坑25	37
③ 土坑26	37
④ 土坑27	37
⑤ 土坑28	37
⑥ 土坑29	40
⑦ 土坑30	40
⑧ 土坑31	40
4) 小竖穴	
① 小竖穴4	40
② 小竖穴5	41
③ 小竖穴6	41
5) 溝址	
① 溝址12	41
② 溝址22	42
③ 溝址23	42
④ 溝址24	43
6) 集石	
① 集石26	43
② 集石27	43
③ 集石28	43
④ 集石29	43
⑤ 集石30	43

7) 杭 列	
① 杭 列 1	44
8) そ の 他	
① 柱穴等	44
② AD～AO57 ライトレンチ	44
③ 遺構外出土遺物	45
2. 田中・倉垣外地籍 4599 番地 (昭和61年度恒川遺跡群範囲確認調査)	
1) 4599 番地土層状況	47
2) 住居址	
① 122号住居址	47
② 123号住居址	51
③ 124号住居址	51
④ 125号住居址	52
⑤ 126号住居址	54
⑥ 127号住居址	56
⑦ 128号住居址	56
⑧ 129号住居址	57
⑨ 130号住居址	59
⑩ 131号住居址	59
⑪ AA60遺構不明住居址	59
⑫ AC61遺構不明住居址	60
3) 掘立住建物址	
① 建物址22	60
② 建物址23	60
③ 建物址24	61
4) 土 坑	
① 土坑32	61
5) 小竪穴	
① 小竪穴 7	61
6) 方形周溝墓	
① 方形周溝墓 4	62
② 方形周溝墓 5	62
7) 櫓 址	
① 櫓址 2	62
8) 石敷址	
① 石敷址	63

9) その他

① 柱穴等	63
② 遺構外出土遺物	63

3. 田中・倉垣外地籍 4601 番地（飯田中央農協給油所建設地）

1) 住居址

① 4号住居址	65
② 9号住居址	65
③ 11号住居址	67
④ 132号住居址	68
⑤ 133号住居址	69
⑥ 134号住居址	70
⑦ 135号住居址	72
⑧ 136号住居址	73
⑨ 137号住居址	73
⑩ 138号住居址	73
⑪ 139号住居址	76
⑫ 140号住居址	77
⑬ 141号住居址	78
⑭ 142号住居址	80
⑮ 143号住居址	81
⑯ 144号住居址	82
⑰ 145号住居址	83
⑱ 146号住居址	84
⑲ 147号住居址	84
⑳ 148号住居址	84
㉑ 149号住居址	86
㉒ 150号住居址	87
㉓ 151号住居址	87

2) 掘立柱建物址

① 建物址25	88
② 建物址26	89

3) 土坑

① 土坑33	89	② 土坑34	90	③ 土坑35	90	④ 土坑36	90
⑤ 土坑37	91	⑥ 土坑38	91	⑦ 土坑39	91	⑧ 土坑40	91

㉑ 土坑41 91	㉒ 土坑42 93	㉓ 土坑43 93	㉔ 土坑44 93
㉕ 土坑45 93	㉖ 土坑46 93	㉗ 土坑47 94	㉘ 土坑48 94
㉙ 土坑49 94	㉚ 土坑50 94	㉛ 土坑51 94	㉜ 土坑52 95
㉝ 土坑53 96	㉞ 土坑54 96		

4) 小 竪 穴

① 小竪穴 8	98
② 小竪穴 9	98

5) 方形周溝墓

① 方形周溝墓 1	99
-----------	----

6) 溝 址

① 溝 址 4	101
② 溝 址 5	101
③ 溝 址 12	101
④ 溝 址 17	105
⑤ 溝 址 25	105

7) そ の 他

① 柱穴等	106
② 遺構外出土遺物	107

IV ま と め	109
----------	-----

挿 図 目 次

挿図 1 恒川遺跡群位置及び周辺主要遺跡図	4
挿図 2 調査地点及び官衙の遺構分布概要図	7
挿図 3 TAN・KUR 107号住居址	10
挿図 4 TAN・KUR 108号住居址	11
挿図 5 TAN・KUR 109号住居址	12
挿図 6 TAN・KUR 110号住居址	13
挿図 7 TAN・KUR 111号住居址・溝址12	15
挿図 8 TAN・KUR 112号住居址	16
挿図 9 TAN・KUR 113号住居址	18
挿図 10 TAN・KUR 114号住居址	20

挿図11	TAN・KUR	114号住居址 カマド	21
挿図12	TAN・KUR	115号住居址	22
挿図13	TAN・KUR	116・117号住居址, 土坑26・29	23
挿図14	TAN・KUR	118号住居址	24
挿図15	TAN・KUR	119号住居址	25
挿図16	TAN・KUR	120号住居址	26
挿図17	TAN・KUR	121号住居址, 土坑30	27
挿図18	TAN・KUR	建物址 14・15	28
挿図19	TAN・KUR	建物址 16	30
挿図20	TAN・KUR	建物址 17	31
挿図21	TAN・KUR	建物址 18	32
挿図22	TAN・KUR	建物址 19	33
挿図23	TAN・KUR	建物址 20	34
挿図24	TAN・KUR	建物址 21, 溝址 22, 小竪穴 6	36
挿図25	TAN・KUR	小竪穴 4・5, 土坑 24・25・31, 集石 26・27・28・29・30	38
挿図26	TAN・KUR	土坑 27・28・ピット群	39
挿図27	TAN・KUR	溝址 12	41
挿図28	TAN・KUR	溝址 23・24	42
挿図29	TAN・KUR	杭列	44
挿図30		4599番地北東壁土層断面図	48
挿図31	TAN・KUR	122号住居址, 建物址 24, 小竪穴 7	49
挿図32	TAN・KUR	123号住居址	50
挿図33	TAN・KUR	124号住居址, 櫓列 2・ピット群	52
挿図34	TAN・KUR	125号住居址	53
挿図35	TAN・KUR	126号住居址, ピット群	55
挿図36	TAN・KUR	127号住居址	56
挿図37	TAN・KUR	128号住居址	56
挿図38	TAN・KUR	129号住居址	57
挿図39	TAN・KUR	130号住居址, 建物址 22・23, 土坑 32, ピット群	58
挿図40	TAN・KUR	131号住居址	59
挿図41	TAN・KUR	方形周溝墓 4, ピット群	62
挿図42	TAN・KUR	方形周溝墓 5	63
挿図43	TAN・KUR	ピット群, 石敷址	64
挿図44	TAN・KUR	4号住居址	66
挿図45	TAN・KUR	9号住居址	67

挿図46	TAN・KUR	11号住居址	68
挿図47	TAN・KUR	132号住居址	69
挿図48	TAN・KUR	133号住居址	70
挿図49	TAN・KUR	134号住居址, 土坑35・36・50	71
挿図50	TAN・KUR	135号住居址	72
挿図51	TAN・KUR	136号住居址, グリットピット	74
挿図52	TAN・KUR	137号住居址	75
挿図53	TAN・KUR	138号住居址	76
挿図54	TAN・KUR	139号住居址	77
挿図55	TAN・KUR	140号住居址	78
挿図56	TAN・KUR	141号住居址	79
挿図57	TAN・KUR	142号住居址	80
挿図58	TAN・KUR	143号住居址	81
挿図59	TAN・KUR	144号住居址	82
挿図60	TAN・KUR	145・146号住居址	83
挿図61	TAN・KUR	147・149号住居址, 土坑48, ピット群	85
挿図62	TAN・KUR	148号住居址	86
挿図63	TAN・KUR	150・151号住居址	87
挿図64	TAN・KUR	建物址25	88
挿図65	TAN・KUR	建物址26	89
挿図66	TAN・KUR	土坑33・34	90
挿図67	TAN・KUR	小竪穴8, 土坑37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47	92
挿図68	TAN・KUR	土坑49・51	95
挿図69	TAN・KUR	土坑52	96
挿図70	TAN・KUR	土坑53・54	97
挿図71	TAN・KUR	小竪穴9	99
挿図72	TAN・KUR	方形周溝墓1	100
挿図73	TAN・KUR	溝址4・5・12・25・26, 土坑35・36・50	103
挿図74	TAN・KUR	溝址17	106

目 次

第1图	TAN · KUR 4598	111·121号住居址出土遺物	114
第2图	TAN · KUR 4598	121号住居址出土遺物	115
第3图	TAN · KUR 4598	113号住居址出土遺物	116
第4图	TAN · KUR 4598	116·118号住居址出土遺物	117
第5图	TAN · KUR 4598	118·119号住居址出土遺物	118
第6图	TAN · KUR 4598	120号住居址出土遺物	119
第7图	TAN · KUR 4598	120号住居址出土遺物	120
第8图	TAN · KUR 4598	107号住居址出土遺物	121
第9图	TAN · KUR 4598	107号住居址出土遺物	122
第10图	TAN · KUR 4598	107号住居址出土遺物	123
第11图	TAN · KUR 4598	107·108号住居址出土遺物	124
第12图	TAN · KUR 4598	108号住居址出土遺物	125
第13图	TAN · KUR 4598	107·110号住居址出土遺物	126
第14图	TAN · KUR 4598	110·112号住居址出土遺物	127
第15图	TAN · KUR 4598	112号住居址出土遺物	128
第16图	TAN · KUR 4598	114号住居址出土遺物	129
第17图	TAN · KUR 4598	114号住居址出土遺物	130
第18图	TAN · KUR 4598	114号住居址出土遺物	131
第19图	TAN · KUR 4598	117号住居址出土遺物	132
第20图	TAN · KUR 4598	115号住居址·小竖穴4出土遺物	133
第21图	TAN · KUR 4598	小竖穴4出土遺物	134
第22图	TAN · KUR 4598	小竖穴5·土坑24·26·28出土遺物	135
第23图	TAN · KUR 4598	掘立柱建物址15·19·21、溝址12出土遺物	136
第24图	TAN · KUR 4598	遺構外出土遺物	137
第25图	TAN · KUR 4598	遺構外出土遺物	138
第26图	TAN · KUR 4598	遺構外出土石器	139
第27图	TAN · KUR 4598	金屬·玉	140
第28图	TAN · KUR 4599	126号住居址出土遺物	141
第29图	TAN · KUR 4599	126号住居址出土遺物	142
第30图	TAN · KUR 4599	126号住居址出土遺物	143
第31图	TAN · KUR 4599	122·124号住居址出土遺物	144
第32图	TAN · KUR 4599	125号住居址出土遺物	145

第33回	TAN · KUR 4599	125·128号住居址出土遺物	146
第34回	TAN · KUR 4599	129号住居址出土遺物	147
第35回	TAN · KUR 4599	129号住居址出土遺物	148
第36回	TAN · KUR 4599	123号住居址出土遺物	149
第37回	TAN · KUR 4599	123号住居址出土遺物	150
第38回	TAN · KUR 4599	AA60 · AC61遺構不明住居址出土遺物	151
第39回	TAN · KUR 4599	AC61遺構不明住居址出土遺物	152
第40回	TAN · KUR 4599	127·130号住居址、掘立柱建物址22出土遺物	153
第41回	TAN · KUR 4599	方形周溝墓4 · 5、遺構外出土遺物	154
第42回	TAN · KUR 4599	遺構外出土遺物	155
第43回	TAN · KUR 4599	遺構外出土遺物	156
第44回	TAN · KUR 4599	遺構外出土遺物	157
第45回	TAN · KUR 4599	白玉 · 石鏃 · 金屬器	158
第46回	TAN · KUR 4601	132·134号住居址出土遺物	159
第47回	TAN · KUR 4601	148号住居址出土遺物	160
第48回	TAN · KUR 4601	148·135·150·4号住居址出土遺物	161
第49回	TAN · KUR 4601	138·146号住居址出土遺物	162
第50回	TAN · KUR 4601	11号住居址出土遺物	163
第51回	TAN · KUR 4601	133·136号住居址出土遺物	164
第52回	TAN · KUR 4601	137号住居址出土遺物	165
第53回	TAN · KUR 4601	137·139号住居址出土遺物	166
第54回	TAN · KUR 4601	139号住居址出土遺物	167
第55回	TAN · KUR 4601	139·140号住居址出土遺物	168
第56回	TAN · KUR 4601	140·141号住居址出土遺物	169
第57回	TAN · KUR 4601	141号住居址出土遺物	170
第58回	TAN · KUR 4601	141号住居址出土遺物	171
第59回	TAN · KUR 4601	141号住居址出土遺物	172
第60回	TAN · KUR 4601	141·142号住居址出土遺物	173
第61回	TAN · KUR 4601	143号住居址出土遺物	174
第62回	TAN · KUR 4601	143号住居址出土遺物	175
第63回	TAN · KUR 4601	143号住居址出土遺物	176
第64回	TAN · KUR 4601	144号住居址出土遺物	177
第65回	TAN · KUR 4601	144·145号住居址出土遺物	178
第66回	TAN · KUR 4601	147·149号住居址出土遺物	179
第67回	TAN · KUR 4601	方形周溝墓1出土遺物	180

第68図	TAN・KUR 4601	方形周溝墓1出土遺跡	181
第69図	TAN・KUR 4601	溝址12出土遺物	182
第70図	TAN・KUR 4601	溝址12出土遺物	183
第71図	TAN・KUR 4601	溝址12出土遺物	184
第72図	TAN・KUR 4601	溝址12出土遺物	185
第73図	TAN・KUR 4601	溝址12・5・17・25出土遺物	186
第74図	TAN・KUR 4601	溝址26出土遺物	187
第75図	TAN・KUR 4601	小竪穴8・9出土遺物	188
第76図	TAN・KUR 4601	建物址26、土坑33・37・40・42・44・48・50・51出土遺物	189
第77図	TAN・KUR 4601	土坑38出土遺物	190
第78図	TAN・KUR 4601	土坑38・43出土遺物	191
第79図	TAN・KUR 4601	遺構外出土遺物	192
第80図	TAN・KUR 4601	遺構外出土遺物	193
第81図	TAN・KUR 4601	遺構外出土遺物	194
第82図	TAN・KUR 4601	遺構外出土遺物	195
第83図	TAN・KUR 4601	出土石製品、鉄製品	196
第84図	TAN・KUR 4601	出土鉄製品	197

写真図版目次

図版1	発掘前の田中倉垣外地籍	遺構分布状況	200
図版2	111号住居址	同炉址断面	201
図版3	113号住居址	121号住居址	202
図版4	118号住居址	同炉址 同断面	203
図版5	120号住居址	同炉址 同断面	204
図版6	107・114・117号住居址	108・109号住居址	205
図版7	107号住居址	同カマド	206
図版8	110号住居址	同遺物出土状態 117号住居址	207
図版9	112号住居址	同遺物出土状態	208
図版10	掘立柱建物址14	掘立柱建物址16	209
図版11	掘立柱建物址17・18	掘立柱建物址19・20	210
図版12	土坑26	小竪穴4 小竪穴5	211
図版13	溝址12・23	土坑25 杭列	212

図版14	確認調査範囲全景	213
図版15	126号住居址 同遺物出土状態	214
図版16	125号住居址 124号住居址 同遺物出土状態	215
図版17	123号住居址 掘立柱建物址22	216
図版18	小竪穴7 石敷址	217
図版19	農協給油所調査範囲全景	218
図版20	9号住居址 135号住居址 132号住居址 同炉址断面	219
図版21	137・138号住居址 140号住居址	220
図版22	141号住居址 142号住居址	221
図版23	11号住居址 133号住居址 139号住居址 144号住居址 145号住居址	222
図版24	掘立柱建物址25 土坑33	223
図版25	土坑34 土坑37 土坑38遺物出土状態	224
図版26	土坑43 同出土須恵器甕 土坑48 土坑52 同内部石の状態	225
図版27	小竪穴9 同遺物出土状態	226
図版28	溝址12 同土層断面 同遺物出土状態	227
図版29	溝址5・25 溝址17	228
図版30	方形周溝墓1 同遺物出土状態	229
図版31	107号住居址出土遺物	230
図版32	108・110号住居址出土遺物	231
図版33	111・112号住居址出土遺物	232
図版34	113・114号住居址出土遺物	233
図版35	115・116・117号住居址出土遺物	234
図版36	118・120号住居址出土遺物	235
図版37	掘立柱建物址15・小竪穴4・5・溝址12出土遺物	236
図版38	田中・倉垣外地籍遺構外出土遺物	237
図版39	122・123号住居址出土遺物	238
図版40	124・125住居址出土遺物	239
図版41	126号住居址出土遺物	240
図版42	127・129号住居址出土遺物	241
図版43	130号・A A60不明住居址・方形周溝墓5出土遺物	242
図版44	確認調査 遺構外出土遺物	243
図版45	4・11・132・133・134・135・136号住居址出土遺物	244
図版46	137・138号住居址出土遺物	245
図版47	139号住居址出土遺物	246

図版48	140・141号住居址出土遺物	247
図版49	142・143・144号住居址出土遺物	248
図版50	145・146・147・148号住居址出土遺物	249
図版51	150号住居址・掘立柱建物址26・土坑33・37・43・51出土遺物	250
図版52	溝址12出土遺物	251
図版53	溝址12・方形周溝墓1およびTAN・KUR4601出土玉類	252
図版54	TAN・KUR4601遺構外出土遺物	253
図版55	調査風景	254
図版56	調査風景	255

I 経 過

1. 調査に至るまでの経過

昭和59年12月一般国道153号座光寺バイパスが開通し、それまでは若干の宅地化が進む程度でほぼ純粋な形での農用地であった恒川遺跡群周辺は、急激な開発が様々な形で進行かつ、求められる一帯と変貌しつつあるといえる。そうした中で、昭和51～53年に恒川遺跡群の西端部にあたり、バイパス建設に先立つ発掘調査により、大型の掘立柱建物址群等の古代官衙址的な様相を示す資料の発見された一画であり、その東側に集合店舗の建設計画が、引き続き道路をはさんだ西側に飯田中央農業協同組合による店舗等の進出計画が立案された。

開発計画地が、先述のとおり古代官衙址に関連する可能性の強い一帯であり、その保護等について内外より注目され、昭和57年度から国・県の補助を得て恒川遺跡群の範囲確認調査を飯田市教育委員会が継続して実施している中での開発計画であった。

そこで、開発主体者と飯田市教育委員会に長野県教育委員会文化課を含め、再三の協議を行ない、遺跡の重要性等を考えると非常に残念なことではあるが、今の社会情勢等の変化する中で、今回の開発計画は止むを得ないものとの判断がなされ、遺跡保護の立場からすれば、次善の策ではあるが、発掘調査を実施して記録保存を計るとの結論が出された。

また、昭和57年から継続実施している恒川遺跡群範囲確認調査の昭和61年度調査地は、先述の店舗建設に接した駐車場用地において実施し、この一帯の具体的な状況把握に努めた。

2. 調査の経過

1) 田中・倉垣外地籍 4598番地他（集合店舗建設地）

関係者による諸協議を受け、昭和61年3月4日委託者片桐卓治と受託者飯田市長松澤太郎との間で発掘調査に関する委託契約を締結し、それに基づき昭和61年3月10日発掘調査に着手した。

発掘調査は、建物建設部分につき調査対象とし、重機により表土を除去し、座光寺バイパス調査時に設定した方向に合わせグリット設定して順次遺構の調査を実施した。重機による表土除去後人力により遺構検出に努めたが、各遺構が明確になる前から弥生時代から平安時代にかけての土器等が多出し、バイパス調査時同様に複数時期の遺構がかなり重複していると判断された。

各遺構の重複が著しく、中には奈良時代の住居址内に平安時代の住居址がそっくり入っているという状況もあり、調査進行は一朝一夕にできかねる面もあったが、結局、今回の調査により、

竪穴住居址15軒、掘立柱建物址8棟、小竪穴3基、土坑8基、溝址4本等を確認調査した。

各遺構を掘り下げた後、順次写真撮影、測量作業を行い、3月末日現地での作業を終了した。

その後、バイパス調査時の資料等とも照合しながら図面類、遺物等の整理を飯田市考古資料館において実施した。

2) 田中・倉垣外地籍4599番地（昭和61年度恒川遺跡群範囲確認調査）

当調査地点の周囲は、昭和51～53年の国道バイパス建設及び昭和61年の集合店舗建設に先立って発掘調査を実施した箇所に隣接する。この地点は先の集合店舗建設計画の中で、駐車場スペースとされている箇所で、当面具体的な開発計画は無い部分である。既調査結果により示された古代官衙址の存在する可能性の中で、具体的な様相をよりの確に把握するために、昭和57年から国・県の補助を得て実施中の恒川遺跡群範囲確認調査の一環として本地点の発掘調査を実施した。

当該地点周辺は、今までの調査結果から、当初は官衙域の中心部の一画にあたる可能性も考えられたが、明確な結論を出すに至っていない。

発掘調査は、16×14mの範囲について、重機による表土剥ぎ作業実施後、人力による遺構検出作業を行なった。

作業の結果は、弥生時代から平安時代にかけての複数の住居址等が著しく重複しており、当初目的とした奈良時代の具体的な施設確認はできなかった。著しい重複のため、本来そのまま保存すべきと考えた奈良時代以外の遺構についても、調査範囲内で確認した全てについて発掘調査した。

発掘調査後、写真撮影・実測作業等を行ない、埋戻し作業を行なった。

その後、図面類・遺物について飯田市考古資料館において整理作業を行なうとともに、概要報告書を作成した。

3) 田中・倉垣外地籍4601番地（飯田中央農協給油所建設地）

関係者の諸協議・契約に基づき、昭和62年4月25日発掘調査に着手した。

調査範囲西側を流れる欠野沢周辺の幅約20mの凹地に古い流路が認められ、遺跡の西端にあたるのが判明している。このため、調査は重機によって表土を除去した後、東側から次第に西進する形で実施した。調査当初より弥生時代から平安時代にかけての多量の遺物が出土し、遺構検出作業の結果、竪穴住居址23軒・掘立柱建物址2棟・小竪穴2基・土坑22基・溝址6本・方形周溝墓1基を確認した。検出された遺構から順次掘り下げを行ない、さらに写真撮影・測量調査等を実施して、6月18日現地での作業を終了した。

引き続き、飯田市考古資料館において現地で記録された図面類・写真の整理、出土遺物の整理作業および報告書作成作業を行なった。

3. 調査組織

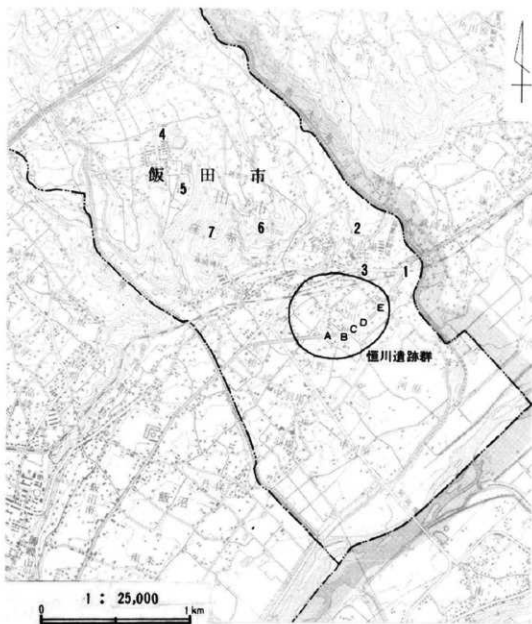
① 調査団

調査担当者	小林 正春					
調査員	佐々木嘉和 山下 誠一	佐合 英治	吉川 豊	馬場 保之	桜井 弘人	
作業員	赤羽美恵子 木下 傳 佐々木 啓 藤本 幸吉 松下 真幸 森 章 大日方富士子 小平不二子 宮内真理子	今村 勝子 木下 当一 高木 義治 古田八重子 溝上 清見 山田三保子 唐沢古千代 武田 恵美 吉川 悦子	大島 利男 窪田多久三 高橋収二郎 細井 光代 吉川 正実 木下 恒子 丹羽 由美 吉川紀美子	片桐 卓治 小室 幸充 平沢今朝光 細田 七郎 向田 一雄 池田 幸子 木下 玲子 牧内 八代	片桐 涼子 佐々木智子 福沢トシ子 正木実重子 村沢 愛蔵 岡本 恵己 榑原 勝子 松本 恭子	

② 事務局

飯田市教育委員会 社会教育課

塩沢正司	(社会教育課長)
池田明人	(社会教育課 文化係長)
小林正春	(" 文化係)
吉川 豊	(" 文化係)
馬場保之	(" 文化係)
土屋敏美	(庶務課)



挿図1 恒川遺跡群位置及び周辺主要遺跡図

恒川遺跡群 A 田中・倉垣外地籍 B 恒川A地籍 C 恒川B地籍
 D 阿弥陀垣外地籍 E 新屋敷地籍
 1 大塚(新井原12号古墳) 2 畦地1号古墳 3 高岡1号古墳
 4 座光寺原遺跡 5 中島遺跡 6 北本城跡 7 南本城跡

Ⅱ 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmにあり、南西を下伊那郡上郷町、北東を同高森町、東南は天竜川を挟んで同喬木村と接しており、行政区画上は飯田市の飛地となっている。

地形的に見ると西方の中央アルプス山麓から大規模に発達した扇状地を基盤として、北東側を南大島川に、南西側を土曾川に、東は天竜川とにより四囲を区切られ一地域を成している。

東西に長い地区内を南北方向に断層崖が走り段丘を成し、この段丘を小河川が侵食して小さな谷間を作っている。地区のほぼ中央を比高差約100mの段丘崖が横断し、俗にいう上段・下段に分けており両段共に数段の小段丘が形成されている。

今回調査の恒川遺跡群田中・倉垣外地籍は、下段の段丘上にあり標高430～432mである。段丘が天竜川氾濫原に落ちる崖まで250mの位置で台地先端に近い。

台地上ではあるが小段丘崖下の湧水に恵まれた所で、地籍の北東端にはバイパス建設により冬期枯渇する様になってしまったが、地域の生活用水として利用されている「恒川清水」がある。

「恒川清水」は扇状地の扇端部と小段丘の接点にあり、小段丘は南から西に緩く曲って延びており比高差5～3mで田中・倉垣外地籍の東南から南西側を区切っている。この小段丘崖下には湧水が連続している。

南西側は「恒川清水」から始まる小段丘が緩く曲ってきて終息し凹地となって湿地帯を形成する。湿地帯は田中・倉垣外地籍の西側に広がり、つい先頃まで互粘土が採取されていた。

田中・倉垣外地籍は乾燥台地上にあり、周囲に湧水と生産基盤の湿地帯を控えた、住居構えるに好条件の場所といえる。

2. 歴史環境

座光寺地区は古くから古墳の多い事、土器・石器の散布の多い事で知られており、家宝として鏡・玉など収蔵している人達も多い。

座光寺地区の埋蔵文化財収蔵地は20余、古墳の現存するものは10余であるが、下伊那史には古墳総数66基の記録があり、最近の調査で5基増えている。埋蔵文化財は縄文時代から近世までであり、地表に見える構造物としては古墳と中世の山城2つがある。

地区内にある遺跡の時期別分布を概観すると、上段地帯に縄文・弥生時代の遺跡が分布し山寄りには縄文時代遺跡の濃度が増している。中央の段丘崖上に古墳、中世山城が位置し下段地帯には

縄文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

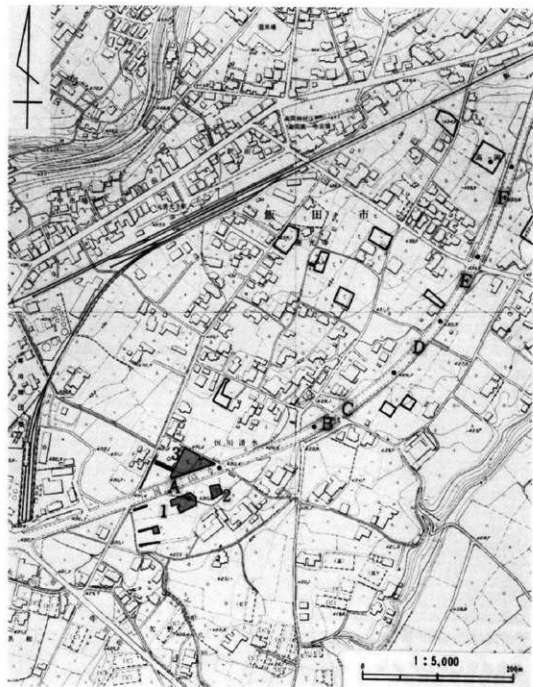
遺跡の開墾、盗掘による破壊は地区内全域に及び盗掘にあっていない古墳は皆無と言って良いだろう。発掘調査の最初は現在の東日本鉄道飯田線にかかって大正11年11月に調査された、大塚（新井原12号墳）である。この頃鳥居龍藏氏の遺物調査が行なわれている。大正12年には畦地1号墳石室が座光寺学校職員と高等科生徒によって、清掃調査され銀製の「垂飾付長鎖式耳飾」が発見されている。その後の記録は昭和30年代まで無く破壊のみが進んでいたのであろう。

昭和37（1962）年、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の、災害復旧工事で採土に先立ち下伊那教育会歴史調査部によって上段の一部座光寺原遺跡が調査され、弥生時代後期前半の標式「座光寺原式」が設定されている。

その後幾つかの発掘調査が行なわれたが、昭和45年に中央自動車道建設に伴う発掘調査で、飯田下伊那地区全体の埋蔵文化財に対する意識が一層喚起された。この時座光寺地区では5遺跡の調査が行なわれた。

昭和50（1975）年には弥生時代終末期標式「中島式」の設定の元となった遺跡である中島遺跡の発掘調査が行なわれた。農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、座光寺考古学研究会・下伊那教育会考古学委員会によって行なわれている。

昭和51（1976）年度からR 153 座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行なわれ、田中・倉垣外地籍も調査された。その結果、恒川遺跡群の一画として、重要遺構・遺物の出土があり古代伊那郡の推定「郡衙」周辺的重要地域として注目された。恒川遺跡群内に「郡衙」の確認を求めて、昭和57年度から文化庁の補助を受けた恒川遺跡群確認調査が始まり、62年度で7年目に入った。まだ確証には至っていないが、遺跡群の内でも田中・倉垣外地籍の重要性は増加している。



挿図2 調査地点及び官衙の遺構分布概要図

1 田中・倉垣外地籍4598番地他 2 田中・倉垣外地籍4599番地 3 田中・倉垣外地籍4601番地

A 田中・倉垣外地籍掘立柱建物址群 B 恒川A地籍掘立柱建物址群

C・D 恒川B地籍掘立柱建物址群 E・F 新屋敷地籍掘立柱建物址群

□……恒川遺跡群範囲確認調査地点 ●……硯出土地点

Ⅲ 調査結果

1. 田中・倉垣外地籍 4598 番地他（集合店舗建設地）

4598 番地他において確認し、調査した遺構は以下のとおりである。

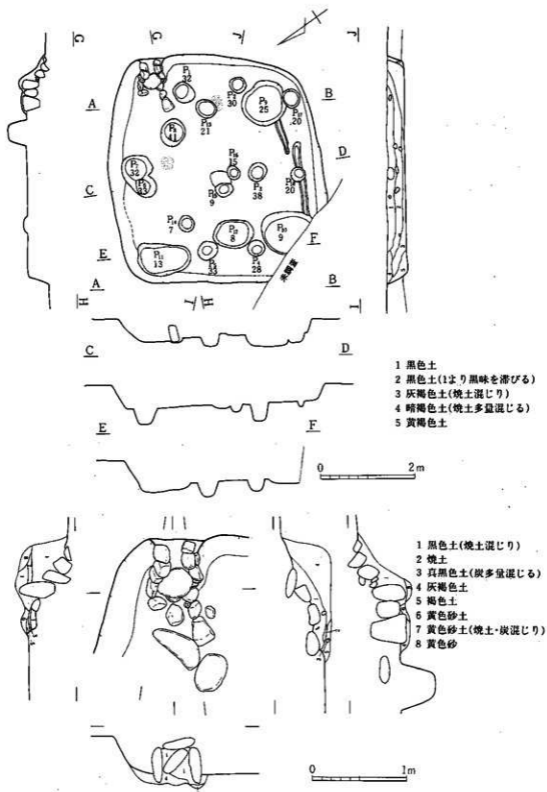
竪穴住居址	15軒
掘立柱建物址	8棟
土坑	8基
小竪穴	3基
溝址	4本（内1本はR 153 バイパス調査時の続き）
集石	5基
杭列	1基 等である。

1) 竪穴住居址

① 107号住居址（押図3、第8・9・10・11・13・27図）

BE62の周囲に検出、調査区外にわずかかき114号住居址を切っている。規模は4.6×4.8 mの隅丸方形竪穴住居址で主軸はN 123° Eを測る。検出時の覆土は黒色土と黒褐色土で、石が多量に混入しており、石は床面から10cm以上に入っていた。壁は114号住居址の覆土（暗褐色土）で確認がむずかしく、やや掘り過ぎた部分もあるがほぼ垂直である。床面は軟らかく緩い凹凸があり、大小の穴が検出された。南側壁からやや離れて周溝状の溝があったが、他の壁下には確認できなかった。西壁下にP₄・P₅があり入口施設であろう。主柱穴の把握はできなかったが、P₅は深く、覆土中に石が多量に入っており柱穴と思われる。P₅からは遺物が多量に出土しており覆土は黒色で焼土・炭もみられ貯蔵穴もしくは灰層である。カマドは東隅に位置し、石芯で長楕円形の石を立てて入れている。天井石を架けており比較的大形である。火床と思われる焼土部分は小さく量も少なかった。

遺物の出土量は多く、土師器・須恵器・灰釉陶器・石器・鉄製品等である。土師器鉢（13図1）はほぼ完形であり、ロクロ製で2次焼成を受けており、土鍋的な使用が考えられる。大部分の破片が、カマドと灰層から出土しており、当地方で類例の少ない資料である。坏（8図9～18、9図1～3）には、黒色土器（9図10～13）もありすべてロクロ製で、形態から碗型のものやや浅い坏に分けられる。高台付坏も土師器（4・5）と黒色土器（6～8）があり碗型で、灰釉陶器の模倣品である。9は黒色土器の高台付皿である。須恵器は甕（9図14・15）坏（10図1～9）

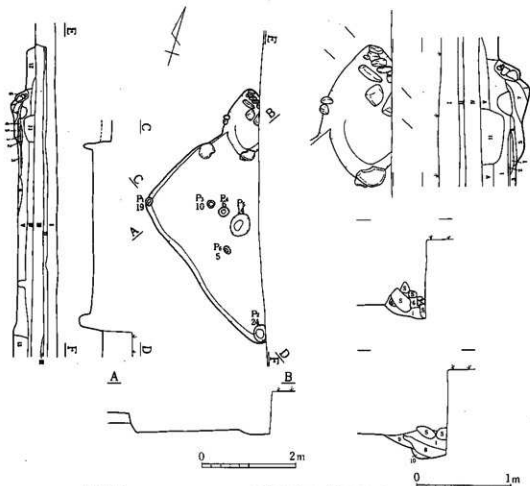


挿図3 TAN-KUR 107号住居址

皿(10・11)等がある。8図8は小片であるが焼成の甘い須恵器の襷鉢と考えられる。皿10は蓋の可能性もあり、11は1/2程の耳皿片である。灰釉陶器は碗(12~17)皿(18・19)がある。石器は砥石3個体(11図1~3)がありすべて砂岩製で、良く使い込まれており2・3は破損している。鉄製品(27図1~6)は完型品が無く種類の把握はむずかしい。

時期は平安時代後半であるが、奈良時代の住居址を切っており、一部の遺物は、混入したものである。

② 108号住居址(挿図4、第11・12図)



- | | |
|------------------|------------------|
| 1 黒色土 | 8 焼土(黒色土・黄色土混じり) |
| 2 黄色土(はり床) | 9 黒色土(焼土・炭混じり) |
| 3 炭と焼土の互層 | 10 炭 |
| 4 黒色土(焼土・黄色土混じり) | 11 黒色土(炭混じり) |
| 5 黒色土(焼土混じり) | 12 黒褐色土 |
| 6 黄色土(黒色土混じり) | 13 暗褐色土 |
| 7 焼土 | |

I ~ V 挿図6参照

挿図4 TAN-KUR 108号住居址

BM64・65で調査区外にかかって検出し、109号住居址を切っている。約4mの方形竪穴住居址と推測したが、主軸方向は不明である。覆土上層には全面的に灰の混入が見られた。壁は急傾斜で、床面は部分的に堅い所もあったが、緩い凹凸があり地山の礫まじりである。カマドは北西壁の石・焼土の入る凹みの位置で新しい穴に切られており、片方の軸石が残っていた。

遺物は住居址の約半分の調査であるが出土量は多く、土師器・須恵器・灰軸陶器等があるが、重複する109号住居址の遺物が一部混入した可能性もある。土師器甕(11図4・5)は底部に木葉痕の残る4と小型でロクロ製の5がある。黒色土器には坏(11図6・11~15)碗(11図10・16 12図1・2)皿(11図7~9)があり坏12には内面に暗文が施される。11図7~10・16、12図1・2は灰軸陶器の模倣品で、10は碗の可能性もある。須恵器には壺(12図3~5)長頸瓶(6)皿(7)があるが小破片である。灰軸陶器は碗(8~12)皿(13~15)があり、碗8・9の軸は内

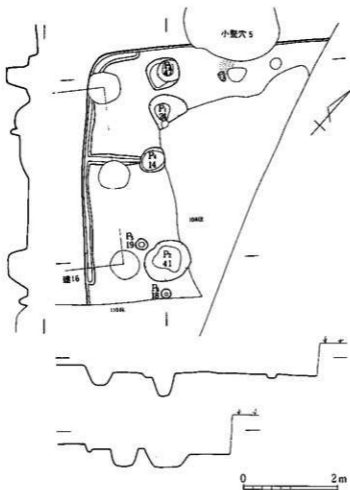
面のみ刷毛塗りである。石器は砂岩製の砥石(16)があり良く使われている。鉄器(27図7)は錆が厚く器種不明である。

時期は平安時代後半である。

⑨ 109号住居址

(挿図5、第13図)

BL64を中心に検出、調査区外にかかり108・110号住居址、建物址16、小竪穴5に切られる。規模は主柱穴から推測して5.5m前後の隅丸方形竪穴住居址であり、主軸はN43°Wを測る。壁の残存部は良好であったが20cm以下である。南西壁下には周溝があり、それに直交する溝は間仕切りと考えられる。床面は礫混りの黄色土で堅くない。主柱穴はP₁・P₂であろうが、P₁はやや浅い。カマドは北西壁下に焼土があり、その位置と



挿図5 TAN-KUR 109号住居址

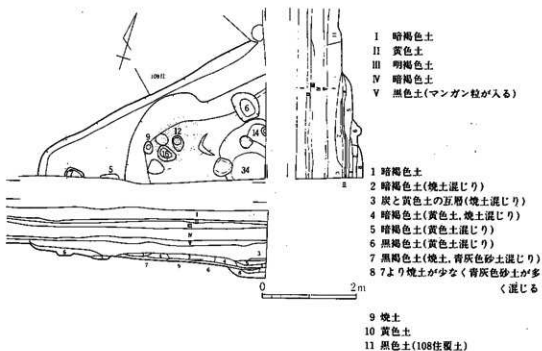
推測したが小竪穴5に切られ構造等は把握できなかった。

当住居址出土遺物は小片がわずかで、図化可能なものは無い。当初108号住居址と切り合い関係が把握できず、同一住居址で調査を始めたので108号住居址遺物とした中に当住居址に属するものがあろう。切り合い関係から古墳時代住居址と推測した。

④ 110号住居址 (挿図6、第13・14図)

調査区の東隅に壁を検出、わずかの調査である。109号住居址を切り、108号住居址に切られる。規模・主軸方向は不明である。109号住居址床面を切っている部分を最初に確認し調査を行った。覆土には炭・焼土の混入があり、土層的には炭・焼土の混る土と黄色土の互層になっていて、焼骨の混入も見られた。壁はやや緩く立ちあがり、焼けた所もある。床面は壁ぎわから中央方向に緩く傾斜しており、調査区外壁近くで凹む。床面と覆土中に良く焼けた部分があり、住居址の性格と廃棄後の再利用が考えられるが、把握までには至らなかった。

遺物は調査面積に比較して多く、土師器・須恵器・灰釉陶器等である。土師器壺(13図2~4)は小片で器形の把握できるものは無く、4は細かな刷毛目が器面内外に残る。須恵器には壺(5



挿図6 TAN-KUR 110号住居址

～9) 瓶 (10) 坏 (11) 高台付坏 (12～15) 皿 (16) 蓋 (14図1～5) がある。6は灰釉陶器で胎土は灰白色、宝珠型の紐をもち緑色の灰釉が外側全面にかかり、短頸壺の蓋の優品である。石器は磨製石礫未製品(7)が出土しているが混入品である。

時期は平安時代前半である。

(佐々木嘉和)

㊦ 111号住居址(押図7、第1図)

南西側を溝址12と掘立柱建物址21にきられ、北側は調査用地外となる。上部もほとんど削平されているため、壁・床面によっても正確な規模は把握できなかった。一辺の長さが4～5mの、方形竪穴住居址が想定され、全体の1/2程が調査できたと考えられる。主軸方向は炉址の位置からN41°Eと考えられる。壁は東隅を中心とする部分のみを確認し、壁高は8cmを測る。床面も西側は削平されているが、把握できた部分はほぼ平坦で、壁ぎわを除き堅く良好なものである。住居址内に検出された穴はほとんどが後世のもので、主柱穴も不明である。南壁の不明部分に検出された小穴二つは、出土遺物から本址に伴うものであるが、性格は不明である。炉址は三個検出された。いずれも、壺の胴体部を使った土器埋設炉である。うち二つは一つの掘り方内に確認され、土層の観察により、西側が古いことを把握した。両者とも壺は逆位に使われている。焼土は炉址内部より床面上に多く認められた。東にやや離れて検出された炉址上部には、しっかりした貼り床が認められた。焼土が旧床面上に広がっており、一番古いと考えられる。また、炉縁石に使われていたと考えられる石が落ち込んでいた。

出土遺物はきわめて少ない。石器は炉址に使われていた壺のほかは、細片である。石器として横刃型石器・半磨製石斧・磨製石礫未製品がある。

時期は、遺物から弥生時代中期後半に位置付けられる。

(佐合 英治)

㊧ 112号住居址(押図8、第14・15・27図)

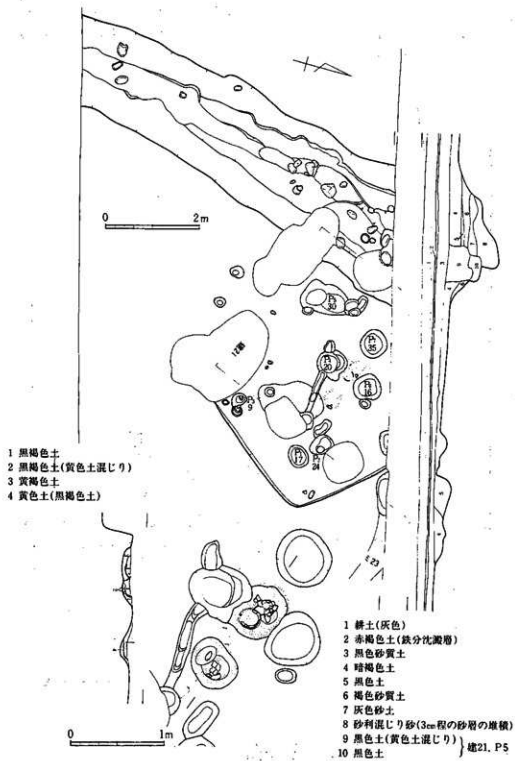
今回の調査範囲内の北端部に検出され、調査対象部分以外に延びており、全体規模は把握できなかったが、南西壁8.8m、南東壁7.2mを確認し、未調査部分も含め大規模な竪穴住居址である。南東壁にある張出し部を入口と考えた場合の主軸方向はN55°Eを測る。

本址は、規模・構造・出土遺物の点でいくつかの特殊性が指摘できる。

まず、構造の点では、入口施設と考えられる張出し部、壁下に点在配置された柱礎石と考えられる石の存在である。

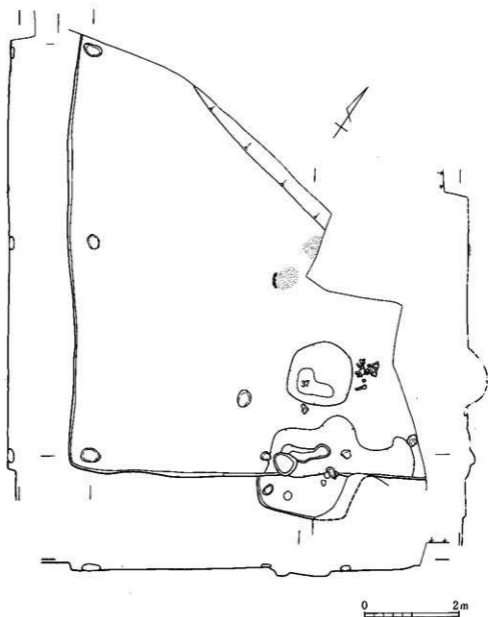
入口施設と考えられる張出し部は、南東壁外に100×50cmの台形状に10～5cmの掘り込みが確認され、竪穴側に緩やかな傾斜を持つもので、同位置の竪穴内部に不整形の浅い掘り込みと、それから更に掘り込まれた穴とがあり、全体で入口施設を構成したものと考えられる。

壁下の石は、南西壁下に3個と南東壁下の入口部両端に2個が確認された。南西壁下の3個は40×30cm前後のほぼ同様の大きさの自然礫で、南隅から4.5m、4mの間隔で直線的に配される。



挿図7 TAN-KUR 111号住居址・溝址12

南東壁下入口部の礎は、若干小さく、径20cm程であり、南西壁下と同様に南隅から直線的に並ぶ。南隅から2番目の礎までの距離は3.7m、入口部の礎間は1.7mを測る。これらから、壁下に配された石は、柱礎石と考えるのが妥当といえる。また、礎石を裏付ける材料の一つとして、竪穴床面上に通例みられる柱穴の存在はない。



挿図8 TAN-KUR 112号住居址

以上、竪穴全体の調査はできなかったわけであるが、本址の規模は、入口部を南東壁の中央とした場合一辺9.5m、南西壁下の礎石配置からは、13.4~9mの一辺の規模が推定でき、全体の1/2~1/3を調査したことになる。

次に、出土遺物の点では、円面硯の出土である。円面硯は、入口部右側の床面上よりの出土で本住居址居住者が使用していたものといえる。

結局、本址について、その構造及び出土品などの点で、該期一般住居址と同列ではなく、官衙との関連を強く指摘できるものといえる。

なお、調査範囲内における、その他の施設としては、入口部のやや中央寄りの床面に径1m、深さ40cm程の穴があり、入口施設との関連も考えられる。また、床面は全体に貼り床され堅緻であり、住居址中央部付近に、径40~50cmの範囲で焼土が検出された。

硯以外の主な出土品は、入口施設張出し部に須恵器坏・蓋が、入口部奥の穴に接した床面上より須恵器甕などが出土した。

本住居址からの出土遺物は、円面硯を含めほとんどが須恵器であり、土師器の出土量はきわめて少なく、該期の普遍的あり方を示している。

本住居址からの出土遺物は土師器甕、須恵器円面硯・坏などがある。

土師器の図化できたものは、14図8・9の2点のみである。8は口縁部の破片で、全体形は不明であるが長胴の器形が考えられる。9は、小型甕の底部片である。

円面硯は、脚台部径26.2cm、硯面部径14.8cm、器高8.8cmを測る大型品で、全体の1/2程残存する。硯面部は平坦に仕上げた後に堤・縁とも断面三角形の突帯をはり付けたもので、陸は使用のため磨滅し、平滑である。脚台部は、裾が大きく開き、4ヶ所に方形の透しがあり、それぞれの間際に1本の縦位の沈線を引き、透し下端の位置に2本の沈線を横位に施している。また、縁部と透し部の中間は、ヘラ削り痕を明瞭に残している。全体にわずみ色を呈し、胎土中に微石粒を含むが、胎土・焼成ともに良好である。

他の須恵器は、無台坏(14図11~16)有台坏(14図17・18、15図4~7)甕(15図1・2)小型鉢(15図3)蓋(15図8・9)がある。

無台坏は、14図11・12が底部ヘラ切りで、同図13~16は糸切底である。有台坏のうち、15図4と6は「上」の字の刻書がある。15図7は、皿状であり、蓋の可能性もある。

15図1の甕は、ほぼ完形品であるが、全体に焼成が悪く、赤灰色を呈し、一見土師器かと思うほどである。

15図3は、全体に薄い器壁で、口縁部がわずかに外反する玉縁状を成し、胎土・焼成ともに良好であり、金属器模倣品と考えられる。

図化できた蓋は2点のみであるが、いずれも坏類に対応するものである。

15図10は、砂岩製の砥石で、上下2面が平滑で、明瞭な使用痕がある。

出土遺物からみて、底部糸切の坏などに若干新しい傾向はみられるが、総合的にみて8世紀後

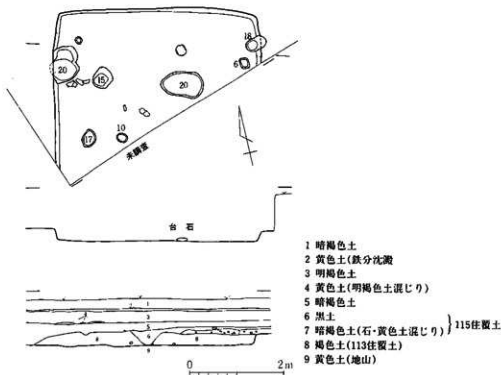
⑦ 113号住居址 (挿図9、第3図)

調査区南隅TANBD68が中心の住居址である。調査区域外にかかり、ほぼ半分の調査であった。遺構検出時に、土師器・須恵器が多量に出土したが、113号住居址の調査掘り下げに入ると出土は無くなった。検出面に別住居址床面があった様子で、この面を115号住居址とした。方形竪穴住居址で主軸方向はN106.3°Eと推測し、規模は4.3mの方形であろう。覆土は褐色土のほぼ一層であった。壁高は検出面から30~26cmを測り、垂直にちかい。床面は比較的堅い部分もあったが、床面を成す地山は礫層といえる程石が多く、全体的には軟らかであった。支柱穴は精査したが確認できなかった。床面上の穴はほとんどに黒色土が入っており床面を切っていた。炉は未調査区で東壁側に位置すると思われる。

遺物は該期の他住居址と同様に出土量は少ない。1~3は壺の破片であり、4は欠山式の壺である。5は台石で遺構図に入っている石である。7は磨製石砲丁、8は打製石砲丁である。

時期は弥生時代後期中島期である。

(佐々木 嘉 和)



挿図9 TAN・KUR 113号住居址

⑨ 114号住居址 (挿図10・11、第16・17・18・27図)

調査範囲内西側の位置にあり、107・117号住居址、掘立柱建物址などと重複し、西隅は調査対象外のため未調査であるが、1辺が9mのほぼ方形の全体形を把握することができた。

ほぼ全体の調査を実施したわけであるが、他遺構との重複により、本来の遺構が存在しているのは、全体の1/2～1/3程であり、元々の姿を捉えることのできない部分もあった。

カマドは、北東壁の中央部にあり、原形はだいぶ崩れていたが、石芯粘土カマドで、たき口部周囲に焼土の広がり認められた。カマド位置から主軸方向はN43°Eを測る。

竪穴内部の施設としては、多数の穴がある。具体的な性格を特定できるものは、P₁～P₃がその深さの共通性やその配置から支柱穴といえ、未調査部分に存在の予測される1本を含め、4本柱の上屋構造と判断される。

それ以外の穴については、明らかに他の遺構に属する物を除いてもかなりの数であり、それらは本住居址に関連するものといえるが、具体的に個々の穴についての性格付は困難といえる。いづれにしても、上屋構造あるいは、内部施設の基礎部分に起因した穴、もしくは貯蔵穴的な性格を持つものと推測される。

出土遺物は多く、土師器・須恵器の各器種がある。

土師器はいずれも破片で、ある程度器形の知れる口縁部と底部につき図示した。

16図1～3は甕の口縁部で、1は胴外面を縦位、内面を横位のハケ整形痕を残す。2も同様にハケ痕を残すが、よりこまかなハケであり、口縁部は明瞭に横ナデされている。3は、外面胴部と口縁内面部にカキ目を施し、若干新しい要素が認められる。16図4は、古墳時代前期の甕口縁部で、弥生時代後期中島式土器の最終形態を示し、混入品である。

底部(16図5～12)は、甕もしくは小型甕と考えられる。5は、長胴の甕で、外面全体に縦位のハケ目を施し、内面は指頭でおさえた後にこまかなハケで調整しており、胎土・焼成ともに良好であり、当地方産の土器とは考え難いものである。8～11は、小型甕もしくは小型の壺の底部と考えられる。12は、木葉痕があり、胎土等から弥生時代中期壺と考えられ混入品である。

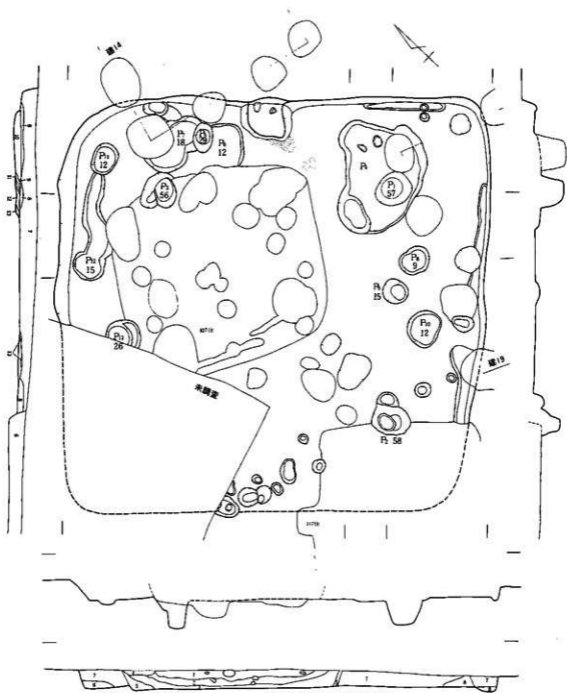
環類については、いずれも小破片のため図化不能であるが、畿内系の旋暗文を施した小破片4片が出土しており、同様に図化不能であるが、胎土・焼成ともきわめて不良で、明らかに当地方産の小破片に上記暗文を模倣したと考えられる小破片が1点ある。

また、同様に図化不能であるが、環口縁部がゆがんだ感を受ける土師器小破片があり、耳皿的な容器が存在した可能性もある。

須恵器は各種あり、甕・杯・蓋・高坏などがある。

甕(17図1～4)を掲載したが、大半は胴部片である。1は、大型品の口縁部のみの破片である。2は胴部片であり、1と同一個体の可能性もあり、胎土・焼成は良好である。3はやや小型の口縁部片、4は底部片で、いずれも焼成不良である。甕胴部はいずれも叩目が施されている。

環類(17図5～11、18図1～5)は、無台と有台とがあり、口縁部破片については、どちらと



- 1 ~ 5 107住覆土 107住参照
- 6 黒褐色土(黄色土混じり)117住覆土
- 7 黒灰色土(焼土・炭少量混じる)
- 8 黒灰色土(黄色土混じり)
- 9 黒色炭層

- 10 黒色土(焼土・炭混じり)
- 11 黄色土(炭混じり)
- 12 黒色土(炭多量混じる)
- 13 黄色土

0 2m

挿図10 TAN-KUR 114号住居址

も看取不能品もある。これらのうち、16図13、17図12、18図1.2と、図化は蓋として扱ったが18図7は、底径の大きさから盤とすべき物であろう。

17図6は、胎土・焼成とも極めて良好で、外面に「美濃」の刻印がある。また、17図7・8・10にはカマ印とみられる線刻がある。

18図6は、胎土・焼成とも良好であり、内面は赤色を呈し、蓋付の合子といえる。

17図7～12は蓋であるが、7については先述のとおり、盤と考えるべきかもしれない。このうち、9は、17図6の坏と同様の胎土・焼成であり美濃須恵と考えられる。

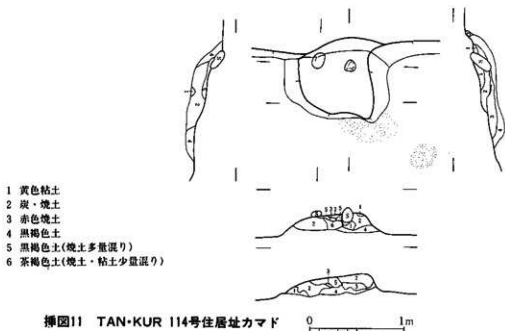
17図13は小型の鉢であり、全体に丁寧に作られているが、焼成不良で、内外面ともに乳白色を呈し、軟質である。

17図14・15は、高坏脚部で、15は端部を欠くが、ほぼ同型態であり、脚端部が大きく開き折り返し状となる。

土器以外の遺物として、鉄器2点があるがいずれも欠損品であり、用途等不明である。27図10は、長さ20cm程の湾曲したもので、9は、長さ10cm程のへの字型に折れ曲ったもので、いずれも円形の断面を成し、工具類の柄部分と考えられる。

以上、本住居址の出土遺物については、他遺構との重複のため、一部の混入遺物はあるが、奈良時代前半に位置づくものといえる。また、「美濃」刻印須恵器を所有した本住居址の遺跡内における位置付けは、慎重に検討の上決定すべきといえる。

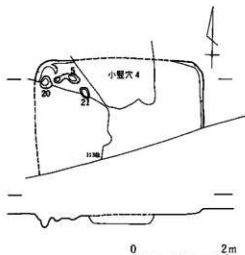
(小林正春)



標図11 TAN・KUR 114号住居址カマド

0 1m

㊦ 115号住居址（挿図12、第20図）



挿図12 TAN-KUR 115号住居址

調査区南隅近くKURBE67に検出したが未調査区にかかった。113号住居址を切り小竪穴4・穴に切られる。検出時に黒色土と暗褐色土（挿図5参照）が入った部分があり、115号住居址とした。規模は3.6mの隅丸方形竪穴住居址であるが、検出面から7～5cmで床面になり壁高はわずかである。床面は軟らかく凹凸がある。柱穴は113号住居址の壁にかかって2本を検出したがあまり深くない。

遺物はすべて破片であるが出土量は多く、土師器・須恵器・灰釉陶器片などである。小竪穴4との切り合いの為、一応出土位置で分けたが、遺物にほとんど差がなく、図版も同一版に組んだ。

時期は遺物から平安時代中頃である。

（佐々木 嘉 和）

㊧ 116号住居址（挿図13、第4図）

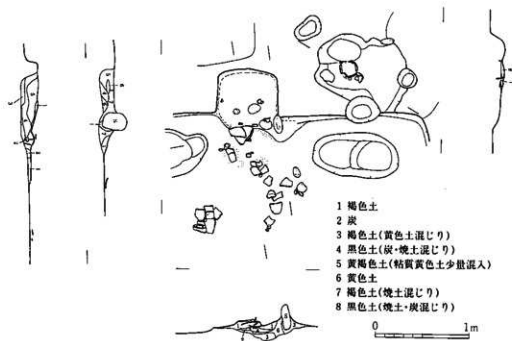
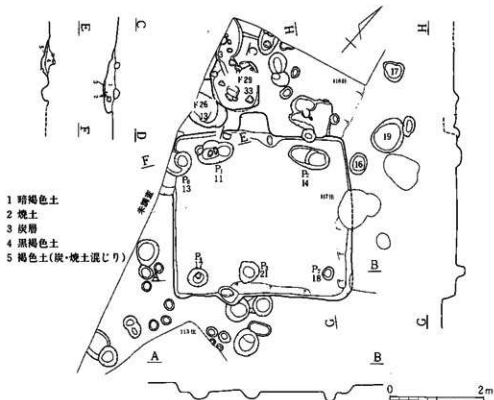
114・117号住居址、土坑26・29及び、後世と考えられる複数の穴に切られている。北と西側は調査範囲外となる。確認された部分は炉址と床面の一部のみで規模等はすべて不明の住居址である。壁は土坑29の北側に検出された部分が考えられるが、長さ40cm、高さ9cmのみの確認で別遺構の可能性がある。把握された床面はタタキ状で堅いものであるが凹凸が激しい。炉址は同一掘り方内に新旧二つが確認され、いずれも土器埋設炉である。焼土は比較的少なく、旧炉址には土層断面の観察によっても認められなかった。

出土遺物は、炉址に使われていた甕二点と有肩扇状形石器一点のみである。

時期は、決定材料に乏しいが、弥生時代後期後半に位置付けられる。

㊨ 117号住居址（挿図13、第19図）

107号住居址の南側に検出した。114号・116号住居址を切り、壁の一部を後世の穴に切られている。全体が調査でき、方形竪穴住居址である。規模は3.3×3.8mを測り、主軸方向はN43°Wを示す。覆土は黒色土にブロック状の黄色土が混じる一層で、人為的に一気に埋められているものと考えられる。壁面は垂直な立ち上がり成し、壁高は南側が25cm、114号住居址と切り合う北側で10cm前後を測る。周溝は確認できなかったが、カマドのある北西壁を除き、壁直下に幅



挿図13 TAN-KUR 116・117号住居址, 土坑26・29

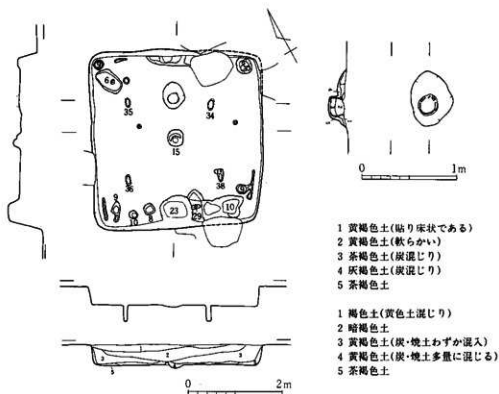
20cm、深さ3cm程を測る浅い凹み部分が認められた。床面は平坦で、南東壁ぎわを除き堅いタタキ状を成す。主柱穴は確認できなかった。本址に伴うと考えられる穴として、 P_1 ・ P_2 ・ P_7 がある。 P_1 は炭と焼土が覆土中に多量に混入しており、カマドに付属する施設である。 P_7 は上面に貼り床状の黄色土が認められ、本址より古い穴の可能性もある。他の穴は住居址プラン検出中に掘り方が確認されており、後世の穴である。カマドは北西壁のほぼ中央部に造られており、石芯粘土カマドと考えられる。袖部は残存状態が悪く、右袖の芯石を確認したのみであるが、床面の状態から判断して、これ以上住居址内側には延びていなかったと考えられる。壁外に床面と同じ深さで掘り凹められた45cmを測る張り出し部分があり、土層断面の観察により、煙道部を造るために掘り凹められたことが確認された。焼土のみの堆積層は認められず炭が混入するものである。またカマド前の床面には2m程の範囲に炭が広がっていた。

出土遺物には土師器壺・鉢・坏・須恵器短頸壺・甕・蓋・高台付坏のほか、灰釉陶器碗があるが19図4・5・10・13・14は混入品である。13の碗は土坑29の破片と接合した。

時期は8世紀代である。

(佐合英治)

⑭ 118号住居址 (挿図14、第4・5図)



挿図14 TAN・KUR 118号住居址

調査区中央からやや西TANBF59を中心に調査し、112号住居址・建物址14・溝址23に切られる。3.75×3.65mの隅丸方形竪穴住居址であり、主軸方向はN30°Eを測る。壁は検出面から44~34cmあり、垂直に近い壁面を成す。覆土はほぼ4層に分かれ、上位2層は凸レンズ状に入っていた。床面上の最下層には、焼土が多量に混入していた。床面は焼けておらず火事の住居址と推測していたが、廃棄後床面に少し土が堆積した頃、中央部で火が焚かれたものであろう。床面はほぼ平坦でタタキ状になっており、非常に堅く壁下が20cm前後の中で少し軟らかい程度であった。主柱穴は4本で平面形は20×10cmの隅丸長方形を成し、住居址の主軸方向に長軸を合わせて掘っており、深さは38~36cmで、やや内側に傾斜している。平面形から割り材使用の柱が推測できる。南壁下に穴の連続する凹部が検出され、入口施設と推測した。中央からやや右側で長楕円形の小穴は、外側に向って斜めに掘られている。床面中央の穴は深さ15cmで緩く掘り込まれているが、底部は床面の様に堅くなっていた。他の小穴は間仕切りに関係するものであろう。炉は北側主柱穴間中央に位置し、土器埋設炉で壘の上半分を埋設している。掘り方は小さく壘が入るだけの穴であり、壘の内外に顕著な焼土は認められず炭が混んでいるだけであった。周溝状の小溝が北東隅を除く3箇所を確認したが狭く浅い。

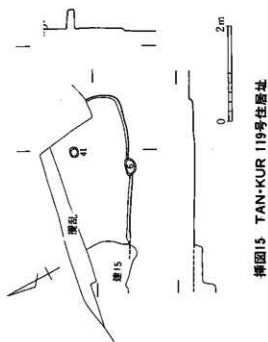
遺物の出土量は少なく、埋設炉の壘(4図4)と、石器が主なものである。壘の頸部には波状文を施し、底部近くは薄く成型され、艶磨きが施こされている。壘片(5図1~3)は、いずれも小片である。4は高杯の坏部で艶磨きがあり、5は脚部の小片である。6・7は環状石斧の未製半欠品で、8は凹石である。10は横刃型石器で刃部にわずかなロー状光沢が認められる。

時期は弥生時代後期中島式期である。

⑩ 119号住居址 (挿図15、第5図)

調査区の北西側TANBI59にかかって約1/4調査した。隅丸方形竪穴住居址であるが、規模・主軸方向は不明である。112号住居址・建物址15に切られており、壁は10cm以下とわずか残っているだけである。床面はタタキ状で非常に堅く良好であった。主柱穴と思われる1本は南東隅にあり、直径20cmの不整形形で深さは41cmを測る。他の施設は確認できなかった。

遺物はごくわずか出土しただけであり、小片である。5図11~14はすべて壘片であり、波状文・斜走短線文・簾状文が施されている。



時期は床の状態・遺物から弥生時代後期中島式期である。

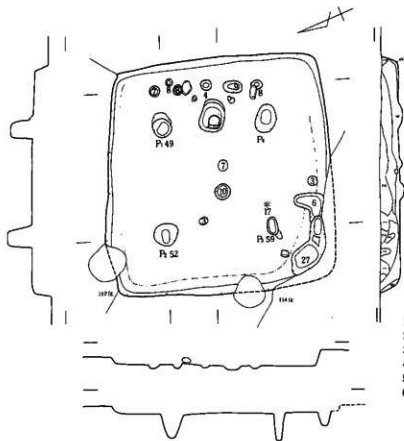
㊤ 120号住居址 (挿図16、第6・7図)

BH62を中心に検出し、112・114号住居址、建物址14に切られる。5×4.6mの隅丸方形竪穴住居址であり、主軸はN108°Eを測る。覆土は黒褐色土で明瞭に検出された。壁上部は垂直に近く下部は緩くカーブを持って床に接している。床面は壁下と神図の一点鎮縁の間はやや軟らかで、そこより内側は良く叩き締められており、非常に良好であった。主柱穴はP₁~P₄であり主軸方向と同じ長軸の長楕円形である。北東壁下に穴と石2個がほぼ直列に並び、炉址と壁の間に何らかの施設があったものであろう。

遺物は該期住居址と同様に少なく甕・壺・石器等である。甕(6図1~10)は口縁が水平に近く折れ、文様は波状文のみのもの(1・2・5)と波状文と斜走短線とで構成されるもの(3・4)を持っており外面は磨きで仕上げられている。2は炉に使われていた甕である。壺(11~14)の破片は小さく全体形を把握できないが、底部の内側は剥離している。打製石廬丁(7図1

~4)は刃部にロー状光沢が残っている。5は有肩扇形状石器で完形である。6・7は磨製石鏃と未製品で、8は砥石、9は敲打器である。短い管玉(27図18)は半欠品で穴が完通していない。

時期は弥生時代後期後半の中島式期である。



- 1 黒色土(新しいピットなど)
- 2 黄色土粒混じり黒褐色土
- 3 黒色土
- 4 褐色土
- 5 黒色土の粘質土
- 6 黄褐色土(基盤黄色砂土と黒色土の混じり)

挿図16 TAN-KUR 120号住居址

0 2m

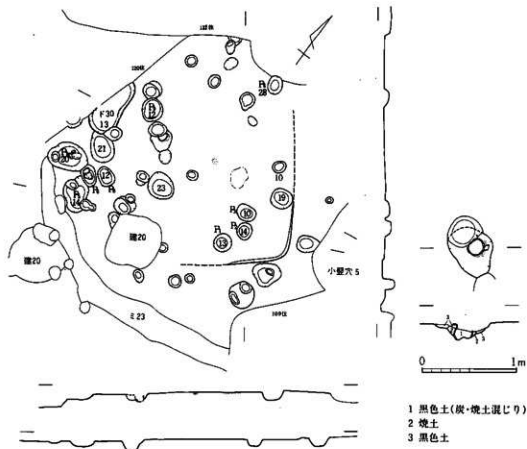
⑩ 121号住居址（挿図17、第1・2図）

BJ62中心に弥生時代中期の土器が出土し、住居址検出に務めたが確認できた所は少なく、炉と壁がわずかで床面の確認は一点鎖線で囲んだ部分のみである。炉は壘埋設炉で新しい穴に一部切られている。底部を欠いた壘を埋めており外側に焼土がみられた。

遺物の出土量は少なく壘・壺・石器である。壘（2図1～11）には台付（10）もあり、施文は口唇部に刻目文、頸部に波状文・羽状条線文等の組合せである。壺（13）の底部近くは隠削りで整えている。打製石斧（1図18・2図14）は2個出土し、18は石鍬で刃部に著しい使用痕が残る。磨製石斧は扁平片刃（15）が出ている。16は横刃型石器、17～19は磨製石鍬の未製品である。

時期は弥生時代中期終末の恒川式期である。

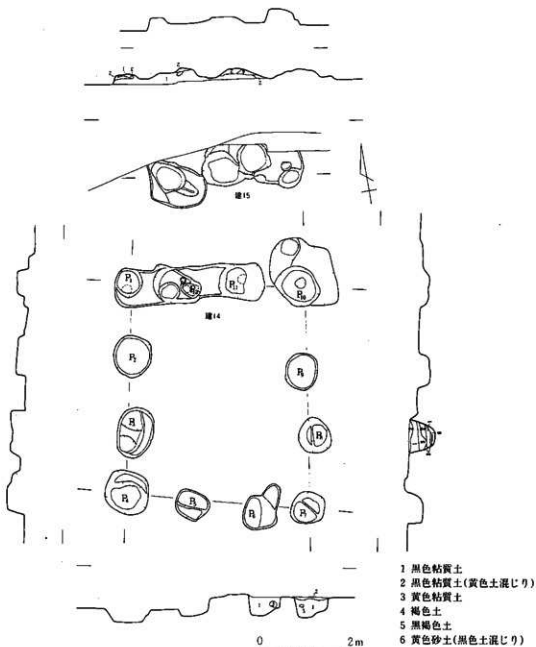
（佐々木 嘉 和）



挿図17 TAN-KUR 121号住居址, 土坑30

2) 掘立柱建物址

① 建物址14 (挿図18)



挿図18 TAN・KUR 建物址14・15

調査区中央から北西よりTANBG60を中心に検出した掘立柱建物址である。建物址15と桁行方向を同一にし、118・120号住居址を切り112・114号住居址に切られる。規模4.6×3.8mで柱間3×3間、桁行柱間1.53m、梁行柱間1.26mを測り桁行方向はN8.7°Eを示す。柱穴平面形はほとんどが不整形で、径は60cm以上で比較的大きく、深さは住居址に切られて浅いものもあるが、最も深いものは56cmを測る。底部レベル差は最大で25cmある。P₁・P₂・P₃・P₄の底部には柱痕と思われる凹部が検出された。P₂にはP₃寄りに別の柱痕と思われる凹部もある。

遺物は他遺構との重複があり比較的多く出土している。弥生時代中・後期土器片、土師器・須恵器片などである。

時期は遺構の切り合い関係から、平安時代よりは古いが決め手に欠ける。R153バイパス発掘調査時に検出した建物址7とはほぼ一直線上に並び、建物址15と共に共通の性格を持つものと思われる。南側にはこの線上に並ぶ建物址は検出されず、南端の建物址であろう。南にやや離れるがAの調査区に、これらの建物列と並行する建物址17・18の2棟を検出した。建物址群の性格を考察するに有力な手がかりであろう。

④ 建物址15 (押図18、第23図)

調査区北壁にかかって柱穴4個を検出し、掘立柱建物址15とする。119号住居址を切り、別建物址と切り合っている様子があり、直線上には並ばない。柱穴掘り方は不整形で比較的大きい。

遺物は他の建物址に比べて出土量が多い。左端の穴の底部近くから土師器甕(23図1)が出土した。破片であるが1/4個体あり、時期の決め手になる可能性がある。小片であるが建物址14の柱穴出土の遺物と同一個体片も出土している。

時期は建物址14と同時期であり、平安時代より古いが詳細時期は不明である。

⑤ 建物址16 (押図19)

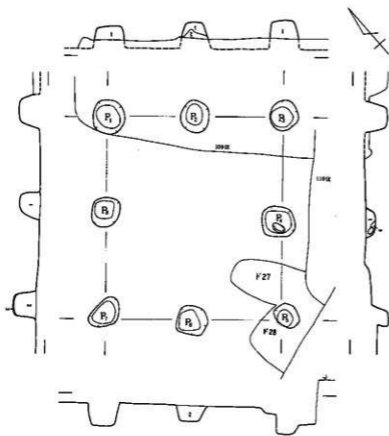
BK66を中心に検出し109号住居址・土坑28を切る。規模は4mの方形で2×2間の掘立柱建物址であるが、桁行方向は確認できなかった。覆土には焼土が混り、P₇の底は焼けていたが性格は把握できなかった。柱掘り方は不整形で底のレベルもそろっていない。

時期は切り合い関係から平安時代であろう。

⑥ 建物址17 (押図20)

TANA区試掘トレンチに穴を検出し、拡張して建物址17を確認、調査した。

溝址12を切るが調査区の面積の関係上完掘はできず、桁行2間・梁行3間を調査した。桁行全長は不明であるが、柱間は外側が1.8m次が1.3mである。梁行全長は4.02mで、柱間は1.34mを測り、桁行方向はN10.5°Eを示す。柱穴掘り方はすべて不整形で、直径は90~60cmを測る。覆土中に地山に含まれる大小の石が混入しており、P₆・P₇には柱痕と思われる石の無い所が確



挿図19 TAN-KUR 建物址16

- 1 黒色土(焼土混じり)
- 2 黒色土
- 3 焼土
- 4 黄色土(焼土混じり)

認できた。深さは検出面が地山の青黄色粘土上面であり、40~25cmと浅い。底部レベル差は最大26cmである。

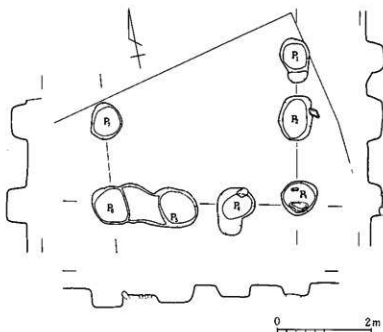
遺物は柱穴覆土中出土だけであり量は少ない。弥生時代中・後期土器片、土師器・須恵器片などであるが実測可能なものはない。

時期決定材料はないが、建物址17・18共にR 153 バイパス調査で検出した建物址7と規模・方位が類似しており関連する建物址群の一つであろう。

⑤ 建物址18 (挿図21)

TANA区の試掘トレンチに穴を検出し、拡張して建物址18として調査した。溝址12を切り建物址17と桁行方向を同じくする。

掘立柱建物址であり規模は4.63 × 4.08 m、柱間3 × 3間で、柱間寸法は桁行1.61m、梁行1.36



挿図20 TAN-KUR 建物址17

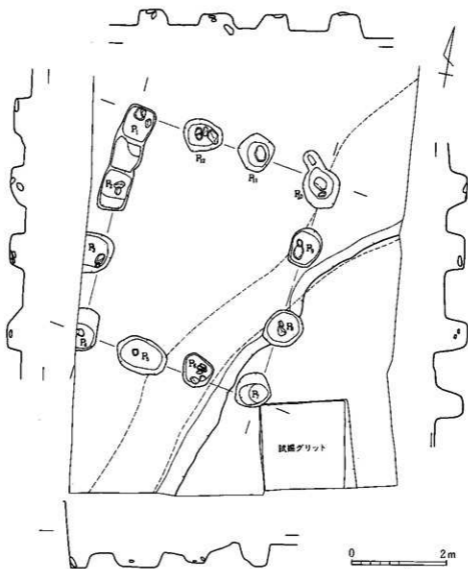
mを測り、桁行方向は $N 7.5^{\circ}E$ を測る。柱穴掘り方はほとんどが不整形であるが最少径60cmと比較的大きい。覆土中には地山に混入している大小の石が入っていたが、底部に礎石と思われる扁平な石を入れたものがあり、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5 \cdot P_6$ の石は礎石として良いであろう。深さは検出面が平坦でないので、差が70~30cmと大きい、底部レベル差は最大で14cmである。

遺物は柱穴覆土中の遺物のみであり出土量は少なく、弥生時代中・後期、土師器、須恵器片などである。すべて小破片で実測可能なものはない。

時期は決め手になるものがないが、一群の建物址と同時期であろう。 (佐々木嘉和)

⑥ 建物址19 (挿図22・第23図)

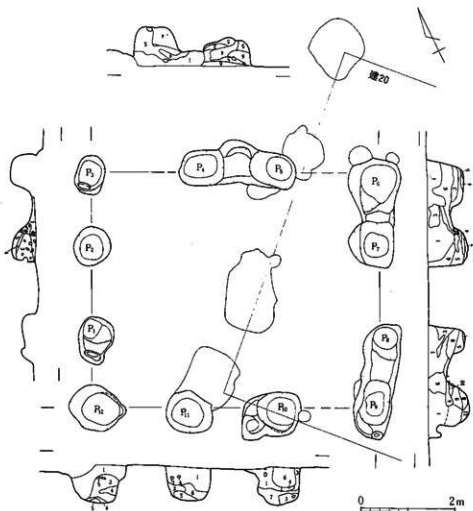
114号住居址、掘立柱建物址20のプランと同時に検出された。 $P_1 \sim P_3$ は114号住居址を掘りあげた後に確認され、貼り床されていた。 $P_4 \cdot P_5$ は掘立柱建物址20のR・Rと切り合う、覆土はほぼ同じであったが、柱掘り方の土層観察により、本址が切られていることを確認した。3×3間の掘立柱建物址である。規模は桁行6.12m、梁行4.9mを測り、桁行方向軸は $N 117^{\circ}E$ を示す。柱間は桁行2.04m、梁行1.63mを測る。覆土中には10~5cmの石が混入しており、特に P_2 の上部には多量に認められた。また、土層の断面では確認できなかったが、底部には極めて薄い、黄色土のタタキ状の層が把握された。柱掘り方は径 $0.6 \times 0.8m \sim 0.92 \times 1.25m$ を測り、深さは58~



挿図21 TAN・KUR 建物址18

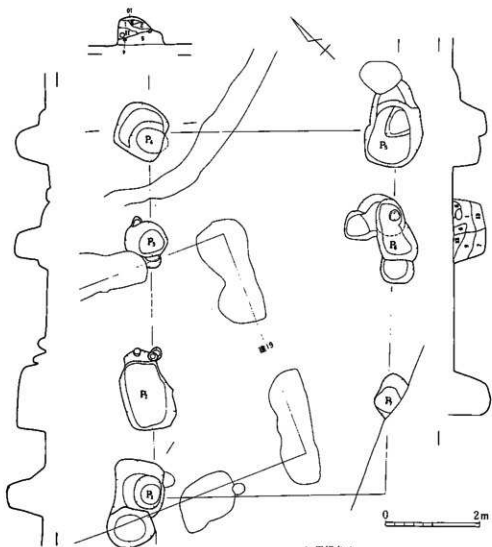
88cmを測るものまであり、バラツキがみられる。平面形はほとんどのものが方形に近い楕円形で南西桁行のR₉・R₁を除いて、二つの柱穴が上部で一つの柱掘り方になっていたと考えられる。壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、底部は丸味をもったものである。

出土遺物から時期決定はできないが、切り合い関係等から、奈良時代に位置付くものと考えられる。



- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | 7 黒色土(灰色砂質土混じり) |
| 2 黄色砂質土 | 8 灰色土(黄色土混じり) |
| 3 黄色砂質土(黒褐色土混じり) | 9 灰色土(黒色土混じり) |
| 4 黄色土 | 10 灰色砂礫土 |
| 5 黒色土 | 11 黒色砂質土 |
| 6 黒褐色土(黄色土混じり) | 12 黄色粘質土 |

挿図22 TAN・KUR 建物址19



- 1 黒褐色土
- 2 黄色砂質土
- 3 黒褐色土(黄色砂質土混じり)
- 4 黄色土
- 5 黒色土
- 6 黒褐色土(黄色土混じり)
- 7 黒色土(灰色砂質土混じり)
- 8 灰色土(黄色土混じり)
- 9 灰色土(黒色土混じり)
- 10 灰色砂礫土
- 11 黄色粘質土
- 12 黒褐色土(灰色砂利混じり)
- 13 黒色土(黒褐色土灰色砂土混じり)

挿図23 TAN-KUR 建物址20

⑦ 建物址20 (挿図23)

109号住居址の南西に検出した。掘立柱建物址19を切っており、小形の穴とも切り合うが、新旧関係の把握できた穴は、 P_1 を切る穴のみである。規模は桁行7.58m、梁行5.25mを測り、桁行方向軸 $N47^\circ E$ を示す。桁行の柱間は2.53mを測るが、梁行5.25mの間に柱掘り方は確認できず、南西隅の1本が調査範囲外となる、 3×1 間の特殊な掘立柱建物址と判断した。しかし、南東調査範囲外へ延びる掘立柱建物址と、北西側の12号・107号・114号住居址の覆土中に柱掘り方があり、それぞれ別棟の掘立柱建物址とも考えられる。柱掘り方平面形は別の穴と切り合い垂んでいる。明確なものは P_1 のみであるが、隅の掘り方は方形で、径1.1m前後を測り、二段構造を成す。他の掘り方は径1m前後を測り、円形と考えられる。検出面からの深さは68~71cmを測り、ほぼ同じであるが、比高は北から南へ深くなり、 P_1 と P_2 では P_1 が26cm深い。壁面はほぼ垂直に掘られているが、部分的に緩やかなものと袋状に成るものもある。底部は丸味をもったものである。

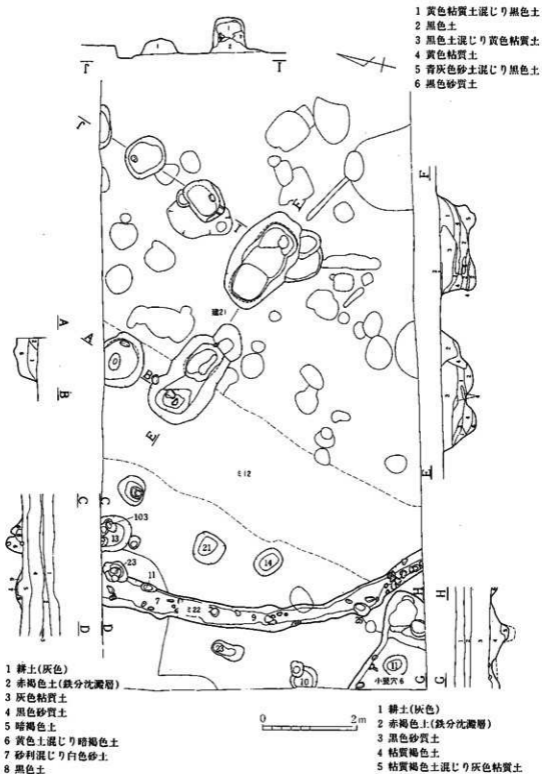
出土遺物は、きわめて少なく、遺物から時期の決定はできない。確認した同規模の掘立柱建物址の切り合い関係等を考えると、奈良時代に位置付く可能性がある。

⑧ 建物址21 (挿図24、第23図)

溝址12、111号住居址を切って検出された。小形の穴と切り合う掘り方もあるが、新旧関係は把握できなかった。 P_1 の柱掘り方が浅いことから、その北側用地境にかかる穴も本址に伴う可能性があり、南北に長い 5×3 間の掘立柱建物址も想定できるが、確実な柱穴7本から、 3×2 間の掘立柱建物址と判断した。規模は桁行3.94m、梁行3.1mを測る。桁行方向軸は $N110^\circ E$ を示す。柱間は桁行3間のうち、外側2間が1.02m、中央が広く1.9m、梁行は1.55mを測る。桁行側は2本の柱穴が1つの掘り方内に掘られている。柱掘り方平面形は P_1 を除き方形に近いものであるが、 P_1 は P_2 と同様に溝址12の覆土中であつたため、上部プランが明確でないが、すべて方形に近いものであつたと考えられる。柱掘り方の規模は径 1.2×1.2 m~ 0.9×0.7 mを測る。検出面からの深さは P_1 が31cmで、 $P_2 \sim P_3$ が75cm前後を測る。 P_1 は他の穴の $1/2$ 程の深さであるが、これは上屋の構造に起因するものと考えられる。壁面はほぼ垂直に掘られ、 P_1 を除いて底部に近い所で袋状の部分をもつ。底部は凹部を持つものもあるが、ほぼ平坦である。

時期を、出土遺物から判断することはできないが、確認された同規模の掘立柱建物址の切り合い関係等から、奈良時代に位置付く可能性が高い。

(佐合 英治)



3) 土 坑

① 土坑24 (挿図25)

BL・BM66にかかって検出し110号住居址を切っている。1×0.9mの不整形で深さは20cm強あり、断面形は逆台形である。覆土は黒色土の一層で、焼土・炭がわずかに混る。底部中央に直径20cmの石があり覆土中にも石が混入していた。中央の石は柱の下に入れた礎石とも考えられる。

遺物は22図10の須恵器蓋が実測可能であったが、110号住居址の遺物であろう。

時期は平安時代以後である。

② 土坑25 (挿図25)

BF60に検出し溝址24に切られ、114号住居址を切る。90cm前後の不整形で深さは20cm弱を測り、断面形は逆台形である。覆土は漆黒色土が主体で、炭・灰・焼土が混入していた。

遺物は小片のみで実測可能なものはない。

時期は切り合いから平安時代以後である。

③ 土坑26 (挿図13)

BB64に検出し調査区外にかかり、116号住居址・土坑29を切る。長軸1.2mの長楕円形で、底部は中央より西側が深く約20cmあり、東側は傾斜している。壁は緩い傾斜の立ち上がりで、断面形は鍋底形にちかい。覆土は黒色土の一層である。

遺物は22図11・12の須恵器坏があるが、116号住居址遺物の可能性がある。

時期は、平安時代以後である。

④ 土坑27 (挿図26)

BK67にかかって検出し調査区外にかかり、建物址20・穴等に切られる。2×0.8mの長方形で深さは10cm前後と浅く、断面形は逆台形である。底部は北西から東南へ緩く傾斜している。

時期は切り合い関係から、平安時代かそれ以前である。

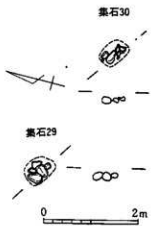
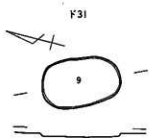
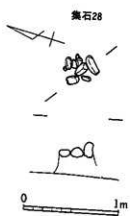
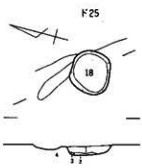
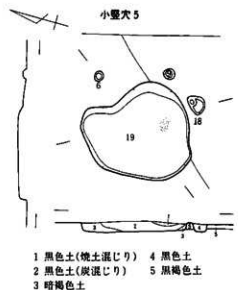
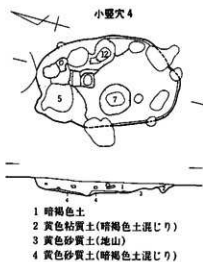
⑤ 土坑28 (挿図26)

BJ67で土坑27の横に検出し、調査区外にかかり建物址16・穴に切られる為、1×1m調査しただけである。2段に掘り込まれており、深い部分で20cmあり、断面形は段の付く逆台形である。

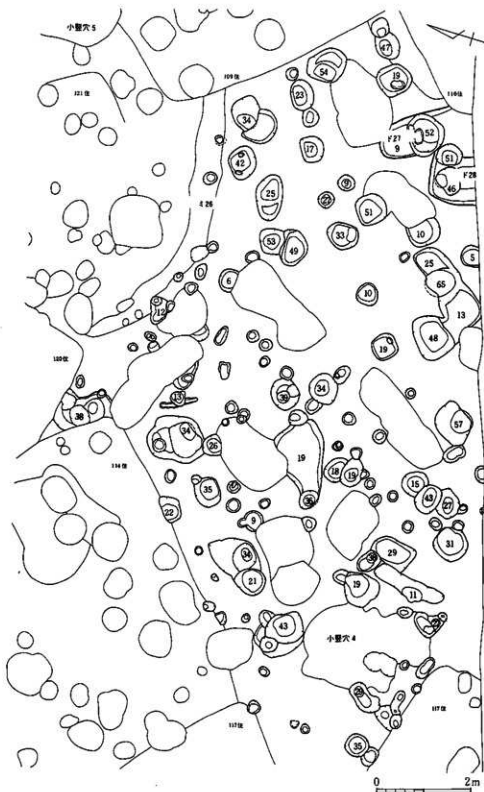
遺物は須恵器高台坏(22図13)が出土している。

時期は切り合い関係から、平安時代かそれ以前である。

(佐々木嘉和)



挿図25 TAN・KUR 小壘穴4・5, 土坑24・25・31, 集石26・27・28・29・30



挿図26 TAN-KUR 土坑27・28・ピット群

⑥ 土坑29 (挿図13)

117号住居址の北西に検出した。土坑26に切られており、新旧関係不明の穴と重複する。覆土は暗褐色土で、上部に15～25cmの石が間ばらに混入し、ブロック状の焼土が認められる。平面形は方形で、径96×98cmを測る。検出面からの深さは13cmを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれているが、南東部は袋状を呈している。底部は南に向かって9cm傾斜しており、ほぼ中央に締まった焼土混じりの炭層が、径40cmの円形に認められた。骨などの出土はないが、遺構の状況から土壌基の可能性はある。

出土遺物には、灰釉陶器碗底部があり117号住居址の破片と接合した。図は第19図13である。
時期は、平安時代である。 (佐合 英治)

⑦ 土坑30 (挿図17)

BF63にかかって検出し120・121号住居址を切っている。1.3×0.6mの不整長楕円形で、深さは10cm前後と浅く断面形は逆台形である。覆土中に土器・石が混入しており、土器は121号住居址の遺物であった。

時期は弥生時代より新しいが詳細は不明である。

⑧ 土坑31 (挿図25)

BJ63にかかって検出し、121号住居址、建物址20を切っている。1.7×1mの長楕円形で深さは10cm以下と浅い。底部は東南から北西へわずかに傾斜している。性格、時期共に把握できなかった。 (佐々木嘉和)

4) 小竪穴

① 小竪穴4 (挿図25、第20・21・27図)

TANBE66にかかって検出し、115号住居址を切り穴に切られる。3×1.9mで長楕円形の小竪穴であり、深さは20～6cmで長軸方向はN17°Wを示す。覆土はほぼ一層で暗褐色土が入っており、底部は凹凸が著しく軟弱で穴状を成す所もある。

遺物は規模に比較して多い。115号住居址を切り、遺物も混入しているが差が無く、小竪穴4の範囲から出土したものは第21図に組んだが、115号住居址と分けられないものは第20図に組んである。

21図1はロクロ製の土師器壺であり、底部は回転糸切りである。4は取手付きの壺片であるが小片であり全体形は確認できない。

時期は遺物から平安時代中期であろう。

④ 小壜穴5 (挿図25、第22図)

BL63にかかって検出し、109号住居址を切っている。直径2m前後の不整形円形で、深さは20cmあり、底部はほぼ平坦であった。

遺物は多く土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。土師器壺(22図1)は小形であり、須恵器は甕(2) 坏(3・4) 蓋(5・6)がある。灰釉陶器は碗(7) 皿(8・9)があり、8の高台内には窠印がある。

時期は平安時代前半である。

(佐々木嘉和)

④ 小壜穴6 (挿図24)

溝址12・22の南西用地境に検出された。西と南側が調査用地外になるため、全体規模、平面形等は不明である。覆土は粘質の褐色土一層で、一気に埋まったものと考えられる。検出面からの深さは20~30cmを測る。比較的緩やかに立ち上がる壁面で、底部には凹凸がある。壜穴内に2個の穴を確認したが、本址に伴うものか否かは不明である。

出土遺物に図化できるものは無いが、土師器坏、須恵器壺、灰釉陶器碗のほか、上層出土の陶器片がある。

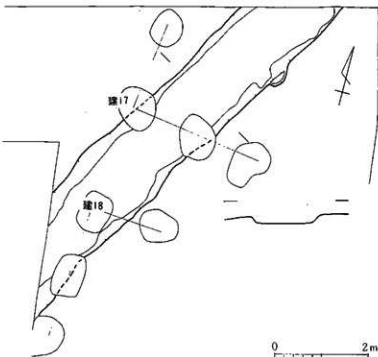
時期は、出土遺物に混入品もあるため明確でないが、平安時代と考えられる。(佐合 英治)

5) 溝 址

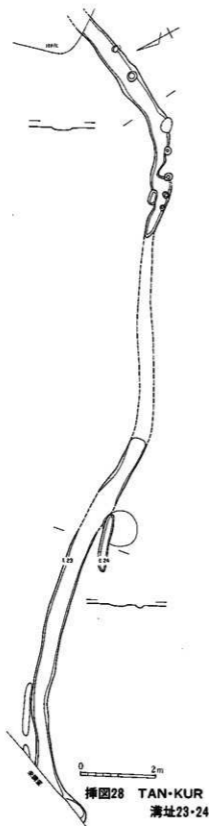
① 溝址12

(挿図7・27、第23図)

調査区2箇所を調査、両方で約15mであり、R153バイパス発掘調査時、溝址12の続きである。111号住居址を切り、建物址17・18 21に切られる。TANA X 59中心で確認した部分は、巾3~2m、深さ1m前後であり、下層に障が入っていた。TANA O70中心に調査した部分は、巾1.5m前後で、検出面から20cmと浅く、壁・底共に地山の石が露出している。



挿図27 TAN-KUR 溝址12



遺物の出土量は少なく、土器片と石器である。23
図4・5は壘口縁の拓形で、11・12は雑な成形の有
肩扇状形石器である。

時期は、R 153バイパス調査時に与えられた「弥
生時代後期に掘削され、古墳時代前期に埋没した」
ものといえる。 (佐々木嘉和)

② 溝址22 (挿図24)

溝址12の西側に検出した。南端が溝址12を切っ
ている。東側を中心とする弧を描いており、長さ7m
程を確認した。幅40～70cm、深さ4～12cmを測る。
壁面と底部との境はあまり明瞭でなく、きわめて緩
やかな掘り込みである。覆土のほとんどは検出面上
層の暗褐色土に石が混入したもので、底部には薄い
砂層が認められる。また、壁面には締まった黄色土
混じりの褐色土が認められたが、人為的に叩かれた
ものかは把握できなかった。

出土遺物はなく、時期、性格等は不明である。
(佐合 英治)

③ 溝址23 (挿図28)

調査区を斜めに横切る溝址であり、長さ20mを確
認した。巾は約50cmで深さ20cm以下と浅く、検出で
きない所もあった。覆土は暗褐色土が入っており、
水の流れた痕跡は確認できなかった。性格、時期共
に不明である。

④ 溝址24 (挿図28)

溝址23の横に検出土坑25を切っている。長さ1.5
mを確認、巾は25cm前後であり、深さは10cm以下で
ある。確認した範囲も少なく、性格、時期共に不明
である。

(佐々木嘉和)

挿図28 TAN-KUR
溝址23・24

6) 集石

① 集石26 (挿図25)

BD60に検出し直径50cmの範囲に、石が集中していた。掘り方は把握できず石も一層であった。時期は平安時代以後と推測したが、性格と共に不明である。

② 集石27 (挿図25)

BE 60に検出、集石26の東側に位置し不整長楕円形の掘り方に石が集中していた。石は掘り方底部までは入っていないが、3～4層重なっている。

遺物は石の間に、須恵器坏・高台付坏の破片が混入していた。

時期は集石26とはほぼ同時期と思われる。

③ 集石28 (挿図25)

BC64で117号住居址の覆土上部に検出した。黒褐色土中に40×40cmの範囲で石が集中していた。掘り方は検出できず石を残して117号住居址を調査した為、挿図の様な状態になった。

遺物の出土はなく、時期は切り合い関係から平安時代かそれ以後であろう。

④ 集石29 (挿図25)

112号住居址床面に検出した集石である。直径30～15cmの石が5個60×50cmの範囲に並んでいたが性格は不明である。

時期は平安時代の112号住居址より新しいが詳細は不明である。

⑤ 集石30 (挿図25)

集石29と共に112号住居址床面に検出した。直径30cm以下の石が約10個、不整長方形に並んでいた。集石同様に性格は不明である。

遺物は1点の鉄滓が石に混ざって入っていた。

時期は集石29と同時期であろうが、詳細は不明である。

(佐々木嘉和)



挿図29 TAN・KUR 杭列

7) 杭列

① 杭列1 (挿図29)

調査区の北側壁近くで、長さ18mにわたって検出した木杭の痕跡である。杭痕跡は褐色土面であって、灰色土が充填しており、規模は 4×4 cmの方形から 4×1.5 cmの長方形があり、深さは20~5cmである。比率的には長方形のものが多く、杭列の方向に長軸をそろえている。列は緩く曲がっており、畦畔の土止の杭と推測した。

時期は確認できないが、中世以後であろう。

(佐々木嘉和)

8) その他

① 柱穴等 (挿図26他)

114号住居址東南側の建物址16・20からんで多数検出された。この部分には他遺構が無く地山面である。径1m以下がほとんどで、深さは50cm以下である。住居址の検出されなかった地山面にも、分布状態の濃淡はあるが検出した。遺構覆土中に掘られたものは検出できず、覆土土色も様々であり、建物址になるものもあると思われるが、確認はできなかった。

時期の把握はできないが、大多数の穴は他遺構と関連があり、長期間にわたって掘られたものである。

② AD~AO57ライトレンチ (附図1、第27図)

調査範囲の北西端が、国道153号線バイパス調査時に自然地形にそった溝址が重複して確認された部分の南側に当たる。バイパス調査時に全体を把握できなかった溝址もあり、グリットの57ラインに沿って、幅2m、長さ23mのレンチ調査を行なった。しかし、溝址8以外は確認できなかった。最深部がAK~AMにあり、溝址8の底部と考えられる。溝址11の中心部もこの部分がやや東寄りにあると考えられるが、奈良・平安時代遺物を包含する礫土層までを確認するにとどまった。AN~AO

の部分では遺物包含層が砂利層に推移し、遺物の出土量も多い。溝址11の最深部に押し出されて堆積した土と考えられる。AD～AKの部分では厚い礫土層と砂質土のレンズ状の堆積が複数認められた。一気に埋まったものと考えられ、層位から中世以降と考えられる。

遺物は、一片も出土しない層もあるが、土師器甕・高坏・内黒坏・須恵器甕・高台付坏などがあり、皆破片である。

時期は、中世から奈良時代までであることを把握したが、個々の溝址の時期を明確に判断することはできなかった。

(佐合 英治)

⑨ 遺構外出土遺物 (第24・25・26図)

弥生時代

中期と後期の土器・石器がある。

24図1～6・10～12は中期末の恒川式土器の破片であり、1・4・6・10は壺、2・3・5は甕の破片である。11・12は壺の底部と考えられる。

同7～9は後期中島式土器の壺の破片である。

26図の石器のうち1～9は中期に属すると考えられるが、1については縄文時代のものである可能性もある。

同10～12は当地方弥生時代後期の典型的な石器であり、9も該期の可能性がある。

古墳時代

土師器・須恵器の小破片が出土しているが図化できるものはない。

奈良・平安時代

土師器・須恵器・灰釉陶器・金属器がある。

土師器はいずれも小破片であり、図化可能な須恵器・灰釉陶器のみを掲載した。

須恵器は各種あり、24図13はほぼ完形の高台付の坏で、若干の時期差はあるが、25図3～7も同様坏の底部破片である。24図14は短頸壺破片で、15は大型の甕底部破片である。25図1・2は小型の円面硯脚台部の破片で、1は方形の透しと縦位に沈線が施された胎土良好の品で、剥落箇所もあるが全体に自然軸が付着する。2は、十字型の透しと縦位の沈線を施したもので、胎土中に小石粒を含む。25図8・9は壺の破片である。25図10・11は灰釉陶器片で、10は碗、11は短頸壺の蓋である。

25図15は緑釉陶器底部片で内外面全体に淡緑色の釉薬がかかり、碗もしくは皿である。なお、小片のため図示できなかったが、奈良時代に属す、ら旋暗文を施した畿内系土師器坏片がある。

25図16は、砂玻璃碗の口縁部破片で、口縁部のろ程が2つになって出土した。他に鉄製品(27図1～17)が出土しており、11～14は刀子片である他は用途等不明である。これらの多くは、該期

に属すると考えられるが、古墳時代あるいは中世以降に属することも否定できない。

中 世

該期出土遺物の多くは小破片のため図化可能な物は少く、25図12~14を掲載したのみである。

12は土師質の小型の坏で、いわゆる「かわらけ」で顕著な糸切痕があり、 $\frac{3}{4}$ 程残存し、全体にぶ厚い作りで、口唇部に炭化物が付着し、灯明皿として用いられたと考えられる。

13は、小型の山茶碗で $\frac{3}{4}$ 程残存し、胎土中に微石粒を多く含み、口唇部付近に灰釉の自然釉の付着が認められる。

14は、青磁片で、碗の底部とみられるが、全体形は不明である。 (小林 正春)

2. 田中・倉垣外地籍4599番地（昭和61年度恒川遺跡群範囲確認調査）

4599番地において確認し、調査した遺構は以下のとおりである。

竪穴住居址	12軒（内遺構不明住居址2軒、番号は付けていない）
掘立柱建物址	4棟
土坑	1基
小竪穴	1基
方形周溝墓	2基
橋址	1基 等である。

1) 4599番地土層状況（挿図30）

調査範囲内における土層堆積状況は、4598・4601番地と基本的に共通するが、当地点が台地の凹んだ部分に当り堆積が厚いので若干の説明を加える。

3地点共に共通する土層堆積状況は順次上から耕土・黒色土・暗褐色土・褐色土・黄色砂質土（地山）であり、遺構の確認は褐色土か地山の黄色砂質土面である。

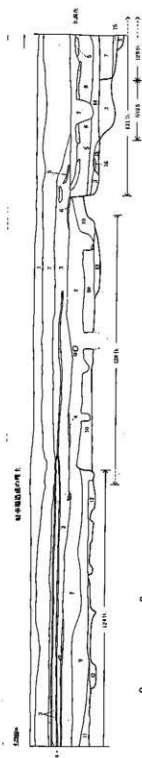
4599番地はやや凹地状になり堆積層も多くなっている。黒色土から暗褐色土層上面にかけて1～3面の鉄分とマンガン粒の沈着層が見られ、中世以前の耕作面あるいは生活面が複数あったと考えられる。遺構検出面については、断面観察によれば平安時代住居址等の掘り込みを、褐色土で把握できるが最終的には地山の黄色砂質土面となった。調査範囲内の東側約1/2付近で、旧地形（地山面）が様相を変える。4601番地側は地表面からの深さ0.8～1.2mとほぼ平坦であるが、東側1/2付近から傾斜が始まり、東端では地表面から地山の黄色砂質土上面まで1.5～1.6mと土砂の堆積が厚くなる。

2) 住居址

① 122号住居址（挿図31、第31図）

KURAB65を中心に検出し、建物址22・24・小竪穴7・柱穴群に切られる、4.4×4.1mの隅丸方形竪穴住居であり主軸方向はN55°Wである。壁高は20～6cmで、地山の検出面が緩く傾斜している為に差が出てしまった。住居址の北西側半分は、切り合いが特に著しい。覆土は褐色土に黄色土の混入したほぼ一層である。床面は黄色土で比較的軟らかく、主柱穴も床から30cm弱と浅い。カマドは北西壁中央に位置し、他遺構に切られているが、粘土カマドである。カマド中央と思われる位置から、土師器壺・甔が出土した。焼土の量は少なく中央の遺物周囲と、上部の検出面に散布していた。

遺物の出土量は少なく、実測できたものは、ほとんどがカマド出土品である。東隅主柱穴の周



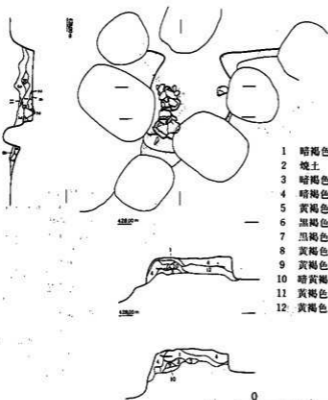
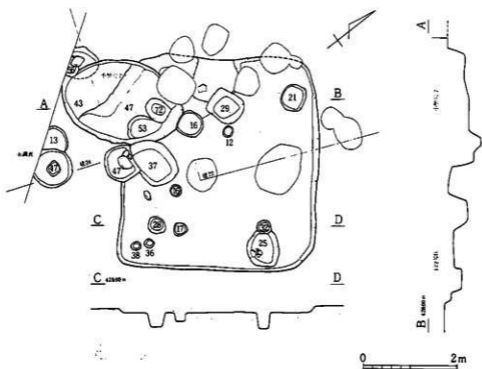
- 1 灰色泥土 (水田耕土)
- 2 黄褐色土
- 3 黒色土
- 4 マンガン沈澱層
- 5 黄色土 (ブロック)
- 6 褐色砂利
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土 (炭混り)

- 9 褐色土、黄色土混り (124号住覆土)
- 10 褐色土、黄色土混り (128号住覆土)
- 11 黄褐色土 (124号住覆土)
- 12 黄褐色土 (124号住はり床)
- 13 黄褐色土 (128号住はり床)
- 14 暗褐色土、黄色土・炭混り (131住覆土)
- 15 黒色土 (黄色土混り)
- 16 焼土・炭

団に比較的大きな破片が散在しており、31図2の土師器瓶はカマド出土とこの位置の破片が接合した。1のはほぼ完形の土師器甕は雑な成形でゆがんでいる。3は土師器鉢で内外磨きが施されており、カマドから出土した。

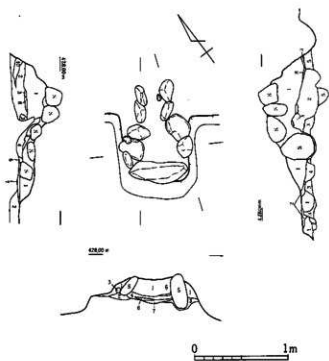
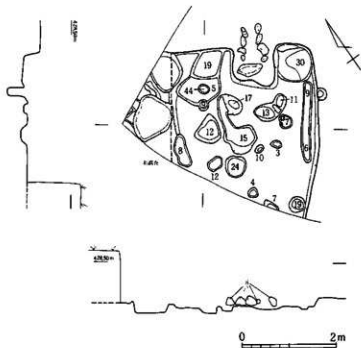
時期は遺構・遺物から古墳時代後期である。

挿図30 4599番地 北東壁土層断面図



- 1 暗褐色土 (ブロック焼土・炭混り)
- 2 焼土
- 3 暗褐色土 (焼土多量灰混り)
- 4 暗褐色土
- 5 黄褐色土 (ブロック焼土・炭混り)
- 6 黒褐色土 (ブロック焼土・炭混り)
- 7 黒褐色土 (灰多量混り)
- 8 黄褐色砂質土
- 9 黄褐色土
- 10 暗黄褐色土
- 11 黄褐色土 (灰多量混り)
- 12 黄褐色土 (焼土・炭混り)

挿図31 TAN・KUR 122号住居址・建物址24・小堅穴7



- 1 暗褐色土
(焼土少量混り)
- 2 暗褐色土
(黄色粘質土・焼土混り)
- 3 黄色土 (粘質)
- 4 暗褐色土
(焼土・炭混り)
- 5 暗褐色土
(黄灰色砂土混り)
- 6 焼土
- 7 炭層
(少量暗褐色土含)
- 8 黄色粘質土
(暗褐色土混り)

挿図32 TAN-KUR 123号住居址

② 123号住居址 (挿図32、第36・37図)

調査区西隅に検出し調査区外に一部がかかり、穴に切られる。隅丸方形竪穴住居址であるが、壁を確認したのは北・東壁だけである。主軸方向はN31°Eを測る。検出時にカマドの芯石が出土し住居址範囲確認に努めたが、確実な壁は2方向で、壁高は20cm以下である。覆土は暗褐色土で、自然礫が多量に混入しており、中央部に集中していた。床面は堅く良好であったが、凹凸があり穴を多数検出した。主柱穴はカマド西側の深さ44cmの穴が、位置的に良いが他は確認できなかった。カマド右側の穴は深さ30cmあり、床面と同位に自然礫が10個前後入り、覆土中には遺物が混入していた。カマドは北壁やや東隅寄りに位置し、石芯粘土カマドで、壁から半分張り出し築いている。袖先端に天井石を掛ける構造で、前方に転落していた。石芯の下にも焼土・炭が入っており、カマドの築き直しが推測できる。カマド前面に炭の散布が著しかった。周溝状の溝を壁よりわずかに内に入った所に検出したが、他施設の可能性もある。

遺物は比較的多く出土したが、穴との切り合いがあり混入したものもあろう。土師器の壺36図1～6は5のみロクロ製である。坏36図7～12はほとんどが黒色土器で7のみ着色していない。須恵器は壺37図7、鉢37図8・9、坏36図13～16・37図1～3である。灰釉陶器は壺37図5・碗4がある。6は硬砂岩の取打器で覆土中の礫に混入していた。

遺物を概観すると須恵器片の出土が多く、図化以外に壺・壺・蓋片がある。

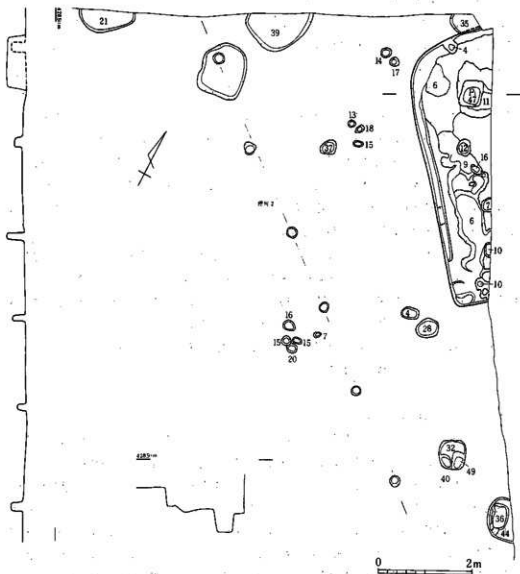
時期は遺物から平安時代の前半である。

③ 124号住居址 (挿図33、第31・45図)

調査区北東壁にかかって検出したが、わずか調査しただけである。128号住居址を切る。隅丸方形の竪穴住居址であり、規模は想定主軸方向で5.6m、方位はN40.5°Wを測る。壁高は40cm前後あり、ほぼ垂直の壁を成している。覆土は(挿図30参照)ほぼ2層で、下層に黄褐色土上層に暗褐色土が入っていた。床面は貼り床になっておりタタキ状に堅く良好であった。壁下やや内側に深さ10cm以下、巾1m前後の掘り込みを施し、床を貼っている。主柱穴は西隅の1本を確認したのみであるが、平面形は約40cm前後の方形で、床から60cmの深さである。カマドは該期他住居址と同じ、北西壁に位置するものと推測した。周溝は壁下に3m強確認したが、深さは5cm以下と浅い。

遺物は調査部が少ない事もあるが、図化したものは砥石1個と白玉4個である。31図8の砥石には紐通しの穴があり、4面共に使用痕が残っている。石質は泥岩系の堅く緻密な石である。45図1～4の白玉は、比較的小型で調査掘下げ中に床面近くで出土したものである。

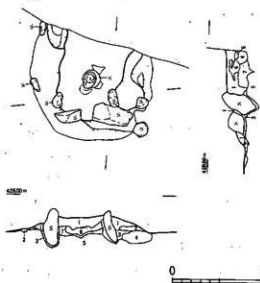
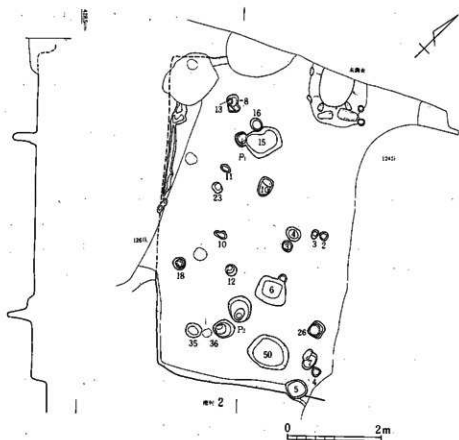
時期は遺構・遺物から古墳時代後期である。



挿図33 TAN-KUR 124号住居址・柵列2・ピット群

④ 125号住居址 (挿図34、第32・33・45図)

KURAE60を中心に検出、126号住居址を切り、124号住居址・柵列2に切られ約半分調査した。隅丸方形竪穴住居址で、規模は主軸方向で6.8m、方位はN41°Wを測る。弥生時代の126号住居址を検出時に平安時代と誤認して先に調査した為、当住居址の壁の残存部は少ない。壁高は



- 1 暗褐色土
- 2 炭混り黄色土 (黏り床)
- 3 黄色土 (粘質)
- 4 焼土 (黒色土炭混り)
- 5 地山 (黄色砂質土)
- 6 褐色土 (焼土混り)
- 7 黄色土 (褐色土混り)

挿図34 TAN-KUR 125号住居址

検出面から30cm前後を測り、ほぼ垂直の壁を成している。覆土は黄褐色土の一層であった。床面は堅く平坦であるが大小の穴が比較的多く検出された。支柱穴は南西側の2本を確認、掘り方平面は小さいが、深さは50cm強である。カマドは北西壁にあり中央に位置すると推測され、石芯粘土カマドである。芯石は袖先端に1個づつ入れてあり、天井石を掛け渡す為と思われ天井石は前方に転落し割れていた。カマド中央からはほぼ完形になる高坏の2個体が出土し、支脚と思われる石に、坏部をかぶせた状態であった。周溝は126号住居址を切っている部分のみに検出し、当住居址の周溝とはいいい切れぬ。

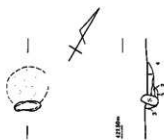
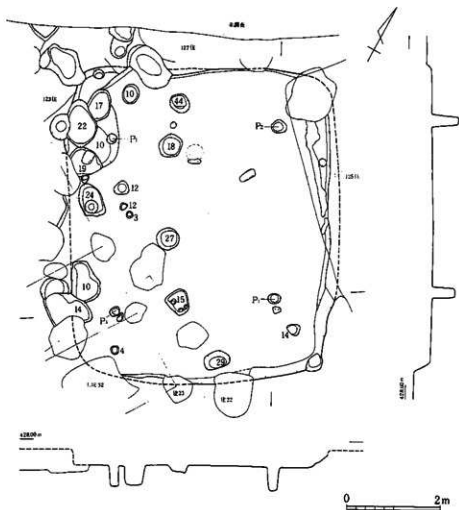
遺物は比較的多く出土しており、カマドの南側P₁周辺を主体に出土した。土師器壺・甗・坏・高坏などであるが須恵器の出土は無かった。32図1の壺と8の甗はほぼ完形である。33図8は土鈴で、南西壁下中央やや南寄りの床面から出土した。直径4.5～4.0cmのややつぶれた円形で、3mmの穴が貫通しており成形はやや雑で、指頭痕と思われる凹凸が残っている。器壁の厚さは穴の周囲で6～5mmを測り、内部には1×0.5cm前後の小石4個が入っている。臼玉(45図5～9)5個は床面近くから出土した。

時期は遺構、遺物から古墳時代後期である。

⑤ 126号住居址(挿図35、第28・29・30図)

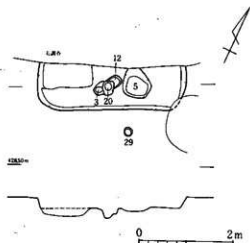
KURAB61を中心に検出した。検出面が平安時代の生活面で、遺物から平安時代の遺構と誤認して最初に調査を行なった。125・130号住居址、掘立柱建物址22・23、櫓址2、柱穴群に切られる。6.5×5.7mの隅丸長方形竪穴住居址であり、主軸方向はN20°Wを測る。壁は他遺構に半分以上切られているが、残っている部分の壁高が40～10cmで、ほぼ垂直の壁面をなしている。覆土は褐色土に黄色土が混入したほぼ一層である。残存部の床面は堅く平坦で良好である。支柱穴は4本で深さは床面から60～40cmであるが、平面形はほぼ円形で小さい。炉は北西側支柱穴間中央でやや中心寄りにあり、炉縁石を持つ地床炉である。直径は約50cmで深さは10cm弱であり、覆土中に焼土・炭は少ない。中心側に長さ30cmの炉縁石を埋めている。

遺物の出土量は多く、ほとんどが床面直上からの出土であり、床面中央を除いて周囲に散らしていた。全体形の確認できるものも多い。28図1の壺はほぼ完形で無文である。2の壺片には口縁下2cmから雑な波状文が施されている。台付壺で器形の確認できるものは4箇体(28図7～9、29図1)あり、7・9は口唇部に刻目文を施す。8は頸部に簾状文と斜走短線文を、29図1には胴上部に、斜走短線文と波状文を施している。29図2～6は鉢形土器で3は小さな台を持っており、5は内外共に朱彩し口縁部に波状文を施している。7・8は同一個体の高坏であるが破片の為、直接接合しない。石器は9の刃部にロー状光沢を持つ磨製石廬丁、12の有肩扁状形石器など出土している。30図5～9は磨製石鏃と未製品であり、2・3の砥石との関連が推測できる。10は海浜石である。土器形態は、猿小場遺跡(注1)14号住居址とほぼ同時期で、比較的調査例の少ない形態であり、良好なセットであり、時期は弥生時代中期終末である。

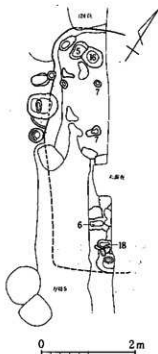


- 1 暗褐色土 (焼土・炭泥り)
- 2 黄色砂質土 (暗褐色土混り)
- 3 暗褐色土 (黄色土混り)
- 4 黄灰色砂質土 (地山)

挿図35 TAN-KUR 126号住居址, ビット群



挿図36 TAN-KUR 127号住居址



挿図37 TAN-KUR 128号住居址

⑤ 127号住居址 (挿図36、第40図)

調査区北西壁にかかって検出したが、南東壁とわずか調査しただけであり、規模・主軸は不明である。壁高は20cm前後でやや傾斜を持っており、床面は軟らかく穴状の凹みがある。調査部分が少なく諸施設は確認できない。

遺物は覆土中出土の磨製石鏃40図1のみであり、時期など不明である。

⑥ 128号住居址 (挿図37、第33図)

調査区北東壁にかかって検出し、125・131号住居址・方周5を切り、124号住居址に切られる。推定規模5mの隅丸方形竪穴住居址であり、主軸方向はN33°Wである。壁の残存部は40cm前後で、やや傾斜を持つ。覆土は褐色土に黄色土が混入した一層であった。床面はやや軟らかく南隅は、貼り床になっていた。調査範囲が少なく、他の施設は不明である。

遺物は、後の穴があり混入があるが33図9・10の高坏軸は良いと思われる。

時期は、124号住居址に切られており、古墳時代後期である。

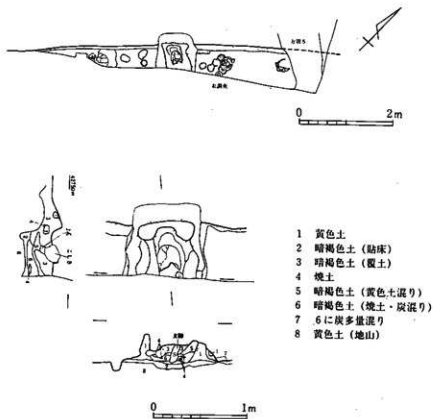
⑦ 129号住居址 (挿図38、第34・35図)

調査区南東壁にかかって検出し、131号住居址・方形周溝墓5を切っている。隅丸方形竪穴住居址と推測できるが、壁一方の部分調査で規模は不明である。主軸方向はN46°Wを測る。調査した壁高は30cm前後で、ほぼ垂直である。覆土は暗褐色土一層である。床面はわずか調査

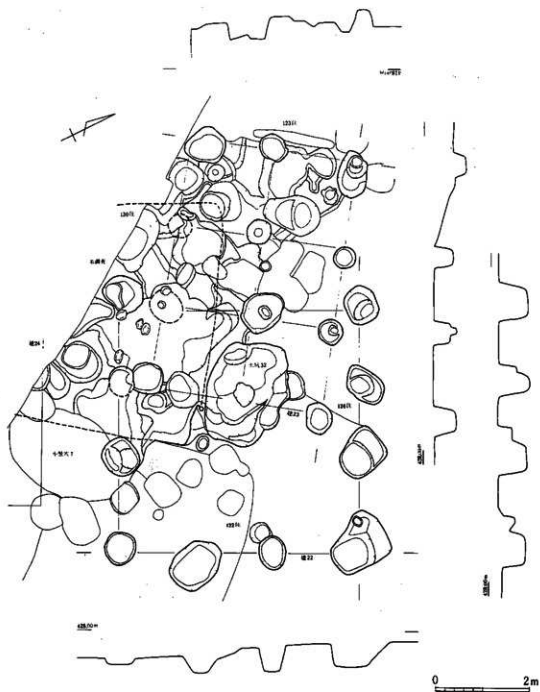
しただけであるが、地山が黄色砂質土の為、軟らかく凹凸がある。カマドは北西壁中央に位置すると思われる。カマドの調査範囲は壁から支脚までで、その間は粘土のみで築かれている。支脚は長さ20cmの石を縦に使っている。支脚と壁の間から甌がほぼ原形を保って出土し、下に坏が入っていた。甌を据置く場合、坏に底部を入れて立てたと推測できる。

遺物は調査範囲に比較して多く、カマドの両側の壁ぎわから出土したが、右側は甌34図1・3・4、埴35図1・2、坏6、高坏8。左側は甌34図2、坏35図4、高坏9。カマドから34図5の甌、35図5の坏が出土したが、須恵器の出土は無かった。砥石35図12は緻密な堅い泥岩で、砥面に刃物痕が著しく残っている。35図10・11は混入品であろう。

時期は遺物から古墳時代後期である。



挿図38 TAN-KUR 129号住居址



挿図39 TAN-KUR 130号住居址，建物址22・23，土坑32・ピット群

㊦ 130号住居址 (挿図39、第40図)

KURAA63の周囲にあった住居址であるが、建物址22・23、小竪穴7・土坑32、穴など著しい切り合いがあり、東隅を確認したのみである。この範囲には暗褐色土が入っており、住居址が存在した事は確実であり、調査掘下げを行なったが、平面の床にならず多数の穴が切り合った状態になった。規模などすべて不明である。

遺物は図化したもの以外は小片である。40図2は須恵器甕片であり、橙褐色を呈しており、表面は細かな叩目、内面は青海波文がある。4は磨製石鐮の半欠品で、5は海浜石である。

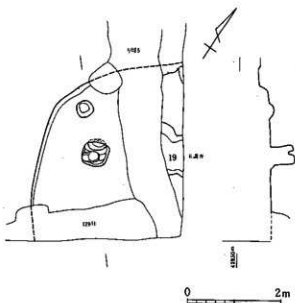
時期は決め手が無く、推測不可能である。

㊦ 131号住居址 (挿図40)

調査区東隅に検出、方形周溝墓5を切り、129号住居址に切られる。隅丸方形の竪穴住居址と推測したが、規模主軸方向など不明である。検出面からわずかで床面の為、壁の高い所で20cm前後である。覆土は黄褐色土であり、床面は比較的堅いが、地山と同様に南東に向かって緩く傾斜していた。主柱穴は1本確認し床面から50cmの深さがある。

遺物は土師器小片が少量出土しているが、実測はできない。

時期は切り合い関係から古墳時代後期である。



㊦ A A60遺構不明住居址

(第38図)

KURAA60と周囲から平安時代の遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。123・126・127号住居址の検出面であり、生活面ないしは住居址の床面であった可能性がある。

遺物は図化したもの3点である。38図1の須恵器盤はほぼ完形で、破片は127号住居址覆土中

挿図40 TAN-KUR 131号住居址

からも出土している。2は高坏か小型の盤であり、3は灰色をした美濃産の坏で、内側に2本の沈線の窯印がある。

時期は平安時代の前半である。

㊤ A C61遺構不明住居址 (第38・39図)

KURAC61と周囲から平安時代の遺物が集中して出土した。125・126号住居址の検出面であり、A C61の中央に焼土(40×20cm)があり、カマドの火床かと推測したが、他の遺構は検出できなかった。

遺物はA C61の焼土周辺に集中し、そこを中心に5×5mの範囲に散在しており、出土量は多い。土師器甕・坏・鉢、須恵器甕・小壺・坏・皿、灰釉陶器碗・皿などが出土している。39図1の土師器鉢は約3/4現存しており、底部の状態から高台があったと思われる。底は回転糸切りで外周はナデである。2～5は黒色土器坏で、5には底部に後から穿孔している。12は須恵器の皿で1/4残っている。13は須恵器の小瓶か小壺の底部である。15～17は灰釉陶器で15は碗、16・17は皿である。

時期は平安時代の中頃である。

3) 掘立柱建物址

① 建物址22 (挿図39、第40図)

KURAB63を中心に検出した掘立柱建物址で122・126・130号住居址を切っている。規模は柱間3×3間、5×5mの方形で、桁行方向は不明である。柱穴掘り方平面形は、不整形方形から楕円形で、長軸は1～0.6mあり、底部レベルはほぼ同位である。

遺物は掘り方覆土中から出土しているが、図化可能なものは須恵器のみである。9の須恵器底部(拓本の中央からやや左下)に粉殻残痕があるが表面でなく、粘土中で底部粘土のほぼ中間である。

時期は出土遺物から平安時代の掘立柱建物址であろう。

② 建物址23 (挿図39)

KURAA62にかかって検出した掘立柱建物址である。切り合いの著しい場所にあり、規模が大きくなる可能性もある。柱間3×2間の竪柱建物址である。規模は、桁行5.2m、梁行3.6mの長方形であり桁行方向はN57°Wである。柱穴平面形は円形～楕円形で直径は60～40cmのやや小型で、掘り方底部に柱痕らしい凹部を持つものもある。

遺物は掘り方覆土中から少量出土しているが、土師器・須恵器などの小片で実測不可能であった。

時期は切り合い関係から古墳時代以後であり、建物址22と前後する時期であろう。

③ 建物址24 (挿図31)

調査区南西壁にかかって検出した掘立柱建物址であり、東隣の柱穴3箇所を調査した。柱間1間ずつで、2.2mと1.4mであり短い柱間を桁行と想定し、方向はN20°Eである。掘り方平面形は不整形形で、覆土中に礫が入っていた。建物址22とほぼ平行しており関連性も推測できる。覆土中から土師器・須恵器の小片がわずか出土している。

時期は建物址22と同時期の平安時代が推測できる。

4) 土 坑

① 土坑32 (挿図39)

KURAA63にかかって検出、130号住居址・建物址23に切られる。規模2×1.5mの不整形形で深さは30cm前後であり、長軸方向はN36°Wである。断面形は逆台形で底部には凹凸があるが、穴に切られている為であろう。

遺物の出土はわずかで、性格・時期共に不明である。

5) 小 竪 穴

① 小竪穴7 (挿図31、第43図)

KURAA65に検出した竪穴状掘り込みであり、122号住居地・建物址22・24・穴に切られている。規模は2.6×1.7mの楕円形で深さは40cm、断面形は逆台形で底部にはやや凹凸がある。長軸方向はN53°Eを測る。

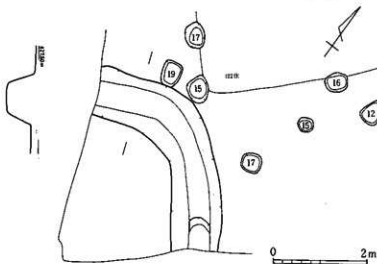
遺物は少量出ているが切り合いが著しいので、確実とはいえない。検出面で43図2の太形始刃石斧が出土したが、当遺構の遺物と確認できず、遺構外出土で図化した。

時期は切り合い関係から、古墳時代より以前である。

6) 方形周溝墓

① 方形周溝墓4 (挿図41、第41図)

調査区南隅に検出、切り合いは無いが調査部分は周溝の一部分である。全体規模は確認できないが、巾約1m底の巾約40cm、深さ60~50cmである。調査を行なった北隅の曲り方から推測して



緩い隅丸方形を呈すると思われる。

遺物は少なく、41図1・2の他は小片であり、1は壺の胴上部片で、2は鉢の口縁部分である。

時期は弥生時代後期である。

挿図41 TAN-KUR 方形周溝墓4・ピット群

② 方形周溝墓5 (挿図42、第41図)

調査区東隅から北東壁にそって約7m調査し、128・129・131号住居址に切られる。周溝の巾は推定で1.5m、深さは70cmである。屈曲部は128号住居址に切られたものであろう。

遺物は少なく、41図3・4と土器の小片である。3は硬砂岩の敲打器で、4は128号住居址覆土中から出土した磨製石鏃未製品である。

時期は弥生時代後期である。

7) 欄 址

① 欄址2 (挿図33)

KURAD60を中心に検出、125・126号住居址を切っている。規模は長さ9.5mで柱穴6個を調査した。柱間は2m前後で方向はN50°Wを測る。柱穴平面形は円形でほぼ垂直に掘り下げており、深さは検出面から25cm前後である。何らかの区画の欄址であり屈曲部の存在も推測される。建物址23と方向が似ており、関連する可能性もある。

8) 石 敷 址

① 石敷址 (挿図43)

KURAF62周りに検出した。4×3mに礫の集中する範囲である。検出した位置は、挿図30の土層断面図で3層と7層の間6層の砂利層と同層である。大小の礫が混在しており直径は30～5cmの範囲である。礫の間に土師器、須恵器の破片も入っており、礫として同様に扱った様子である。R153 座光寺バイパス発掘調査時に検出した道路址1(注2)の延長上に位置し、やや礫が大きいが関連する可能性が強い。

時期は道路址1に平安時代が与えられており、この石敷址も同時期であろう。

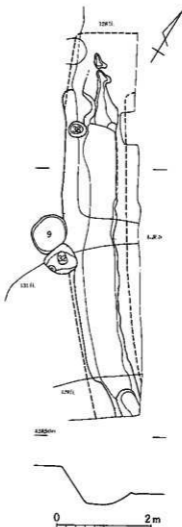
9) そ の 他

① 柱穴等 (挿図43他)

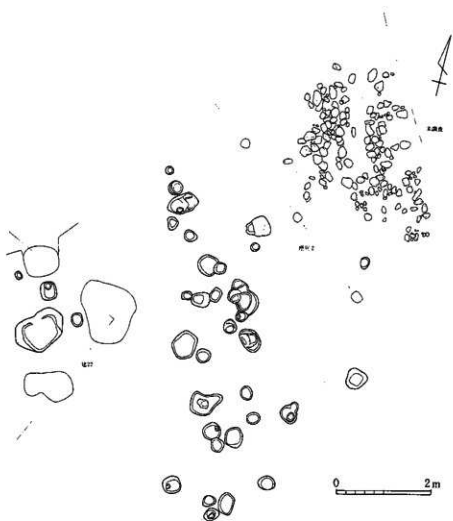
調査区中央～西側に122・123・130号住居址、建物址22・23を切って穴を多数検出したが、穴ごとの新旧関係が確認できずに調査を行なった。掘立柱建物址の可能性が最も強い。

② 遺構外出土遺物 (第41～45図)

恒川遺跡群内のどの地籍にも共通しているが、地表から遺構検出面までの土中に、多数の遺物が混在しており量は多い。完形に近いもの、特徴的なものを遺構外出土としてまとめた。41図5～12は弥生時代中期～後期の拓影である。12は古墳時代前期に入るかもしれない。13は平安時代のロクロ製壘片である。42図4は須恵器環で墨書がある。11～16は磨製石礫と未製品であり石質は硅岩・粘板岩である。17・18は石鎌で17は玻璃質安山岩、18は黒曜石製であり、19は海浜石、20は滑石製の白玉で、直径1.5cmを測る。21・22は土錘、43図1・2は太形蛤刃石斧、3は扁平片刃石斧で他は打製石斧である。45図13～21は遺構外出土の鉄器であり13・14は鉄鎌、15は鎌、16は刀子、17はカスガイ、18は火打金具と思われるが確認はできていない。19・20は茎片、21は釘と思われる。



挿図42 TAN-KUR 方形周溝墓 5



挿図43 TAN-KUR ピット群・石敷址

注 1. 「猿小場遺跡」 1980. 3

飯田市教育委員会

注 2. 「恒川遺跡群」 1986

飯田市教育委員会

3. 田中・倉垣外地籍4601番地（飯田中央農協給油所建設地）

4601番地において確認し、調査した遺構は以下のとおりである。

竪穴住居址	23軒（内3軒はR 153 バイパス調査時の未掘部分）
掘立柱建物址	2棟
土 坑	22基
小 竪 穴	2基
方形周溝墓	1基（R 153 バイパス調査時の未掘部分）
溝 址	6本（内4本はR 153 バイパス調査時の続き）等である。

1) 住 居 址

① 4号住居址（押図44、第48図）

調査区南隅BM44に検出した。R 153 バイパス建設時の調査で東南側約半分を発掘している（注1）。溝址4に切られ、5×6mのやや長方形の竪穴住居址であり軸はN 49.3°Wを測る。バイパス調査時には住居址とするにやや不安があったが、今回の調査で確認できた。バイパスの側溝さきまで掘れなかったので常状に未調査部分が残った。壁高は約20cmある。床面は比較的軟らかで、壁下に巾広く褐色土が入っており貼り床になっていた。それを掘り下げると図の様な凹みになった。主柱穴は今回1本を確認した。カマドは北西壁ほぼ中央に位置し石芯粘土カマドである。元位置を保っていると推測できる石は2個で、攪乱か抜き取りをうけている。焼土は厚く残っていた。袖石以外で断面図にかかった石は支脚と思われる。

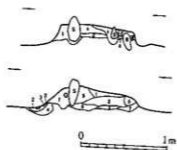
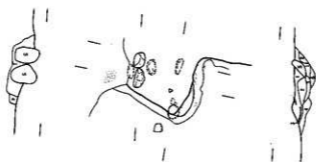
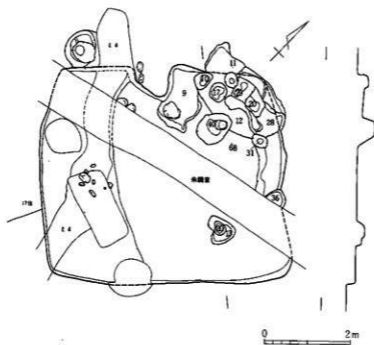
遺物は比較的少なく、土師器甕8、底部10・11、小形甕9であり、バイパス調査時には、土師器甕・坏・高坏が出土している。

時期は古墳時代後期前半の住居址である。

（佐々木嘉和）

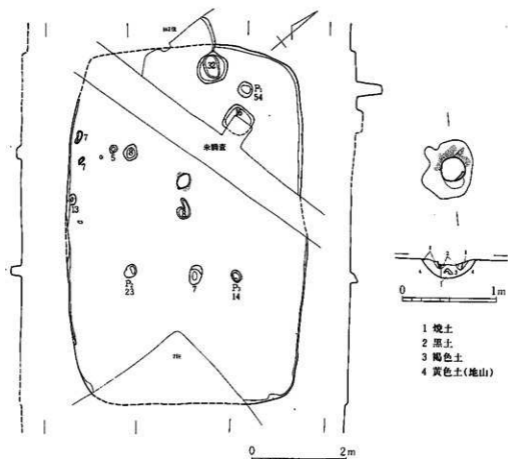
② 9号住居址（押図45）

調査区の南西、R 153際のTANBT44グリットに検出された。検出されたグリット位置からR 153バイパス発掘調査時（注1）の9号住居址の北隅の部分に当り、142号住居址に切られている。本調査においても一部に未調査部分が生じたが、規模7.5×5mを測る隅丸長方形の竪穴住居址であることが確認された。主軸方向はN46°Wを示す。主軸方向の柱穴が確認され、バイパス調査時より北へ2°誤差が生じた。残存する壁高は15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、壁際を除き比較的堅いものであった。主柱穴は4本と考えられるが1本は、わずかに残った未調査部分にかかってしまった。深さは54cmを測る。バイパス調査時主柱穴は14cmと23cm



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土(焼土混じり)
- 3 焼土
- 4 暗褐色土(黄色土混じり)
- 5 4に焼土含まれる
- 6 黒色土(黄色土混じり)
- 7 黄色土(暗褐色土混じり)
- 8 攪乱(黒色土)

挿図44 TAN-KUR 4号住居址・カマド



挿図45 TAN-KUR 9号住居址

であったが掘り足りなかった可能性がある。炉址はバイパス調査時に新旧2個を確認している。

本調査で図化できる遺物は出土しなかった。

時期は弥生時代中期に位置付けられる。

(佐合 英治)

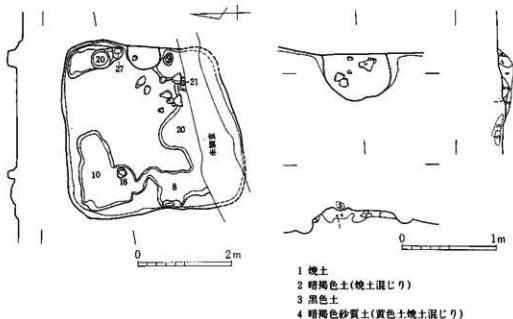
③ 11号住居址 (挿図46、第50図)

調査区南東側B V 44にかかって検出した。R 153 バイパス調査時に南東壁と床面をわずかに調査しており、今回はその未調査部分を調査した。3.5 × 3.5cmの方形竈穴住居址であり、主軸はN 84.3° Eを測る。壁高は20cm以下でやや低い。床面は住居址中央部が比較的堅く良好であったが壁ぎわに褐色土が入っており貼り床になっていた。貼り床部分はやや軟らかく掘りあげて図の凹みになった。穴はいずれも浅く支柱穴の確認はできなかった。カマドは北東壁中央に位置するが壊されている。石芯粘土カマドと推測され、附近の床面に散布している石がその用材であろう。

遺物はやや多く出土し土師器甕1~5、坏6・7・9、黒色土器坏8、須恵器甕10、坏11~13
灰釉陶器碗14、皿15などである。

時代は平安時代前半の住居址である。

(佐々木嘉和)



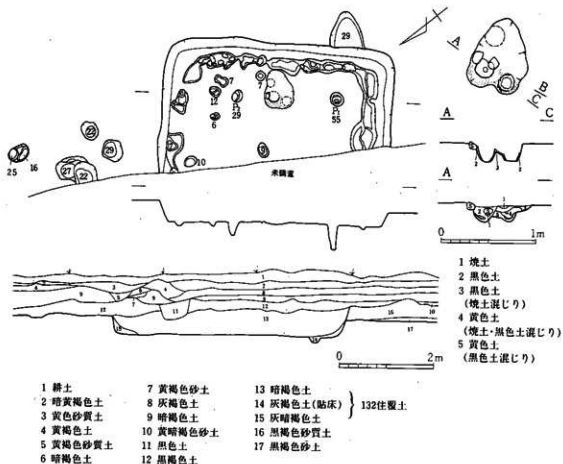
挿図46 TAN-KUR 11号住居址

④ 132号住居址 (挿図47、第46図)

溝址12の西側、TANBU31を中心に検出された。西半は調査区外に及んでおり未検出である。南北4.8m、主軸方向N48.3°Wを示す隅丸方形の竪穴住居址で、壁高は28~45cmを測る。床面はタキキ状の堅く締ったもので良好に遺存している。壁より離れて幅広く浅い周溝が設けられているが、北壁側は痕跡的である。主柱穴は2本確認され、いずれも二段構造状を呈する。炉址はP₁・P₂中間にあり、土器埋設炉である。床面と同じレベルで土器埋設炉1を検出し、その東・南側には焼土が広く認められる。南壁の焼土下に炉1より古い時期の土器埋設炉2が掘えられている。炉址1の東側から土器が出土しており、さらに炉がもう1基あったと思われる。

遺物の出土量は比較的多く、中島式の壺・甕・打製石斧等の出土を見る。

出土遺物等から本住居址は弥生時代後期後半に比定される。



挿図47 TAN-KUR 132号住居址

⑤ 133号住居址(挿図48、第51図)

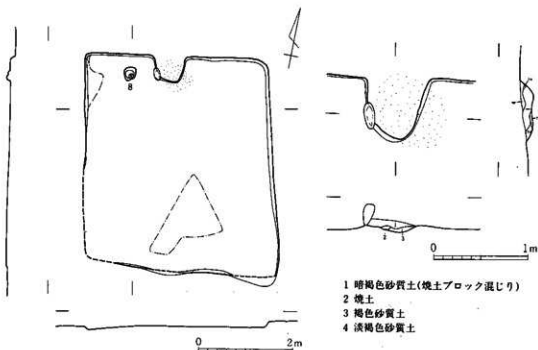
溝址12に重複してTAN BX33を中心に検出された。主軸方向はN 12.9°Wを示し、南北4.4 m、東西3.9 mの不整隅丸方形を呈する竪穴住居址である。検出面からの壁高は2~14cmと浅く南壁と西壁の一部で確認できない部分がある。床面はやや軟らかく、南壁周辺と北西隅に部分的

に遺存しているのみである。主柱穴は検出できなかった。カマドは北壁中央に設けられ、石芯粘土カマドと考えられるが、左袖の一部を残すのみである。焚き口部を中心に厚く焼土が認められまたカマド西側のピット覆土には焼土・灰が多量に混入していた。

本住居址は検出面と床面との比高差が小さく、出土遺物は少ない。床面から土師器甕が出土している。

出土遺物等から平安時代後期に比定される。

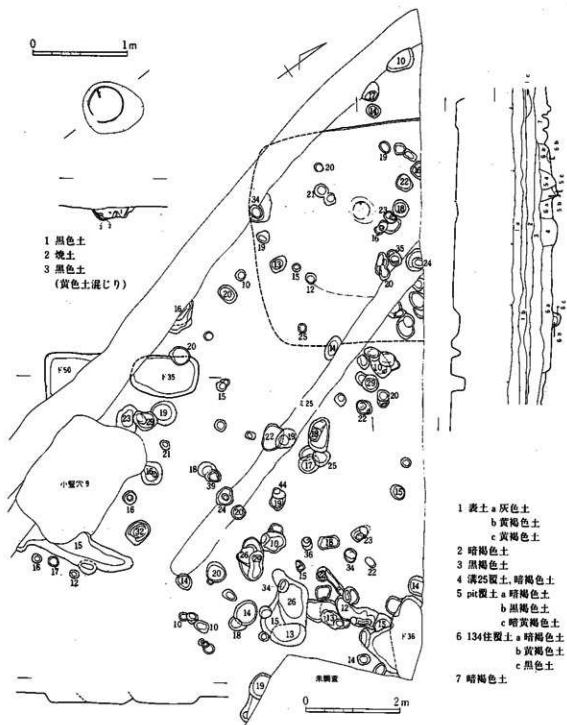
(馬場 保之)



挿図48 TAN・KUR 133号住居址

◎ 134号住居址 (挿図49、第46図)

北東側の遺構検出中に確認された。KURAB36グリットにかかって炉址が検出された。北東側は道路下となり、西隅は溝址25に切られている。北西壁の一部と炉址周辺の床面のみを把握した。主柱穴が不明のため確実ではないが住居址全体の½程を調査したと考えられる。用地境土層の観察により北西・南東方向の一边が4.8m程を測る竪穴住居址と判断した。主軸方向はN63°Wを示す。確認した炉址と壁の位置関係からこの一边が主軸と考えられる。把握した壁高は6cmで



挿図49 TAN-KUR 134号住居址, 土坑35-36-50

あるが用地境土層で確認される壁高は25cmを測り、垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土の
 一層である。確認した床面はきわめて堅い良好なものである。主柱穴は4本と考えられるが時期
 不詳の穴が多数検出され、穴の覆土も同様であるため確認できなかった。炉址は北西壁から1.7
 mの所に位置し、壺の胴部を逆に埋めた土器埋設炉であり、焼土は少ない。

遺物は上面が削平されているため少ない。炉址に埋設されていた壺(8)と甕(9・10)のほ
 か破片が数点のみである。

時期は弥生時代中期である。

(佐合 英治)

⑦ 135号住居址 (挿図50、第48図)

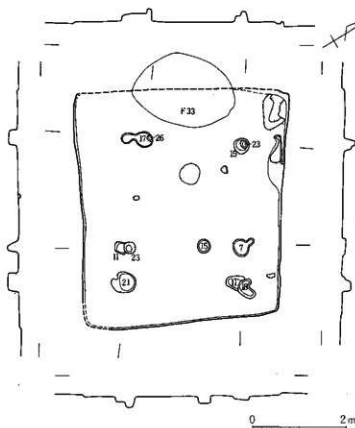
調査区中央からやや北よりのBW36を中心にして、褐色土が地山に方形に入る竪穴を検出し、
 土坑33に切られる。(4.8)×4.2cmの方形竪穴住居址で主軸はN57°Wを測る。壁は残存部最高

で10cm、床面は地山が黄色
 砂質土という事もあり、軟
 らかである。主柱穴は4本
 であるがいづれも浅い。

南東側主柱穴と壁の中間に
 主柱穴と並ぶ穴を検出した
 が、補助的なものであろう
 か。炉と推測した穴は中央
 からやや奥壁よりに位置す
 るが、焼土の確認はできな
 かった。

遺物は木葉痕の残る壺底
 部5と磨製石鐵未製品6の
 他小片がわずか出土してい
 る。

時期は弥生時代中期後半
 である。



挿図50 TAN・KUR 135号住居址

⑨ 136号住居址 (挿図51、第51図)

調査区中央からやや西より、B S 38に焼土・炭・遺物など集中して散布が見られ、住居址にした。溝址12の上面ののっているが、プランは確認できなかった。検出時に確認した以外では床面らしい部分をわずかに調査したにとどまった。

遺物は土師器壺7、須恵器高台付坏8、蓋ないしは盤と思われるもの9など少量出土している。時期は遺物から奈良時代の住居址である。 (佐々木嘉和)

⑩ 137号住居址 (挿図52、第52・53・83図)

T A N A F 42を中心に検出、西隅で138号住居址と切り合う。検出面では切り合い関係がつかめないため同時に床面まで掘り下げたが、結局新旧関係は確認できなかった。138号住居址と切り合う南西壁と連続したピットで切りあった北西の壁は確認できなかったが、想定で5.7×5.5mの隅丸方形の竪穴住居址であり、主軸方向はN33°Wを示す。壁はほぼ垂直に20cm掘られ、138号住居址と切り合う部分では137号がわずかに深く掘り込まれるため4～2cmの壁が残っている。主柱穴は3個を確認したが、西隅は土坑のため確認できなかった。床面はほぼ平坦ではあるが、深さ47～4cmの穴が多くあり、これらの穴の性格は南東壁下中央部の90×80cmで小穴を伴う不整半円形の穴を入口施設と考えた以外は不明である。北西壁中央に厚さ5cmほどの焼土と石が1個認められたため、カマドと想定したが、石芯粘土と思われるカマドの全容は確認できなかったが床面には石を抜いた痕跡が残っていた。

東・西壁際の床面直上には、編物石と見られる16～4cmの小石が10数個まとまって出土した。またP₁から白玉(83図1)が出土している。その他古墳時代の遺物は壺 52図9 内黒の坏10、須恵器壺 53図3 坏4、高台付坏6、高坏7である。鉄器が比較的状态良く出土している。83図7は鎌の半欠品で、6・8は器種不明である。

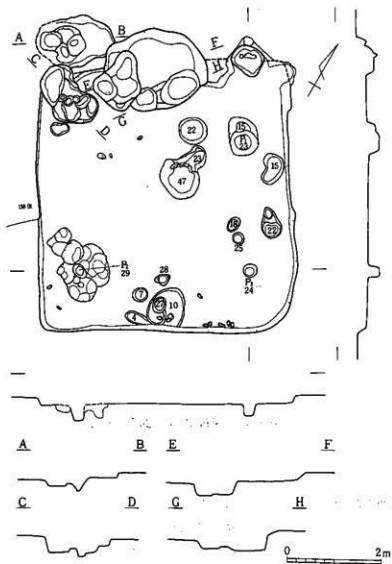
古墳時代遺物と平安時代遺物が混在しており、古墳時代後期の住居址の上部に平安時代の遺構があったと考えられるが、確認はできなかった。

⑪ 138号住居址 (挿図53、第49・83図)

T A N A D 41を中心に検出、東側で約程度137号住居址と切り合う。検出面では切り合い関係がつかめないため同時に床面まで掘り下げたが、新旧関係は不明。東側の壁は切り合いのため認められないが、想定5.5×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址である。カマド・主柱穴が不明のため主軸方向はわからない。住居址の長軸方向はN45°Wを示す。壁は、ほぼ垂直に10cm掘られている。床面はほぼ平坦であり、全面に貼り床が施されていたと考えるが西隅に残るのみである。床面では多数の穴を確認したが、その性格はほとんど不明であり、主柱穴の確定もできなかった。したがってこれらの穴が本住居址に関係するかは不明である。中央附近に焼土が認められたが、カマドとは無関係と考えられるため、カマドの位置・形態とも把握できなかった。



挿図51 TAN-KUR 136号住居址，グリットピット

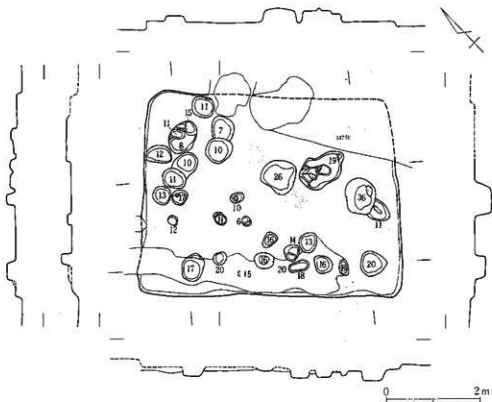


挿図52 TAN-KUR 137号住居址

床面から土師器の鉢 49図1、小型甕2、壺3、高坏4・5・6、坏7~9、須恵器蓋坏の身10、鉄鏝 83図9 が出土している。鉄鏝は平根で半欠品であるが、形態が把握できる。

時期は切り合い関係・遺物から古墳時代後期である。

(吉川 豊)



挿図53 TAN-KUR 138号住居址

⑩ 139号住居址 (挿図54、第53・54・55図)

調査区中央からやや東、BX 41にかかって検出した。149号住居址と切り合うが新旧は不明である。3.4 × 3.2 mでほぼ方形の竪穴住居址であり主軸はN20°Wを測る。壁高は残存部最高20cmでそれ以下が大部分であった。床面は中央部分が堅く良好であり、壁下0.8～0.5m巾に褐色土が入って貼り床になっていた。貼り床部分も堅く良好である。主柱穴と推測できる穴は1のみであるが、これも確実ではない。カマドは北西壁中央に位置し石芯粘土カマドである。中央に石の支脚があり周囲から遺物が出土した。

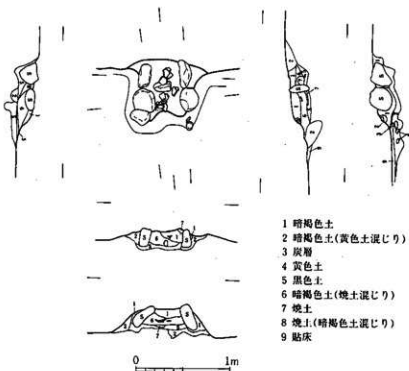
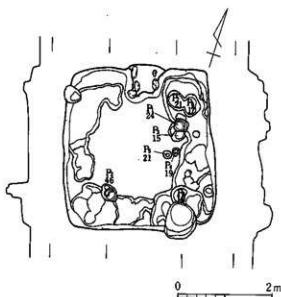
小形の住居址に比較して、遺物の出土量は多く、黒色土器の坏2個 54図1.3 に墨書があった。墨書は「官」と意味不明の線描である。土器器壁 53図8～11の内、底部片には木炭痕が残る。高台付皿は55図1～4の4個があり3・4は黒色土器である。2と3には高台中央に糸切

痕が残っている。
 須恵器は要ないし
 は四耳壺と思われる
 もの 54図15
 環6~14、高台付
 皿 55図8 があり
 環・皿は回転糸
 切り痕が残ってい
 る。灰軸皿7は約
 1/2残っているが、
 やや雑な作りで重
 焼痕が残り高台に
 は砂目があり、胎
 土色調などと共に
 山茶碗に近い。

時期は遺物から
 平安時代後半の住
 居址である。

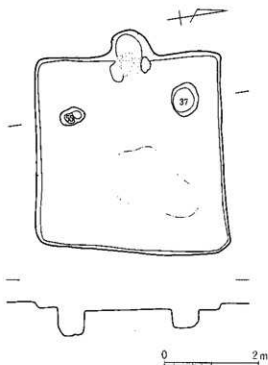
⑫ 140号住居址
 (挿図55、第55
 56図)

調査区南西隅近
 くBQ43周辺に検
 出し148号住居址
 建物址25・26を切
 っている。4.2×
 4.2mの方形整穴
 住居址であり、主
 軸はN87°Wを測る。
 壁高は検出面から
 貼り床面で約10cm
 前後である。床面は
 ほとんどが貼り床



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土(黄色土混じり)
- 3 炭層
- 4 黄色土
- 5 黒色土
- 6 暗褐色土(焼土混じり)
- 7 焼土
- 8 焼土(暗褐色土混じり)
- 9 貼床

挿図54 TAN-KUR 139号住居址



挿図55 TAN-KUR 140号住居址

で堅く良好であった。カマドの下も貼り床されており、最初に住居址の壁ぎわを深く掘り下げ黒褐色土を入れて床を作ったと推測される。主柱穴はカマド側の2本が良いと思われるが確認はできない。カマドは奥壁中央に位置するが、削平されており残存部はわずかであった。石1個が残っており石芯粘土カマドと推測され貼り床上に作られている。火床部の貼り床が厚さ4cm赤褐色に焼けていた。カマドの下から建物址25の柱穴を検出した。

遺物は比較的多く土師器壺 55図9～12 須恵器甕13これは底部の一部で淡茶色を呈し生焼と思われる。坏 56図3～6 は、3が鑿切りで他は回転糸切りである。高台付坏7～10、7・8には糸切り痕が残っている。盤ないし蓋と思われるもの11、蓋1・2が出土している。

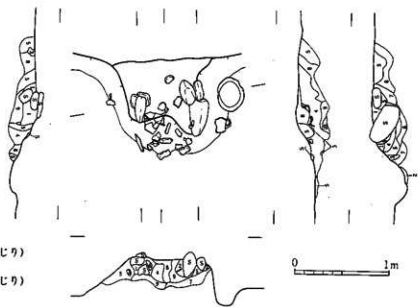
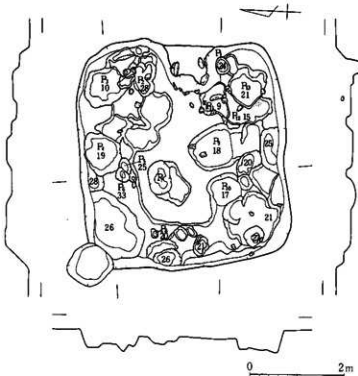
時期は遺物から奈良時代の住居址である。

(佐々木嘉和)

㊦ 141号住居址 (挿図56、第56・57・58・59・60図)

調査範囲のほぼ中央のTANBV42グリットを中心に検出した。北西隅を後世の穴に切られるが全体を把握した。隅丸方形の竪穴住居址である。規模は4.7×4.4mを測るほぼ正方形の平面形を呈する。主軸方向はN83°Eを示す。壁は南東隅で25cm、北西隅が34cmを測る。やや角度を持って立ち上がる。床面はカマド前から住居址の中央部分が堅く良好であるほかは壁面際まで軟弱な貼り床である。この軟弱部分は穴が多数切り合った様な状態で検出された。遺物の混入も認められ掘り下げた所全体が幅広い溝状の凹み部分となった。主柱穴は確認されず溝状凹み部分に不規則に、直径10～20cmの石が出土し、右側部分では石の間に焼土が認められた。カマドは東壁中央部よりやや右に寄った位置にある。両袖の先端部分に自然石を使った石芯粘土カマドである。カマド袖を造っていると考えられる土の中に焼土・土器が混入しており築き替えが行なわれていると考えられる。支脚・煙道等は確認できなかった。

遺物の出土量は多い。土師器壺(56図12)、甕(13～18)、内面黒色処理された坏・鉢(58図1・2・5)、須恵器壺(6)、甕(57図1・2、58図7・8、59図1～3)、蓋(57図3・4) 坏(57図5～12)、高台付坏(60図1～6)などがある。底部削り整形され暗文の施された坏



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土(炭混じり)
- 3 明黄色砂土
- 4 褐色土(焼土混じり)
- 5 黒褐色土
- 6 焼土
- 7 暗褐色土(黄褐色砂質土混じり)
- 8 褐色土
- 9 暗褐色土(焼土混じり)
- 10 黄色砂土(焼土混じり)

挿図56 TAN-KUR 141号住居址

(58図3)と小形甕(58図4)は混入品である。

時代は平安時代に位置付けられる。

(佐合 英治)

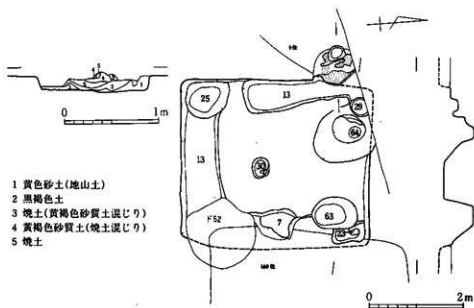
㊦ 142号住居址(挿図57、第60図)

調査区中央から南側、バイパスぎわのBS44に検出した。140号住居址を切るが検出時に確認できず、140号を先に調査してしまった。9号住居址・土坑52に切られる。(3.5)×4mのやや長方形の竪穴住居址であり、主軸はN95°Eを測る。壁高は10cm以下である。床面は中央部分が強く良好であったが、壁下には褐色土が入り貼り床状態になっており中央部と同レベルに、炭焼土が比較的多く混入していた。支柱穴と推測できる穴はない。カマドは東壁南隅に位置し、竪穴部分から張り出す形態であるが、9号住居址に切られ確認できたのは火床と思われる厚さ5cmの焼土のみである。

遺物の出土量は少なく土師器甕 60図7~10、9・10はロクロ成形である。須恵器環11、高台付環12・13などである。

遺物から平安時代前半の住居址である。

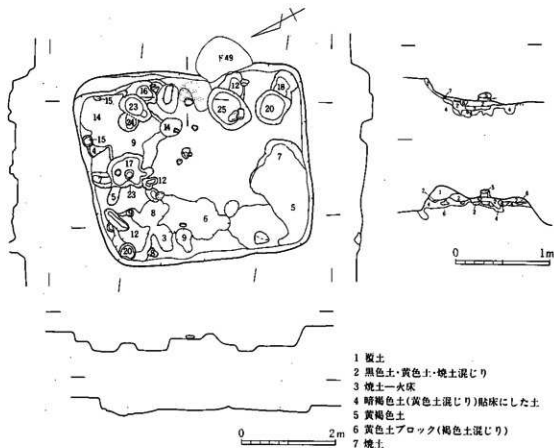
(佐々木嘉和)



挿図57 TAN-KUR 142号住居址

⑨ 143号住居址 (挿図58、第61・62・63図)

調査範囲の西側のTANBQ41グリットを中心に検出された。南側1/2程が148号住居址を切り140号住居址と隣接する。土坑49に東壁の一部を切られている。東隅が溝址17と切り合うが覆土の差異が認められず新旧は不明である。ほぼ全体を調査した。主軸方向はN113°Eを示す。規模は4.7×4.05mを測る。平面形は主軸に直交する方向に長い隅丸方形の堅穴住居址である。壁は切り合の無い北東隅で40cmを測り、南西隅で6cm確認した。壁面は垂直に近い立ち上がり成す。床面はタタキ状の面を確認できなかった。堆山面でわずかに堅い面を床面としたが148号住居址(弥生時代中期)の遺物が密着して出土し、本住居址の床面は2~3cm上面に存在したと考えられる。周溝は確認できなかったが、カマド前部を除き壁直下から幅1.2m程の範囲が溝状の凹み部となった。深さ3~14cmを測る。精査したが支柱穴は住居址内では確認できなかった。カ



挿図58 TAN・KUR 143号住居址

マドは東壁のほぼ中央に粘土カマドが存在したと考えられる。覆土掘り下げ中に焼土が認められ精査しその状況からカマドと判断した。土坑49に上面を切られ、住居址覆土とカマドを造っている土との差がほとんどなかったため右袖部分をこわしてしまった。

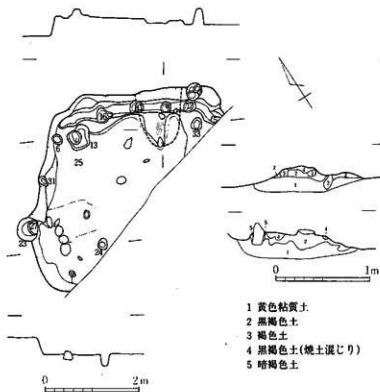
遺物の出土量は多い。土師器甕(61図1~6)、小形の壺底部(7)、須恵器鉢(8)、甕(9、10、62図1~4)、壺頸部(5)、蓋(6~15)、碗(16)、高台付壺(17)、坏(63図1~13)高台付坏(14~20)などがある。

時期は遺物から平安時代に位置付けられる。

(佐合 英治)

㊦ 144号住居址(挿図59、第64・65図)

調査区の北隅KURAK44を中心に検出したが、北側は用地外にかかるため、ほぼ半分を調査したのみにとどまった。想定で4.3×3.6mの隅丸方形の竪穴住居址であり、主軸方向は、N37.5°Eである。壁は垂直に40cm掘られており、北側の壁直下で幅20cm、深さ7~3cmで小穴を伴う周溝を確認した。床面は全体的に凹凸がみられる。全面に貼り床があった形跡があるが、東側壁付



近の一部のみに残る。主柱穴は3本を確認したが形態からみて4本と考えられ、残る1本は用地外であろう。深さは、33~25cmを測る。東側壁際の床面には25~15cmで裏面の焼けた石が5個、壁と平行に並べられており、入口施設と判断した。北側壁の中央よりやや東に寄ったところで、焼土・石を検出したため、石芯粘土のカマドと想定したが、周溝を掘りこんだ後に構築したとみられ、周溝を掘り下げた時点で飛ばしてしまい、全容は把握できなかった。

比較的多数の遺物が床面から出土している。土

挿図59 TAN-KUR 144号住居址

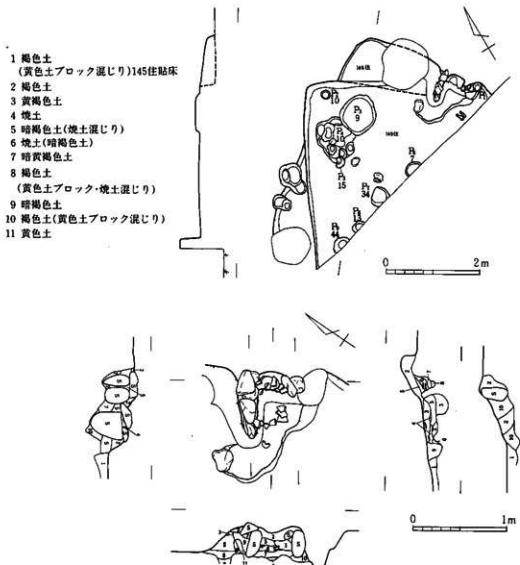
師器類 64図1～8 の内3～6は底部に木炭痕を残している。7は鉢になるかもしれない。内黒の坏9～13、内黒の皿14～16、須恵器鉢 65図1、蓋2、坏3～7、3は筒切りである。皿8・9、9には熏印が残る。灰釉陶器片は10があるが柄と思われる。

遺物から平安時代の遺構である。

(吉川 豊)

㊦ 145号住居址 (挿図60、第65図)

KURAH44を中心に146号住居址を切って検出された。本住居址の南半は調査区外にかかり規模・主軸方向は不明であるが、不整隅丸方形を呈する竪穴住居址である。調査区南壁断面および



挿図60 TAN・KUR 145・146号住居址

び146号住居址カマド断面で本住居址の掘り方と貼り床の一部を確認した。堅く締まった貼り床で、15~25cmの壁がやや急に立ち上がる。重複等のため、明確に柱穴と判断できる穴はない。

西壁覆土上層から高坏坏部が出土している他、土師器甕・小型甕、須恵器坏・甕がある。出土遺物等から本住居址は平安時代後期に位置づけられる。

⑩ 146号住居址 (挿図60、第49図)

KURAI44を中心に145号住居址・方形周溝墓1と重複して検出された。本住居址の南半は調査区外にかかり、また重複する遺構によって全体を把握できないが、隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN53°Eを示す。床面は堅く締まった貼り床であり、10~20cmの壁がほぼ垂直に立ち上がる。145号住居址と同様、主柱穴は確認できない。カマドは軸方向が146号住居址北壁とはほぼ平行になること、断面で145号住居址の掘り方を検出したことで本住居址に付属することが判明した。左袖が良好に遺存しており、石芯粘土カマドである。中央部から甕1個体分が内面を上にしてほぼ円形に散乱して出土しており、二次焼成の痕跡を認め難いことから、本址廃絶時に転落したものと考えられる。焚き口に厚い焼土が認められる。

145号住居址に切られているため出土遺物は少ないが、平安時代後期の住居址であると思われる。(馬場 保之)

⑪ 147号住居址 (挿図61、第66図)

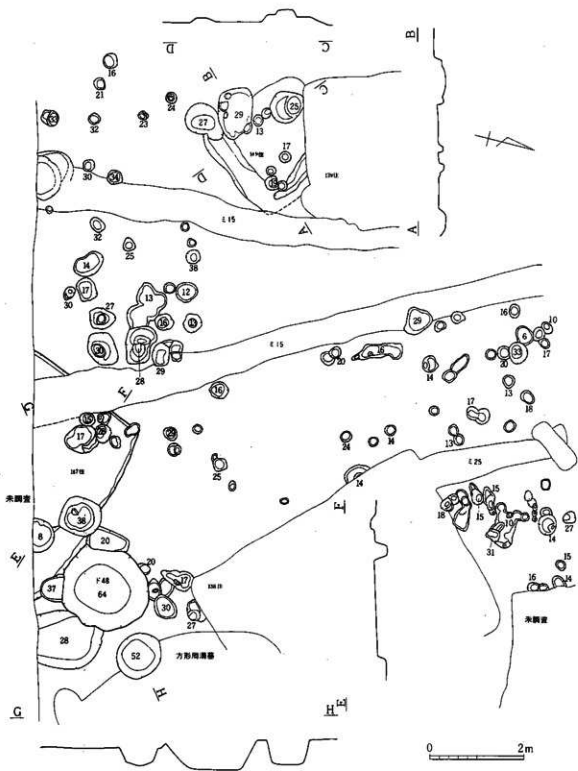
調査区東南壁にかかって検出、溝32・穴等に切られる。規模・主軸の確認はできなかったが5m前後の隅丸方形竪穴住居址と推測される。検出面から床までわずかであり、壁高は20~10cmであった。床面は堅いが緩い凹凸がある。主柱穴は確認できなかった。

遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器等が出土している。土師器には甕(1・2・4)、坏(5)黒色土器皿(3)、須恵器は甕(6・7)、円面硯(10)があり、円面硯片はエレベーションEFにかかっている深さ8cmの穴から出土した。4.5×2.5cmの小破片であるが、透し部分と透しの間の沈線が残っており、透し上部は丸く止まっている。陸の土手は剥落しており、胎土は小石粒の多いやや粗いもので地元産であろう。灰釉陶器には壺(8)、椀(9)がある。

時期は遺物から平安時代である。

⑫ 148号住居址 (挿図62、第47・48図)

調査区南西隅近くBQ43附近に検出し、140・143号住居址、建物址25、土坑52に切られる。(6)×5cmのやや長方形竪穴住居址と推測され、主軸はN35.3°Eを測る。壁は残存部最高で10cmと低い。140号住居址の貼り床下から土器埋設炉を検出し、住居址の確認をしたが切り合いが著しく、残存部は約半分である。床面は中央部が堅く良好であった。主柱穴と推測できるのは、西隣のものと南隅3個の内のどれかであろう。炉は中央からやや奥壁よりに位置し、土器埋設炉で

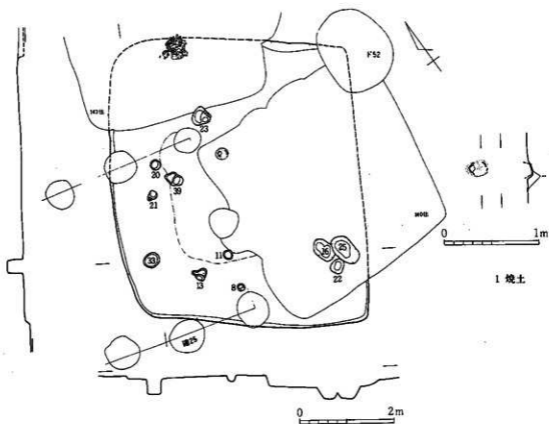


挿図61 TAN-KUR 147・149号住居址, 土坑48・ビット群

上部は140号住居址に削られている。竪の周囲の地山が良く焼けて赤褐色を呈していた。

遺物はやや多く143号住居址の床下からほぼ1個体出土した竪 47図1 は縦方向に雑な波状文を施し底部には布痕が残っている。炉の竪6・7は胴部のみであるが波状文が3段残る。他に竪口縁片3～5、壺胴部片2がある。石器は、磨製石鎌半欠品 48図3、同未製品2、石鎌1、チャートフレック4などである。

時期は弥生時代中期終末である。



挿図62 TAN-KUR 148号住居址

② 149号住居址 (挿図61、第66図)

調査区はほぼ中央B Y42にかかって検出した。139号住居址・溝址5に切られて、3×2.5m調

査したのみであり、住居址としたが別の性格を持つ遺構の可能性もある。浅い掘り込みで覆土には黒褐色土が入っており、方形竪穴住居址と推測したが小型である。穴も床面から20cm以内と比較的浅い。南隅の穴には炭・焼土が入っていたが、この住居址との関係は確認できなかった。

遺物は須恵器甕片 66図12・13、中世の磁器皿片11など出土しているが、時期の確定はできない。
(佐々木嘉和)

㊦ 150号住居址 (挿図63、第48図)

溝址12の西側、TANBQ35附近で断面に懸って検出された。壁高は掘込み面から25~30cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。確認状況の示すとおり平面形、規模等一切不明である。

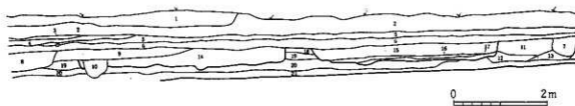
断面検出のため本址から出土した遺物は少ないが、中島式の土器片、打製石斧が出土している。本住居址は弥生時代後期後半に比定される。

㊦ 151号住居址 (挿図63)

溝址12の西側、150号住居址と接してTANBO37附近で断面に懸って検出された。壁が垂直に立ち上がる他は150号住居址と同様一切不明である。

本住居址から時期の判明する遺物は出土しておらず、所属時期を特定することは困難であるが覆土および遺構掘り込み面の状況から、150号住居址とはほぼ同期のものであろう。

(馬場 保之)



- | | | | |
|---------|------------------|--------------|----------|
| 1 耕土 | 8 灰黒色土 | 15 黒色土 | } 150住覆土 |
| 2 暗黄褐色土 | 9 赤黒褐色土 | 16 暗黄褐色土 | |
| 3 黄色砂質土 | 10 暗黄褐色土 | 17 黄褐色土(貼り床) | |
| 4 褐色土 | 11 暗灰褐色土 | 18 褐色土 | |
| 5 灰褐色土 | 12 灰褐色土 | 19 黒褐色土 | } 151住覆土 |
| 6 黒褐色土 | 13 黒褐色土 | 20 暗褐色土 | |
| 7 黒色土 | 14 暗黄褐色土(151住覆土) | 21 黒褐色砂土 | |
| | | | |

挿図63 TAN-KUR 150・151号住居址

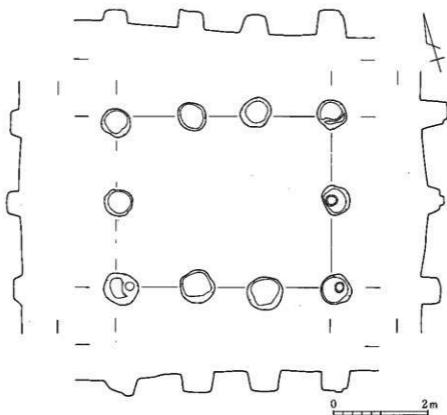
2) 掘立柱建物址

① 建物址25 (挿図64)

調査区南隅BO42を中心に検出した。148号住居址を切り140号住居址に切られる。3×2間で4.5×3.6mのやや長方形の掘立柱建物址である。柱間は桁行で1.5～1.4m、中央の柱間がやや狭く梁行は1.8mであり、桁行方向はN107°Eを測る。柱穴平面形はほぼ円形でそろっており底部高も著しい差は無い。底部に柱痕らしい凹みを持つものもある。東側梁行中央の穴の上部に奈良時代と思われる140号住居址のカマドが築かれており、同住居址より古く、R153パイパス調査時の建物址7との関連が推測できる。

時期は建物址7と同時期の奈良時代と思われる。

(佐々木嘉和)



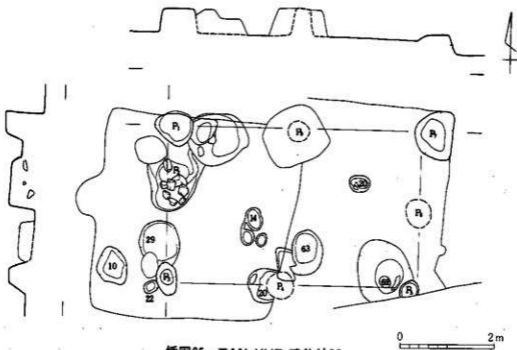
挿図64 TAN-KUR 建物址25

② 建物址26 (挿図65、第76図)

調査区南西隅近くBR44に位置し、140・142号住居址に切られる。推定であるが2×2間で(5.6)×(3.3)mの長方形掘立柱建物址であり、柱間は桁行2.8m、梁行1.6mで桁行方向はN90°Eを測る。140号住居址調査時に貼り床下から、軟質須恵器甕(76図1)片の入った穴R₁を検出した。調査時には建物址の一部であろうと推測したが、南西横に位置する建物址25方向には穴が検出されず、確認には至らなかった。発掘終了後に実測図から推定したが、切り合いの著しい場所であり、確実な規模・主軸ではない。

遺物は軟質須恵器甕(76図1)と、土師器甕2である。

時期は140号住居址に切られており、同時期の奈良時代かやや古いと思われる。(佐々木嘉和)



挿図65 TAN-KUR 建物址26

3) 土 坑

① 土坑33 (挿図66、第76図)

TANBV35にかかって検出した。溝址12の東側の壁と135号住居址を切る。想定(2.2×1.5)mの不整形円形で、底部中央附近はやや凹んで鍋底状であり、深さは20cmを測る。壁は緩やかに

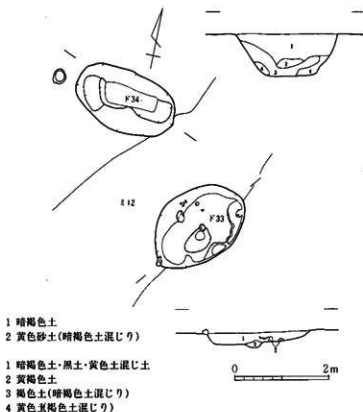
立上がり、南壁には稜がある。

覆土からは須恵器杯 76図3、窯印のある須恵器蓋の破片4が出土している。

② 土坑34 (挿図66)

TANBV34にかかって検出した。溝址12の西側の壁を切る。想定(2.2×1.3)mの不整楕円形を呈する。底部は平坦で深さ90cmを測る。壁は比較的急角度に立ちあがる北壁を除けば、稜を持ちながら緩やかに立ちあがる。

覆土から遺物の出土はなかった。



挿図66 TAN-KUR 土坑33・34

③ 土坑35 (挿図49)

KURAA37にかかって検出した。南西の隅は溝址5と切り合うが新旧関係は不明である。想定(1.4×0.9)mの不整楕円形を呈する。底部は平坦であるが中央がやや凹み、深さは17cmと浅い。壁西側がほぼ垂直に立ち上がる以外は緩やかなため断面形は舟底形になる。

覆土から遺物の出土はなかった。

④ 土坑36 (挿図49)

KURAE37で検出したが、北側が未調査区にかかるため全体形は不明である。調査できた部分で1.7×0.5mの半楕円形を呈するが、南壁で別の穴を切り、不整形を成している。底部は中

央よりやや東よりが凹み、深さは20cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がる。

黒色を呈する覆土から遺物の出土はなかった。

⑥ 土坑37 (挿図67、第76図)

TANBY34にかかって検出した。土坑40・46・47を切る。想定(1.2×1.2)mの不整形を呈する。底部は南北に2段となる。深さはそれぞれ20・50cmを測る。壁には二つの稜があり整っているとはいえない。

覆土からは、内黒の土師器坏(76図5)が出土した。

⑥ 土坑38 (挿図67、第77・78図)

TANBY33にかかって検出した。土坑40・44・47および溝址5を切る。想定(1.6×1.2)mの不整形円形を呈する。底部には凹凸があり整っていない。深さは最深部で70cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。

覆土からは比較的多数の遺物が出土したが、すべて須恵器であった。自然軸のかかった横瓶77図1、甕の口縁部2・3・6、甕の胴部には叩き痕7~10が残る。坏の高台5、蓋4がある。時代は平安時代である。

⑦ 土坑39 (挿図67)

TANBY33にかかって検出した。小竪穴8、土坑44・45を切る。想定規模(2)×1.8mで底部は小穴が切り合うため凹凸が多い。深さは最深部で53cmを測る。壁にも小穴の切り合いによる稜があり全般的に整っていない。

覆土から遺物の出土はなかった。

⑧ 土坑40 (挿図67、第76図)

TANBY33にかかって検出した。土坑38・46・47を切り、土坑37に切られる。

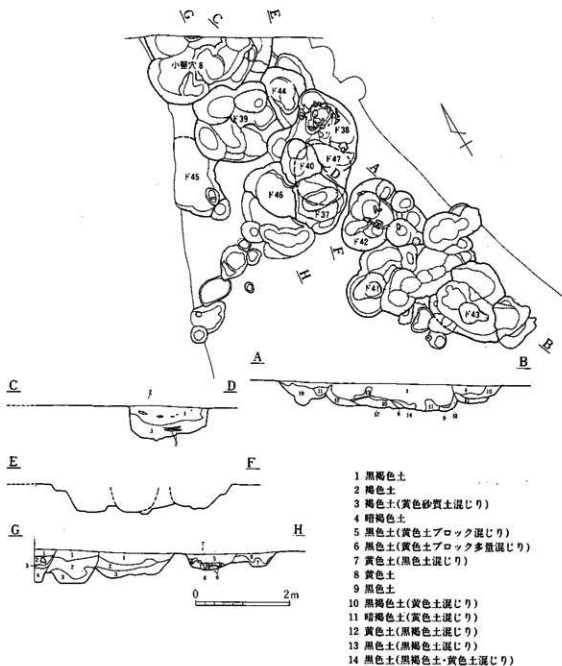
想定(0.9×0.8)mの不整形を呈する。底部は南から北へやや傾斜し、北壁直下で63cmを測る。壁は両側しか確認できなかったが、稜を持ちながら立ち上がる。

覆土からは、木葉痕のある土師器甕の底部76図6、須恵器台付坏7が出土した。

⑨ 土坑41 (挿図67、第83図)

TANBY35にかかって検出した。土坑42に切られ、溝址5を切る。土坑43とも切り合うが新旧関係は不明である。

想定(3.4×1.0)mの不整形である。底部では少なくとも7個の小穴の切り合いが認められ凹凸が著しい。深さは最深部で63cmを測る。壁にも穴の切り合いによる稜が多く整っていない。



挿図67 TAN-KUR 小竪穴 8, 土坑37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47

覆土からは、緑色の管玉(83図4)が出土した。

⑩ 土坑42(挿図67、第76図)

TANBY34にかかって検出した。溝址5、土坑41を切る。1.8×1.7mの不整形を呈するが底部には、少なくとも6個の小穴の切り合いがあり、凹凸が著しい。深さは最深部で52cmを測る。壁も同様に整っていない。

覆土には10cm前後の小石が混っていた。遺物としては、土師器高坏の脚部 76図8 が出土している。

⑪ 土坑43(挿図67、第78図)

KURAA36にかかって検出した。溝址5を切り小穴に切られる。また土坑41と切り合うが新旧関係は不明である。

想定(1.6×1.6)の不整形を呈する。底部は東西方向に二段にわかれ、深さはそれぞれ36・67cmを測る。また西側の底部は中央がくびれひさご型になる。壁面の各所に小穴が残るため壁面の全容がわからない。

覆土のうち、南東部分から須恵器の双耳壺 78図2 が出土した。平安時代である。

⑫ 土坑44(挿図67、第76図)

TANBY33にかかって検出した。土坑38・39に切られ、溝址5をきる。想定(1.2×1.0)mの不整形を呈する。底部には凹凸があり整っていない。深さは58cmを測る。確認できた北壁は緩やかに立ちあがっている。

覆土からは、須恵器臺胴部の破片 76図9 が出土している。

⑬ 土坑45(挿図67)

TANBX32にかかって検出した。土坑39に切られ、北側では他の穴と西半分は溝12と切り合うが新旧関係は不明である。

調査部分で1.6×0.8mの不整形を呈する。底部はほぼ平坦で15cmとごく浅い。南隅には小穴をもつ。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土から遺物の出土はなかった。

⑭ 土坑46(挿図67)

TANBX33にかけて検出した。土坑37・40に切られる。想定1.2×0.9mの不整形である。底部は中央部がやや凹み、鍋底形になり、深さ38cmを測る。確認できた北西側の壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土から遺物の出土はなかった。

㊦ 土坑47 (挿図67)

TANBY44で検出した。土坑37・38・40に切られ、ほとんど残っていないため、形態は不明である。

底部、壁面のわずかに残る部分では、平坦で緩やかに立ち上っている。

覆土から遺物の出土はなかった。

㊧ 土坑48 (挿図61、第76図)

KURAD44にかかって検出した。径1.9mの不整形円形を呈する。東西の壁上部は他のおち込みと切り合っているが、新旧関係は不明である。

底部はほぼ平坦で60cmを測り、壁は緩やかに立ち上がり、断面は逆台形を成す。

覆土から遺物の出土はなかった。

㊨ 土坑49 (挿図68)

TANBR42にかかって検出した。143号住居址の壁を切る。ほぼ径1.0mの円形を呈する。底部は中央やや北よりにおち込みがあり、二段になる。深さはそれぞれ30・20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面は逆台形を成す。

覆土から遺物の出土はなかった。

㊩ 土坑50 (挿図49、第76図)

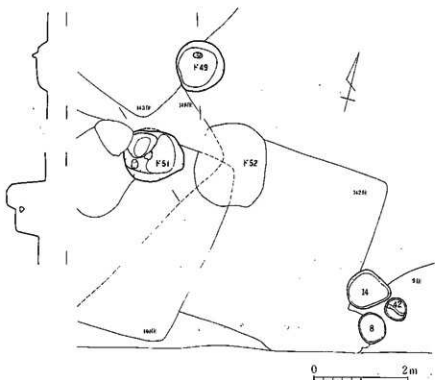
TANBY37にかかって検出したが、北東側で溝址5を切るが、全容はつかめない。調査できた部分は1.5×0.8mの三角形をなす。底部は深さ20cmと比較的浅く、平坦であり、溝の底と同じ深さを測る。壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土からは、須恵器坏の底部片 76図11 が出土している。時期は平安時代である。

㊪ 土坑51 (挿図68、第76図)

TANBQ43にかかって、140号住居址の床面下で検出した。建物址26の柱穴に切られる。底部は東西で二段になり、深さは住居址の床面からそれぞれ70・50cmを測る。北側の壁がえぐり込む以外は、垂直に立ち上がる。

覆土からは、須恵器甕 76図12 の破片が出土した。これと同一個体の破片が140・142号住居址の貼り床下の穴からも出土しており、同一建物址の柱穴の可能性もあるが、断言できない。



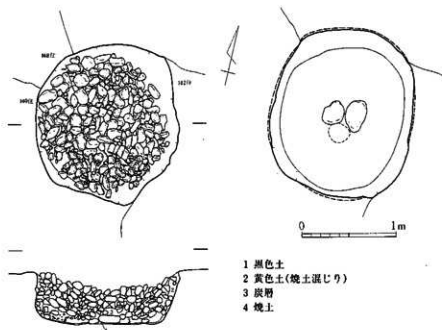
挿図68 TAN・KUR 土坑49・51

◎ 土坑52 (挿図69)

TANBR43にかかって検出した。140・142・148号住居址を切る。1.6×1.5mの不整楕円形を呈する。深さは50cmで底は平坦である。壁は内へややえぐり込み、袋状になる。

覆土には20～5cmの小石がぎしりとつまっており、その石も底部に近づくほど大きくなる。底部中央には30cm大の平石が3個入っていた。また底から20cmのところまでは、石の間に炭がつまっており、底一面に焼土があった。

遺物の出土はなかった。



挿図69 TAN-KUR 土坑52

㊦ 土坑53 (挿図70)

TANBQ36にかかって検出した。土坑54と切り合うが新旧関係は不明である。想定(1.4×1.2)mの不整形を呈する。底部は東西で二段にわかれ、深さはそれぞれ18・23cmを測る。確認された壁のうち西側はほぼ垂直に立ち上がり、他はやや緩くなる。

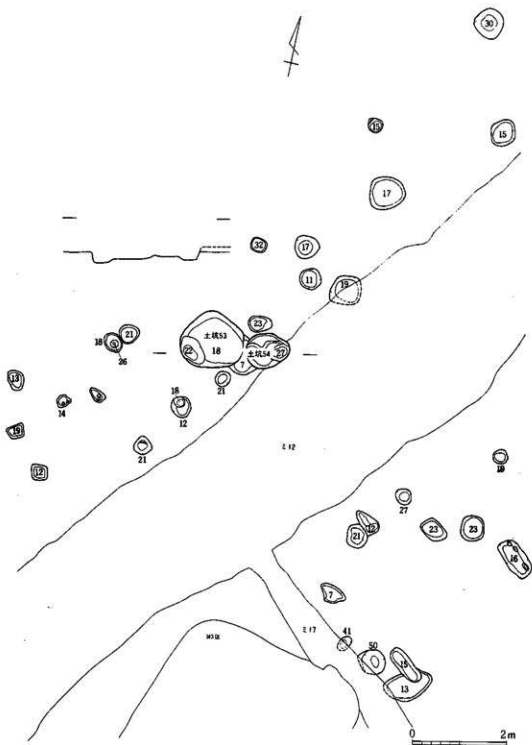
覆土から遺物の出土はなかった。

㊦ 土坑54 (挿図70)

TANBR56にかかって検出した。溝址12を切り土坑53と切り合うが新旧関係は不明である。想定(0.9×0.7)mの不整形円形を呈する。底部は北側半分、南西側、東壁直下と三段に分かれ深さはそれぞれ13・21・27cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。

覆土から遺物の出土はなかった。

(吉川 豊)



禱圖70 TAN-KUR 土坑53-54

4) 小竪穴

① 小竪穴 8 (挿図67、第75図)

調査区内北隅の土坑群の中に検出された。T A N B Y 32グリットを中心とする小竪穴である。溝址5・12を切り、133号住居址に切られている。土坑との新旧関係は土坑同士の切り合いが激しく把握できなかった。確認した直径は1.8mを測る。用地境にかかり、切り合いも多いため全体規模、本来の平面形は不明である。覆土は黒色土である。部分的に黄色土のブロックの混入が認められ人為的に埋めている可能性がある。壁は用地境土層を観察し東側で90cm、西側で45cmが把握できた。壁面は場所によって変化がある。東側は比較的緩やかで、西側は角度を持って掘り込まれている。底部は平坦面を持たず、緩やかに落ち込む凹みが複数集まって一つの底部となっている。壁面や、底部の状況から複数の土坑の切り合いであった可能性がある。

遺物は比較的多く出土した。土師器甕(75図1)、須恵器甕(3~7)、墨書のある蓋(8)、坏(9)、高台付坏(10・11)、器台(12)などである。土師器器台(2)は溝址12からの混入品と考えられる。

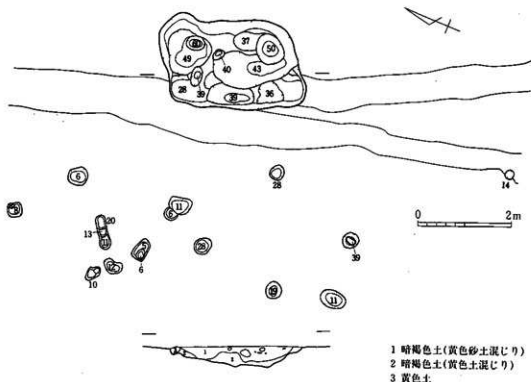
時期は遺物から平安時代に位置付けられるが性格は不明である。

② 小竪穴 9 (挿図71、第75図)

K U R A A 39 グリットを中心を検出した。溝址5と26の重複部分に重なり合うため、切り合い関係は把握できなかった。歪んだ長方形の平面形で規模は2.9×1.8mを測る。長軸方向N19°Wを示す。確認した壁高は25~45cmを測り比較的緩やかに掘り込まれており明瞭な底部を成していない。掘上げ完了時の観察から西側は溝址15の底部と合致し、北側と南側の底部が緩く傾斜する凹み部となることから2つの土坑の切り合いであった可能性がある。覆土は黄色砂土がわずかに混じる暗褐色土層と黄色土がブロック状で薄い層状の堆積を成している。覆土上層には10~40cmの石が十数個混入し、ほとんどの遺物はこの石の間に挟まれる様に出土した。人為的に一気に埋めている可能性がある。

遺物には、大形の須恵器甕(13)、打痕のある石器(14)のほか須恵器壺、坏の破片がある。時期は遺物から平安時代に位置付けられるが性格は不明である。

(佐合 英治)

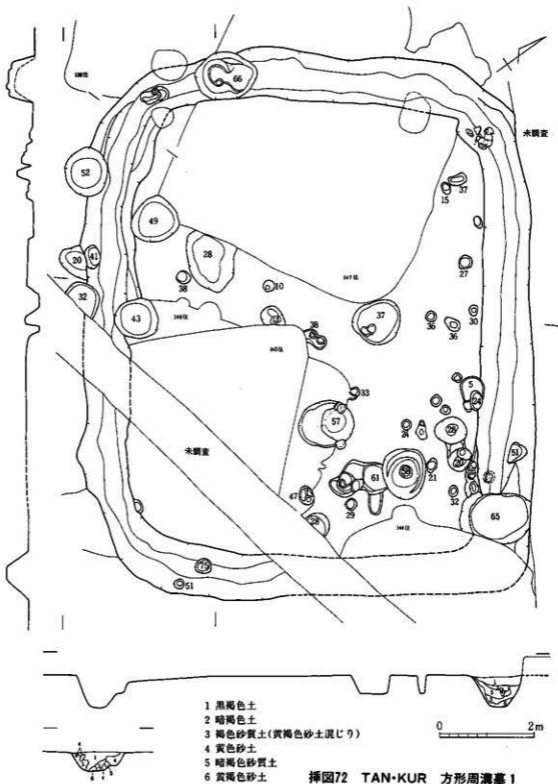


挿図71 TAN-KUR 小竪穴9

5) 方形周溝墓

① 方形周溝墓1 (挿図72、第67・68図)

調査区北隅付近KURAH40にかかってほぼ直角に曲がる溝の一部を検出した。この暗褐色の覆土は、調査区の北側を通る既設道路にはほぼ平行して、東西に走り144号住居址へ続く。また、137・138号住居址の床面でも同様の覆土を検出した。特に138号住居址の床面では、コーナーを検出した。さらにこの溝は、145・146号住居址へ続いたため、バイパス建設時の発掘調査で確認した方形周溝墓1の未調査部分と判断した。東側周溝の一部は調査区外にかかり残りは144号住居址に切られるため確認できなかった。また、北側は土坑の連続に切られる。規模は想定で(11.3×9.3)m。隅丸方形を呈する。主体部がわからないため主軸方向は不明であるが、長軸方向でN55°Wを示す。周溝は、幅110~90cm、深さ70~50cmでしっかりとロームを掘りこんでおり、北側の周溝が深くなっている。底部は丸みを持ち断面はU字形を成す。また周溝内の東西



の角にそれぞれ1.5×1.0m深さ65cm、1.3×1.0m深さ66cmの楕円の穴を持つが性格は不明。

周溝内の比較的上部から多量の遺物が出土した。弥生時代後期の壺(67図1・2・4~10)、甕(68図2)、石器としては、硬砂岩の打製石斧(68図3・4)、横刃型石器(68図6)、打製石盾丁(68図7・8)、用途不明の丸石(68図9)がある。また、周溝内側のほぼ中央と思われる位置から、細身の管玉(83図2)が出土している。他の遺構との重複が甚だしいため断定はできないが、埋葬施設がこの部分にあったと考えられる。

この他に土師器の甕(68図1)と古式土師器の壺(67図3)が出土しているが、遺構の重複による混入遺物である。

6) 溝 址

① 溝址4(挿図73)

調査区南隅BL44に位置し4号住居址を切る。R153バイパス調査時に長さ約17mを調査し、その続きが約2m確認された。溝址12の上面で交差しているわけで検出に努めたが、それ以上の確認はできなかった。

時期は弥生時代後期より新しく、古墳時代終末より古いとバイパス調査時に確認した範囲を出ない。(佐々木嘉和)

② 溝址5(挿図73、第73図)

KURAA33~43、TANBY34~45で検出され、小竪穴9に切られている。一般国道153号座光寺バイパスの調査で確認された溝址5の北側部分である。長さ約24m、幅45~100cm、深さは検出面から15~25cmを測る。覆土は黒褐色土である。

覆土中より須恵器坏・蓋・甕、打製石斧等が出土している。

本址は古墳時代後期に比定される。

(馬場 保之)

③ 溝址12(挿図73、第69~73図)

国道バイパス用地内で確認した延長部の調査を行なったわけであるが、総体としての状況は、バイパス下部にあたる部分と大差ないものであったが、調査範囲内北端部で若干の状況の変化が認められた。今回の調査範囲内での位置は西端部分にあたる。

全体としては、巾3.5m、深さ1.3m程の規模で、バイパス用地内を含め直線的に連続するが北端部分では巾5mと広がり、逆に深さは0.7mと減じ、溝自体の方向も西方に転じている可能性がある。

土層堆積状態もバイパス下部のそれと同様であり、泥・砂・砂利などが互層となって堆積し、最下層の砂利層及びその上層2~3層中に大量の遺物が出土した。出土遺物の主体は、古墳時代

前期に属するものであるが、縄文時代から弥生時代にかけての遺物も相当量みられた。なお、中間及び上層部分からの出土遺物は少なく、それらからは古墳時代前期の遺物に混じって古墳時代後期から中世の遺物も出土し、新しい時期の遺構と重複したとみられる位置もあったが、具体的に把握することはできなかった。

なお、今回の調査範囲での長さは40mであるが、既調査分も合計した総延長は75mとなり、台地縁部を掘削した状況が明瞭に捉えられる。

本溝址の性格について若干の推考をすれば、遺物の出土状況及び形状、規模などから住居址等の生活遺構の分布状況は不十分ではあるが、北側一帯にその存在の予測可能な点も含め、集落を区切る環濠的な性格と、水田経営に重要な意味を持った用水としての姿が導びかれ、当遺跡の該期施設として重要な意味を持っていたものといえる。

本址の時期は、出土遺物等から弥生時代終末から古墳時代前期に位置づくわけであるが、その出土遺物もその時期のものが主体となり若干他時代の混入遺物もみられる。

69図1・2は、弥生時代後期後半の中島式土器の壺口縁部であるが、形態・文様などから終末期段階のもので古墳時代に位置づけられる。

同図3は、弥生時代後期前半の座光寺原式期に位置づく鉢形土器である。

同図4・5は、弥生時代中期末の恒川式期の壺であり、同図18も同時期のもので、赤彩され、ボタン状の貼付文と小孔を穿つ壺破片である。同図14は底部に布疋痕があり、同時期の壺底部である。

同図6～13は、弥生時代後期中島式土器の壺である。このうち、7・8は弥生時代段階でみられる櫛状工具による施文が無く、中島式系土器の最終段階のもので、時代的には古墳時代に含まれる。13の底部は、穿孔されている。

同図15・16は、手づくねの小形土器であり、具体的な時期の断定は困難ではあるが、胎土等から弥生時代後期から古墳時代前期に属するものといえる。

同図17・19・20は、古墳時代前期に属す壺である。17は高さ27cmを測る完形品で、内外面とも荒い削り痕を残すが、全体に丁寧に作られている。19・20はいずれも広口壺の口縁部を欠失したものであるが、19については、端部の磨耗が著しく、口縁部欠損後も使用されていたと考えられる。

70図1～4も同時期の壺である。1は、底部を欠くが、球形の胴部と外反する口縁部で構成され、胴下半部には刷毛痕が認められる。2は、広口壺の完形品で、該期に通例みられる器形であるが、普通同器形の土器は、全面が無文で丁寧に磨かれているが、本器は磨きの後に、櫛状工具による横走文を肩部に施しており、弥生土器から土師器へ移行する姿を示しているともいえる。3・4は、やや小型の壺である。3は、内湾して立ち上がる口縁部が特徴的であり、4も口縁部を欠くが同様であると考えられる。

70図5～9は壺で、それぞれ若干の差異はあるが、いずれも古墳時代前期に属するものである。

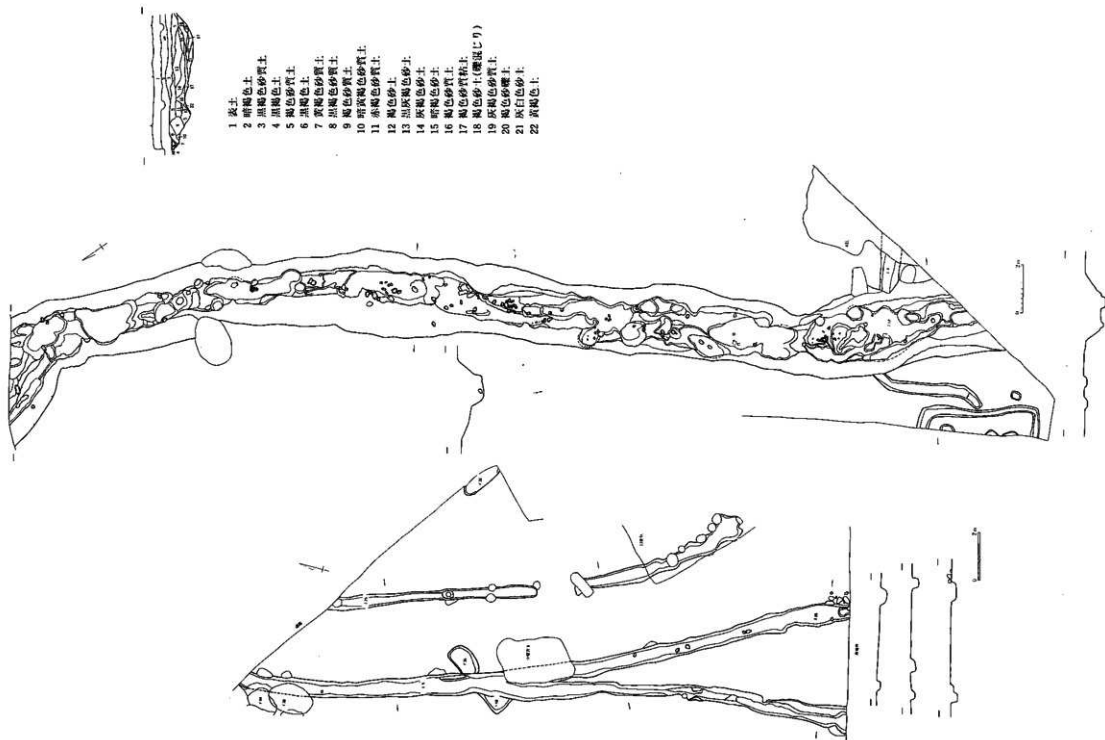


插图73 TAN-KUR 遗址4·5·12·25·26, 土坑35·36·50

いずれもその表面には、ヘラ削りや刷毛による調整痕などが認められる。このうち、6は口縁部から胴上部に5段の櫛歯波状文を施し、当地方に類例の少ないものである。器形・文様からみれば、北信濃の弥生時代末期の土器とのつながりを考えるべきものといえる。

71図1～11は、台付壺であり、このうち1～3はS字状口縁、4～6は単純口縁の壺である。脚台部の形は一定しないが、8・10・11がS字状口縁の脚台部と考えられる。

71図13は、台付の短頸壺で71図14・15・72図1は高坏、69図18は器台である。

71図16・17は小型丸底土器であるが、16は外面をこまかな刷毛目で調整し、17は底外面に円形の凹部を持つ。

72図1～3は坏であるが、このうち1については、先述のとおり高坏の坏部と考えた方が妥当である。2・3の形態が、当地方における該期坏の形態を示すものと考えられる。

72図4～6は他時期の混入遺物であり、4は縄文時代中期深鉢の把手部分、5は古墳時代後期須恵器の高坏もしくは蓋坏の蓋と考えられるもの、6は中世の山茶碗小品である。

72図7～14、73図1～10は、本溝址内より出土した石器である。

これらのうち、72図7・8は縄文時代に属する石鏃である。72図14の横刃型石器と73図6の扁平片刃石器、9・10の磨製石鏃未製品は弥生時代中期に属するものである。73図1～5の有肩扇状形石器と磨製石応丁は弥生時代後期に属するものである。

それ以外の打製石斧と抉入打製石応丁については弥生時代中期から古墳時代前期に共通する形態の石器があり、時期の特定はできず、これらの中には古墳時代前期に属するものの存在する可能性もある。

(小林 正春)

④ 溝址17 (挿図74)

B R39からBU44にかけて、長さ約14mを調査した。11・143号住居址等を切っているが、溝址12覆土中で検出できなくなった。R 153バイパス調査時に確認調査した溝址の続きである。巾は60～50cm深さ約30cmで、断面形は逆台形を成しているが、底部には広狭がある。北東側から南東側へ緩く傾斜している。

遺物は弥生時代後期壺(13)土師器(14・16)須恵器(15)等が出土している。

時期を把握できる遺物はないが、切り合い関係から平安時代以後である。(佐々木嘉和)

⑤ 溝址25 (挿図73、第73図)

KURAB34～38、AC34～42、AD41・42で検出され、その南端は138号住居址に重複する。一方、北側は調査区外にのびている。一部削平を受けた部分があるが、これを含めると長さ約17m、幅40～70cm、深さ10～30cmを測る。覆土は暗褐色土である。本址は溝址15とともに道路址1の側溝として機能したと考えられ、両溝址の検出面からの深さはほぼ揃っている。

遺物は少なく、須恵器脚付壺が覆土中より出土している。

本址は古墳時代後期の138号住居址を切っており、その最終段階は不明であるが、道路址1、溝址15との時間的懸隔はないと考えられる。

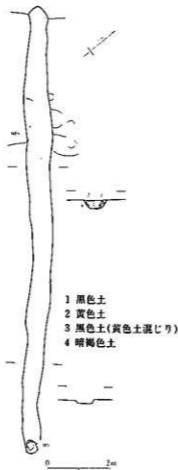
⑥ 溝址26 (挿図73、第74図)

KURAA39~42、A B41~45にかけて検出された。溝址5と接する位置で小壁穴9に切られている。長さ約13m、幅60~90cm、検出面からの深さ20~25cmを測る。主軸方向はN27°Wを示す。一般国道153号座光寺バイパス調査時に確認された道路址1と同じ方向をとり、溝址25とともに道路址の側縁に位置することから、道路址1の側溝として機能したと考えられる。

覆土中より土師器壺・高坏、須恵器壺・甕・高坏・蓋・蓋环・环・盤・脚付壺・輪刃口・鉄滓が出土している。

出土遺物等から奈良時代から平安時代にかけて比較的長い期間存続したと考えられる。

(馬場 保之)



挿図74 TAN-KUR 溝址17

7) その他

① 柱穴等 (挿図49他)

134号住居址南東側、141号住居址周辺など、住居址や溝址などの他遺構の掘り込みがなく、地山面の残存する調査範囲内のほぼ全体に、径70~30cmの不規則な穴が多数検出された。

これらは、深さも30~10cmと一定せず、また覆土も千差万別といってよい程で、時代の特定はほとんどが困難な状態である。

また、穴の形状等から他遺構の比較により、掘立柱建物址を構成するものもある可能性が指摘

できるが、具体的に遺構として確定することは困難である。

なお、具体的な内容等は不明ではあるが、穴の径が20～10cmの小規模なものの中には、漆黒色土が入り、埋土中より中世陶磁器片の出土したものもあり、中世に属すると捉えられるものもある。

いずれにしても、これらの穴について、時代・用途等の特定は困難であるが、今次調査において確認された、それぞれの時代において、ここに住んだ人々が生活する上に、必要があってこそ穿たれたものといえる。

⑨ 遺構外出土遺物 (第79・80・81・82・83・84図)

縄文時代

晩期の土器片が少量出土している。79図1～3は条痕文、4は浮線網状文、5は隆帯上に刺突文を施したものである。

弥生時代

中期末から後期にかけての土器片・石器が出土している。

中期末の土器は、壺・甕・高坏などがある。壺(79図9、80図3・5～10・12)は、いずれも櫛状工具による施文があり、ほとんどが小破片であるが、79図9のみが½個体程あり口縁部以外の全体形を知ることができる。なお、79図9は、器形・文様等から後期座光寺原式に含まれる可能性も強いが、中期から後期への移行期にあたるといえる。

甕(79図10・11、80図11・13・15・16)は、いずれも小破片であり、鉢型と考えられるものもある。口唇部の刻み、口縁部の波状文・胴部の条痕文など該期に普遍的な文様がみられる。

80図1・2は内外面ともに赤彩された碗型の器形を成し、いずれも高坏の坏部片と考えられる。

以上の土器は、いずれも中期末の恒川式土器として捉えられるものである。

後期の土器は、壺・甕片があり、いずれも小破片のため詳細時期は確定困難であるが、中島式土器を主体に一部座光寺原式土器もみられる。

壺は、79図6・8、80図4があり、波状文・円弧文などを施している。

甕は、80図14・17～19があり、波状文と斜走短線文を施す。

石器は、比較的量が多く、中期・後期のいずれかに属するもので、それぞれの時期に典型的なものが出土している。

80図20・22、81図12、82図8～11は中期に属し、80図21、81図10・11、82図1～7は後期に属すもので、81図12は後期の可能性もある。

古墳時代

前期の土師器、後期の土師器・須恵器・石製模造品がある。

前期の土師器は、壺（79図12・13）と甕（同14）があり、このうち12の壺は後出的である。

後期の土師器は量的に出土量は多いが、いずれも小破片のため、図化可能な須恵器について掲載した。79図15は高坏、16は樽型縁の胴部片で沈線両側に波状文を乱雑に施している。17～20は甕であり、甕については次時期まで下る可能性をもつものもある。

土器以外の該期遺物として、82図12・13、83図5の石製模造品がある。12は石製円盤の欠損品、13は剣形の完形品、83図5は勾玉の半製品で全体に荒い砥痕が残り、内湾部は凹凸の激しい砥痕がある。

奈良・平安時代

奈良時代の遺物は少なく、平安時代後半の資料が多い。

81図1～3は土師器で、1は奈良時代に属する可能性のある坏で、2・3は平安時代後半の甕である。

81図4～7は須恵器坏で、4～6は無台、7は有台の坏であり、若干の時期差が認められる。

なお、小片のため図示できなかったが、奈良時代に属す、ら旋暗文のある畿内系土師器坏片2点がある。

中世

3図8は、瀬戸系のおろし皿で、口縁部に黄緑色の灰釉を施し、内面を格子状に刻み、底外面は回転糸切りしており、口縁部の%程を欠く。

同図9は、青磁碗の破片で、内面に毛彫りの雲花文を施した良品である。

（小林 正春）

Ⅳ ま と め

恒川遺跡群田中地籍の発掘調査は、昭和51年度の国道バイパス敷地内の調査に始まり、国道をはさんで4598番地、4599番地、4601番地と一帯の調査が行なわれた。恒川遺跡群の西端部にあたる田中地籍のかかなりの部分が発掘調査され、弥生時代中期以降中世に至る間のこの付近における様相がかなり具体的に示されつつあるといえる。

国道バイパス敷地内の調査は、恒川遺跡群内に巾20mのトレンチを設定し調査した結果となり遺跡群のおよその状況を知る、つまり、恒川遺跡群の文化財としての重要性をうかがういくつかの材料を提供してくれた。それに起因して飯田市が国及び県の補助を得て実施中の恒川遺跡群の範囲確認調査の継続という現状となっているわけである。

一方では、道路の新設、それも国道という地域の大動脈の開通ということで、今日の社会情勢・経済情勢の中で、その道路沿いに新しい時代の波が押し寄せることを止める、換言すれば、遺跡を現状のまま保護、保存して後世に伝えることは極めて困難なことといえ、諸開発の進行の多くは止むを得ないものといえる。しかし、恒川遺跡群の文化遺産としての貴重さを考えた時、速時行なわれるであろう遺跡群内における諸開発のすべてが容認されるというものではないことも考慮すべきといえる。それは、弥生時代からだけを見ても、2000年余の間地中に残されて来た文化財、つまり土地に刻まれた歴史を現代に生きる私達だけの意志で無にしてしまうことは、将来において、今現在の私達の生きたあかしをも無として簡単に葬り去られることを示唆しているといえる。

そこで、今回実施した発掘調査は、現状のまま残せない遺跡について、記録保存して後世に伝えるという、次善の策ではあるが、それにより、恒川遺跡群の重要性の一端を、更に広く、深く世間にあるいは後世に伝えることができたことと存じ、かつそうあることを深く望むわけである。

今回の調査において判明した事実は前述のとおりであり、それが語りかけてくれるすべてを熟考の上で一定の結論を示すべきであるが、調査者の力量のなさがそれを十分に読み取ることができないのが偽ざるところである。そこで今までの調査結果を踏まえ今次調査により明らかになった点について、時代を遡って列挙し、まとめたい。

弥生時代

弥生時代中期においては、今回の調査箇所も含め、本遺跡の立地する台地上全体に集落の広がり認められる。今までに検出された住居址の数だけでも20を越えており、台地上全体では100を越す家のあったことが予想され、当時伊那谷の中心地であったといっても過言ではないと考えられる。

また、その時代の出土遺物も膨大な量であり、時間的にも中期後半から後期への過渡的段階に

かけての資料であり、その間における当地方の社会情勢や文化傾向を知る材料として、また、時間の尺度としての土器編年資料としても貴重なものといえる。

次代の弥生時代後期には、住居址と方形周溝墓があり、台地上における土地利用の姿が具体的に示されたといえる。バイパス用地の調査結果のみでも、ある程度の予測は可能であったが、今回の調査結果を合わせることで、その予測の妥当であったことが確認された。それは、舌状の台地状における土地利用の姿で、台地西縁から南側の先端部にかけての居住空間と、台地中央部寄りにおける墓域の形成であり、社会的情勢の背景として台地上における土地利用の規制された姿を読み取ることができる。

古墳時代

先のバイパス調査報告書によれば、古墳時代について、須恵器出現をおよその目安として前期と後期に大別したが、本書においてもその姿勢を踏襲すると、新たに発見されたものはほとんど無い。ただ、バイパス調査時に検出され、その延長部を調査した溝址12は、出土遺物量を増し、その内容も多岐にわたっており、溝そのものの性格とともに諸種の問題を提起する。

溝址12は地形的にみて集落の西を区切る位置にあるが、他時期の遺構が多出しているにもかかわらず、同時期の住居址等は検出されておらず前時代の弥生時代後期に増しての土地利用の規制の存在が考えられる。また、調査範囲内のみでも、当時としては大土木工事であったと考えられる溝址12を造り得た結束力というか、むしろ統率力の存在すら推測され、新しい時代すなわち古墳時代の到来を物語るものといえる。

古墳時代後期に至っても調査地北端に2軒の住居址を認めたのみであり、台地全体における北半部に集中分布する傾向があり、前時代に引き続き土地利用の規制はあったと考えられる。それは、前期代までの規制とは異なり、より強力な権力による統率へと変化して行ったものといえる。それは、西あるいは北方一帯に築造された高岡1号古墳に代表される古墳群との強いつながりのあることを含め、地域全体の状況をより深く追求すべきといえる。

奈良時代

奈良時代は恒川遺跡群を最も特徴づける時代であることは今回の調査を待たずに世に問われているところであるが、今回の調査箇所の持つ意味はどのようなものであろうか。つまり、恒川遺跡は官衙、すなわち古代伊那郡衙の所在地であると大多数の研究者により推測されているわけであるが、今回の調査結果により竪穴住居址と掘立柱建物址の存在が具体的に示された。そのことは、官衙の中核も今だ不明であり、全容は更に不明という状況下で暴論のそしりはまめがれないが、あえて推論すれば、官衙と強い結びつきのある人々即ち役人の、それも一定以上の地位にあった人々の居住した空間である可能性が高い。

それは、バイパス調査から今回の諸調査により検出された掘立柱建物址と竪穴住居址との関係

や、和同銀錢・踏脚硯・円面硯・瑛玻璃碗などの出土品の位置等を總体的に検討することにより明らかになる部分が多いといえる。

平安時代

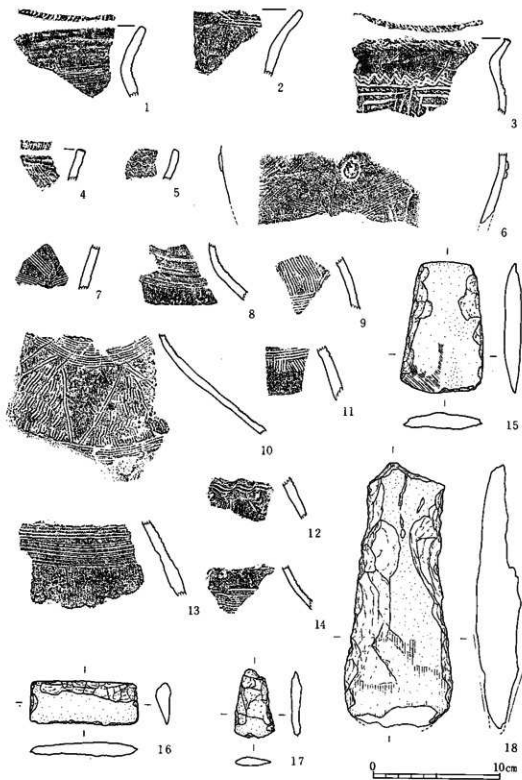
平安時代は、今までに発見された住居址の数が30余軒と最多であり、大集落を構成していたことは容易に推測できる。しかし、前時代の奈良時代の様相とは若干異なり、小規模な竪穴住居址の集団にと変化している。ただ出土遺物には、多数の緑軸陶器があり、恒川遺跡群以外の他遺跡とは異なった姿であることはいうまでもないが、平安時代の終りから中世にかけての恒川遺跡の様相は現状の資料のみでは不明といわざるを得ない。

以上、時代を追ってその推測されるいくつかを列挙したが、いずれの時代においても伊那谷全体の中で地域の中心的役割を果たしていた結果となった。

今次調査範囲は、恒川遺跡群の中ではごく小範囲であり、西端部分にあたるわけであるが、遺跡群内において小範囲における特殊な状況のいくつかも指摘でき、遺跡群内においても重要な一面であることも明らかとなったわけであり、今後における遺跡群の全容を知るべき段階に至り、より具体的な姿も導き出されて来るものと考えられる。

(小林 正春)

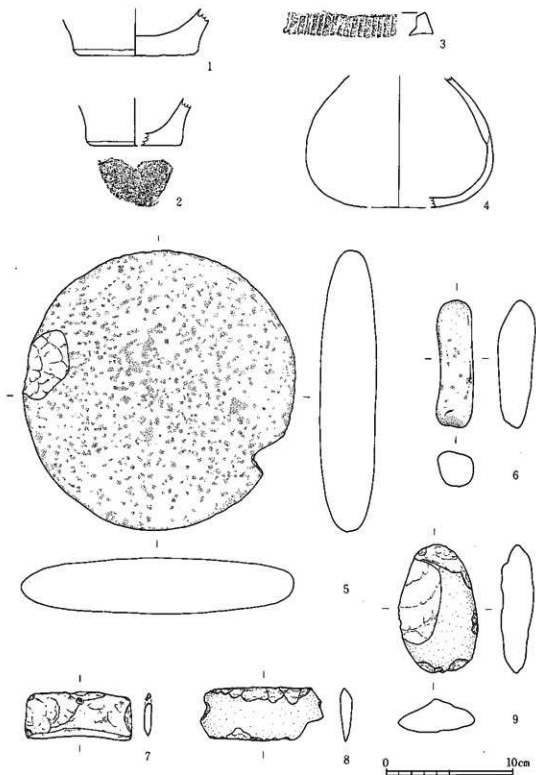
圖 版



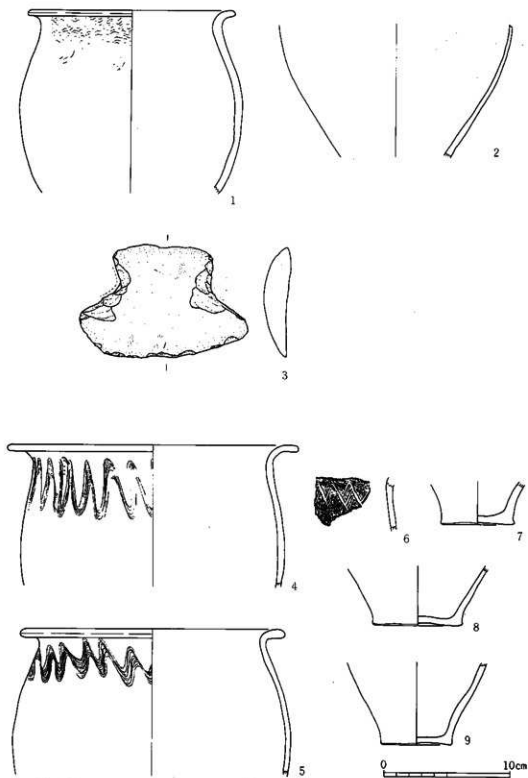
第1图 TAN·KUR4598 111·121号住居址 (111号住1~17, 121号住18)



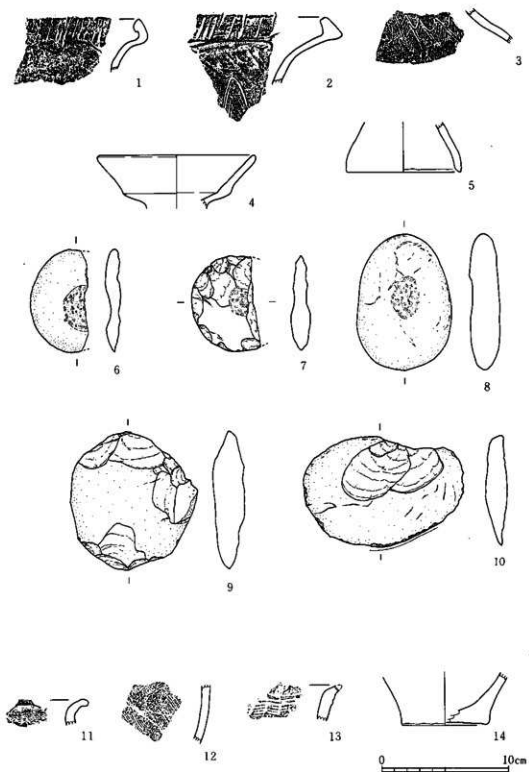
第2图 TAN-KUR4598 121号住居址



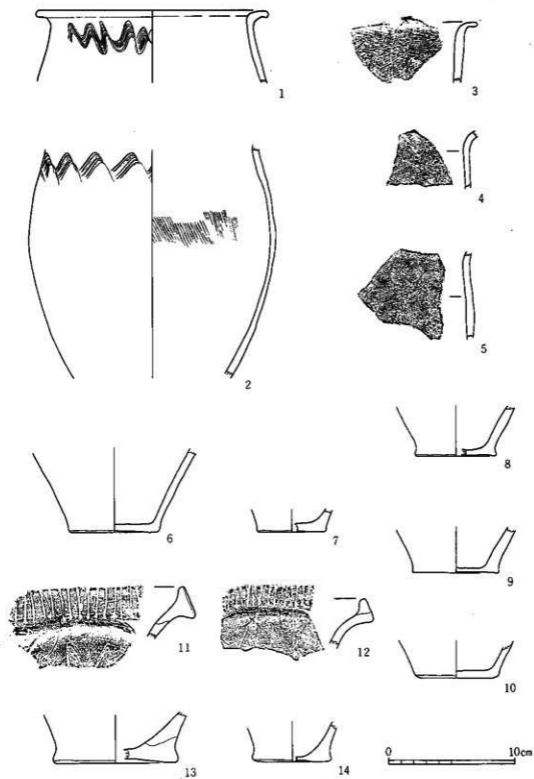
第3图 TAN-KUR4598 113号住居址



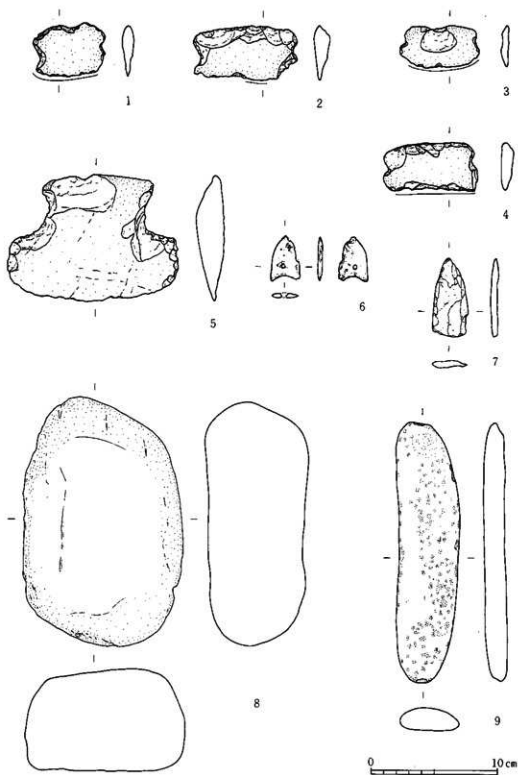
第4图 TAN-KUR4598 116·118号住居址 (116号住1~3, 118号住4~9)



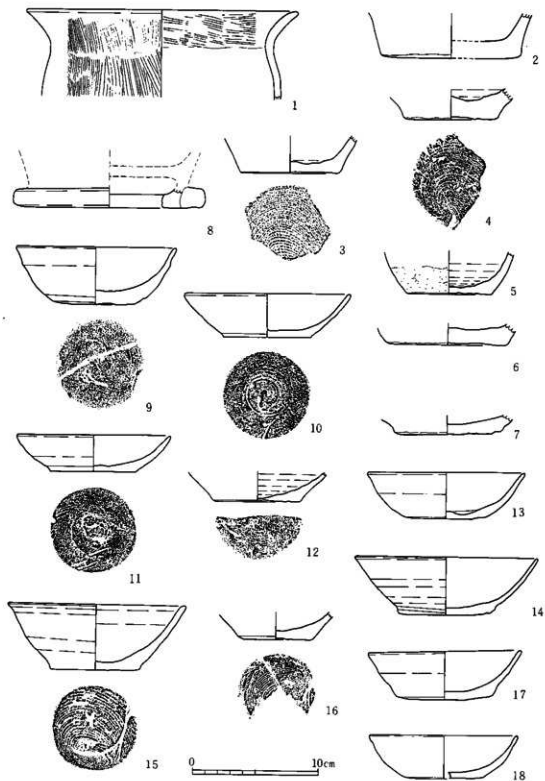
第5图 TAN·KUR4598 118·119号住居址 (118号住1~10, 119号住11~14)



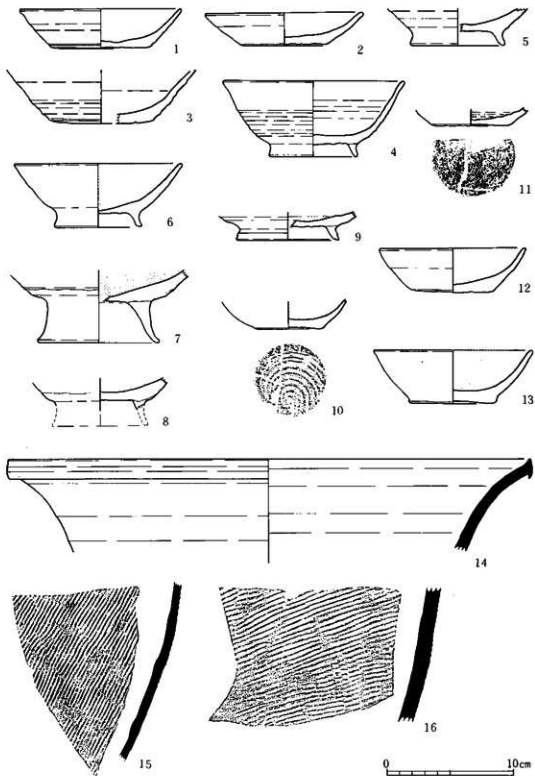
第 6 图 TAN-KUR4598 120号住居址



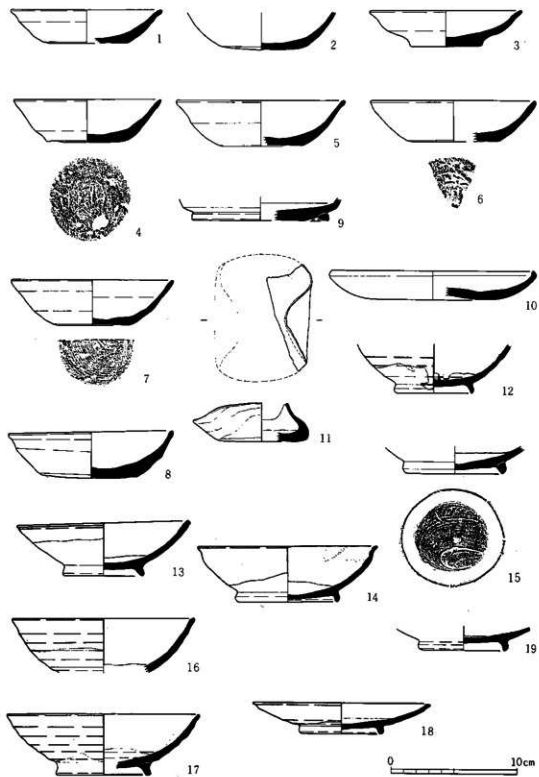
第7图 TAN-KUR4598 120号住居址



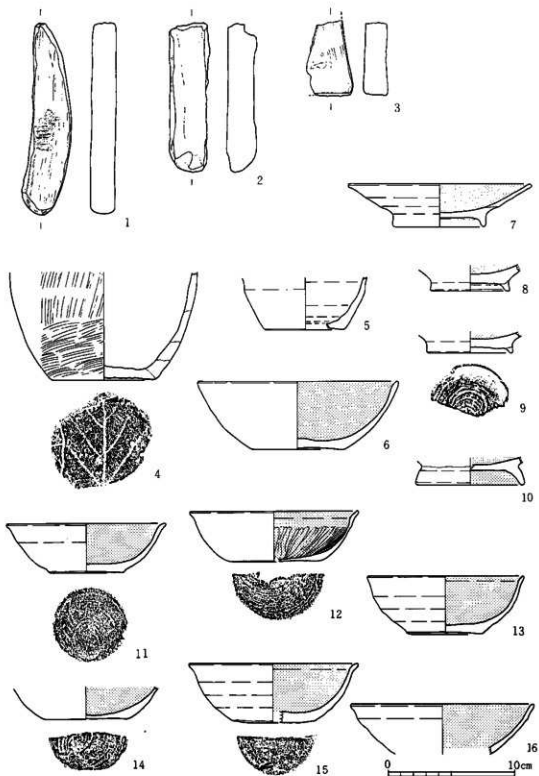
第 8 图 TAN-KUR4598 107号住居址



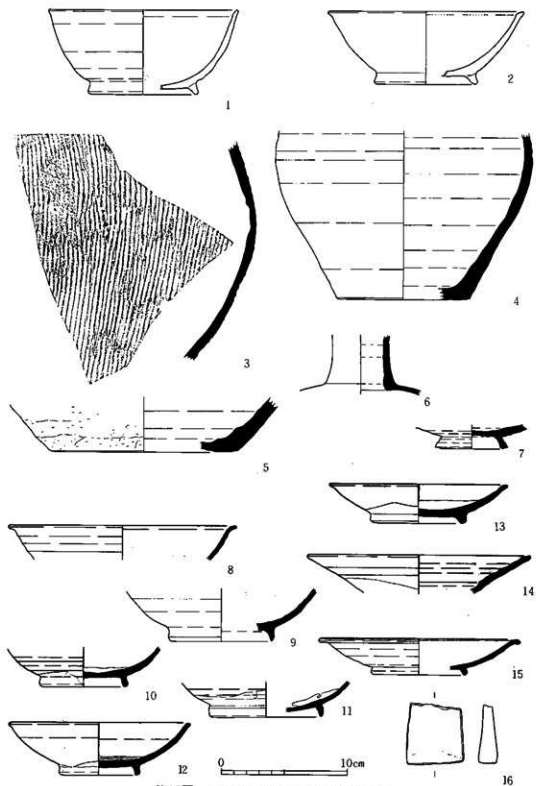
第9图 TAN-KUR 4598 107号住居址



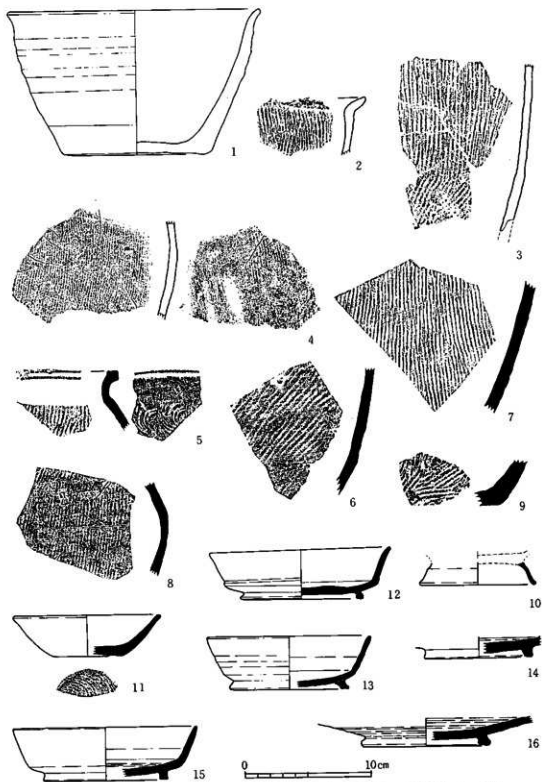
第10图 TAN-KUR 4598 107号住居址



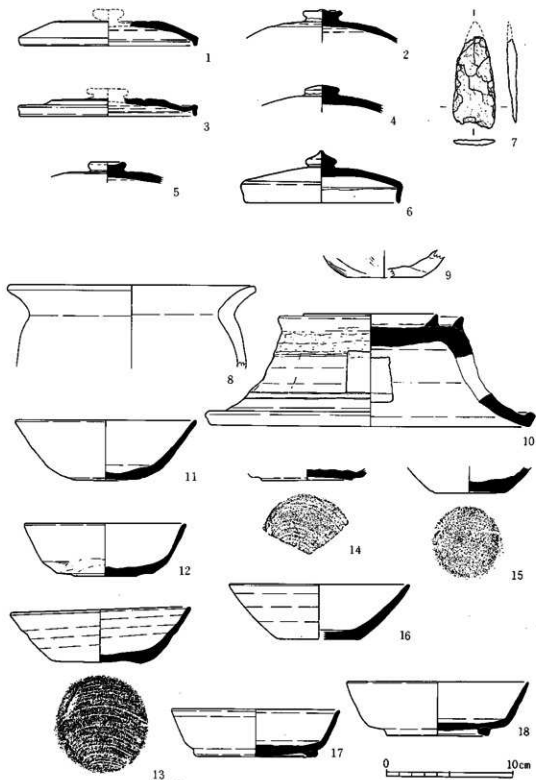
第11图 TAN-KUR4598 107·108号住居址(107号住1~3, 108号住4~16)



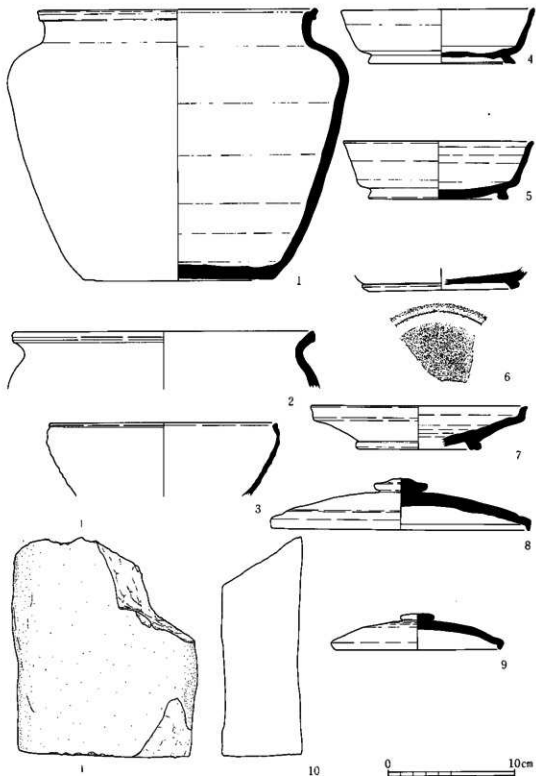
第12图 TAN-KUR4598 108号住居址



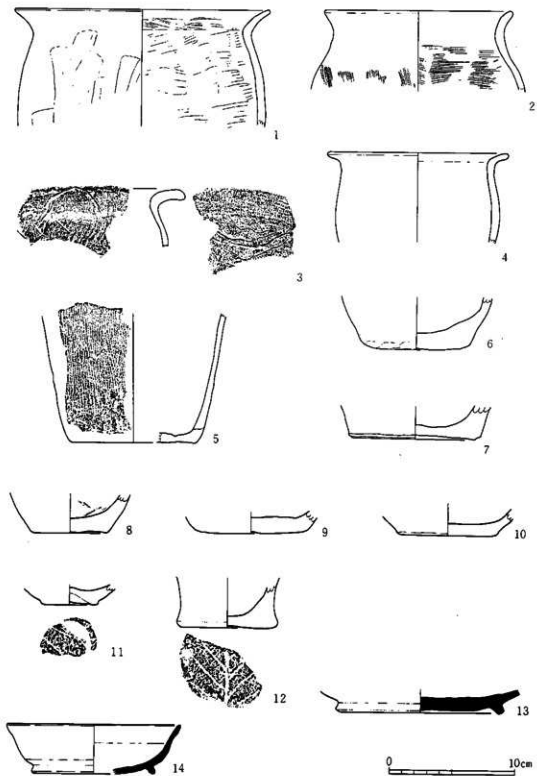
第13图 TAN-KUR4598 107-110号住居址 (107号住1, 110号住2~16)



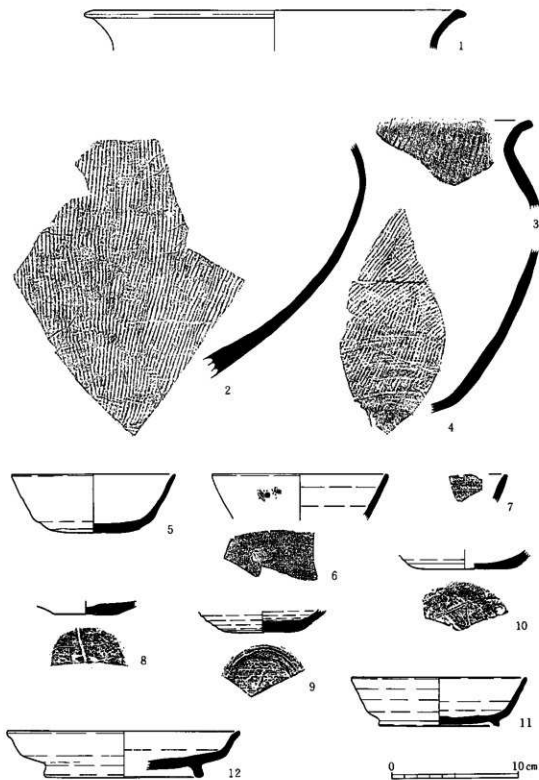
第14图 TAN·KUR 4598 110·112号住居址 (110号住 1~7, 112号住 8~18)



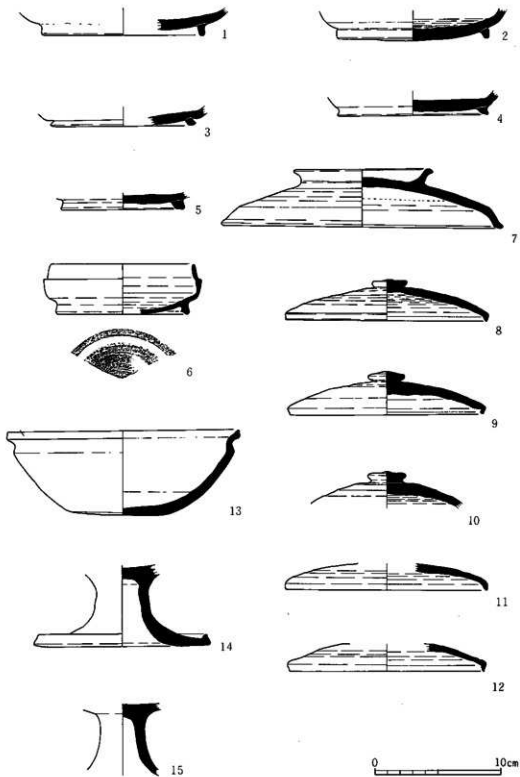
第15图 TAN-KUR 4598 112号住居址



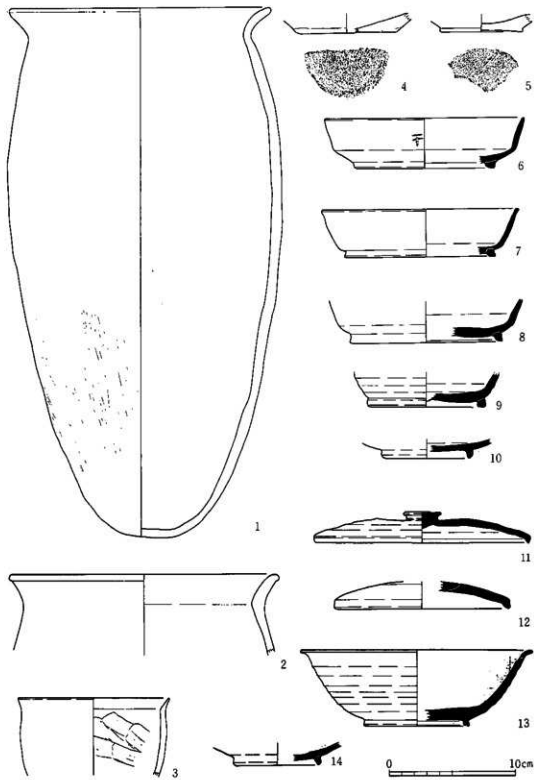
第16图 TAN·KUR4598 114号住居址



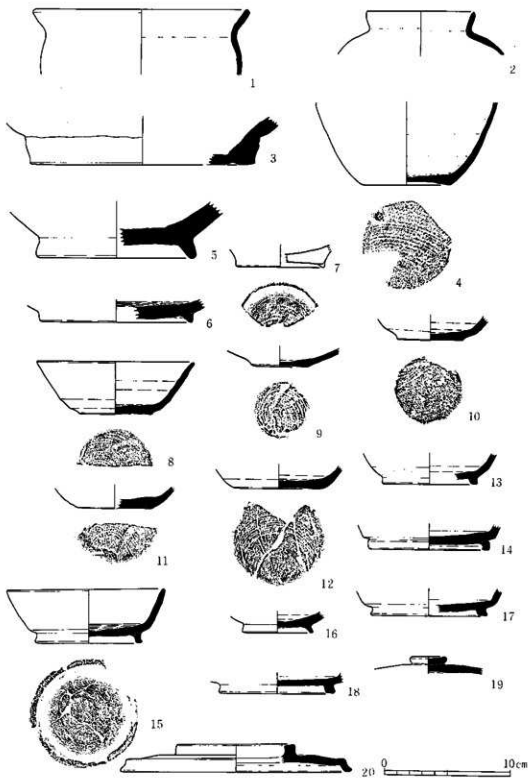
第17图 TAN·KUR 4598 114号住居址



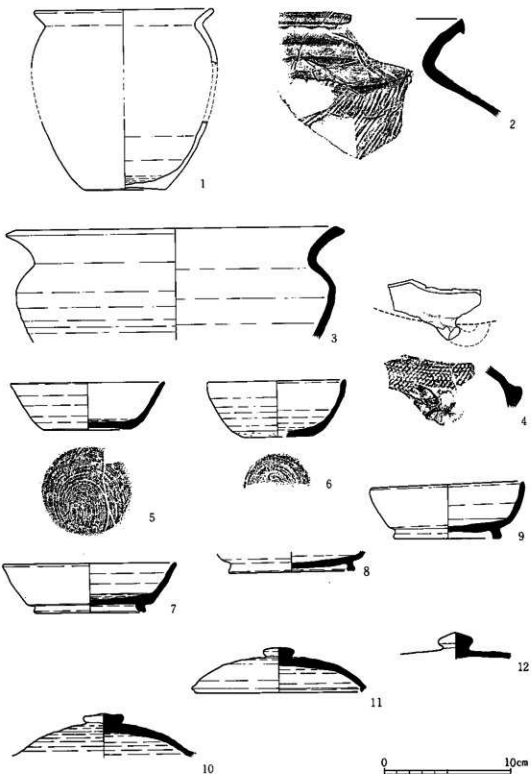
第18图 TAN-KUR4598 114号住居址



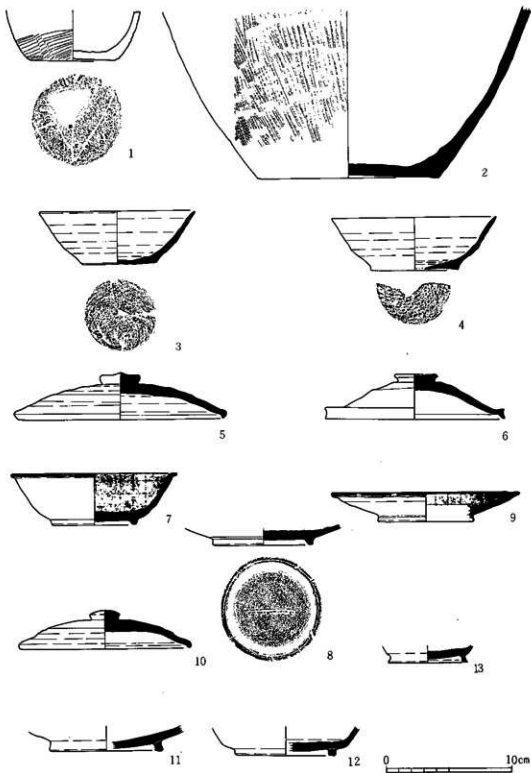
第19图 TAN·KUR4598 117号住居址



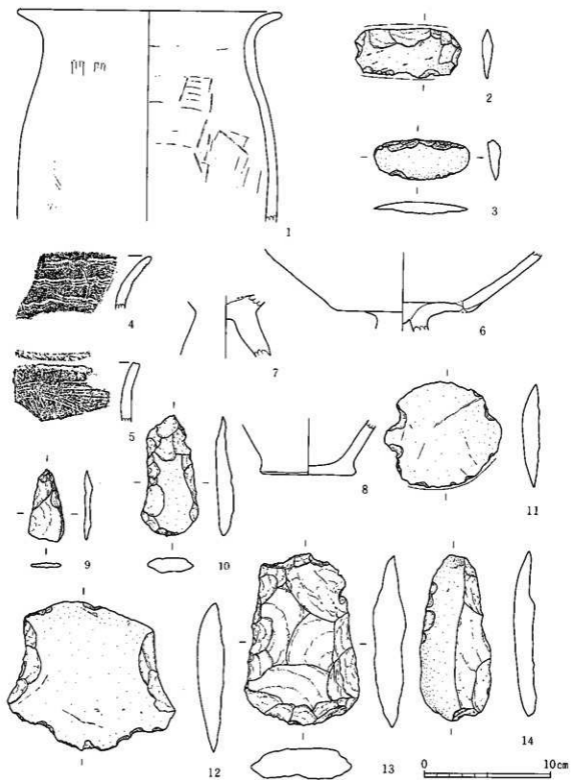
第20图 TAN·KUR 4598 115号住居址·小竖穴4
 (115号住 6~12·15~17·20, 小竖穴 4·1~5·13·14·18·19)



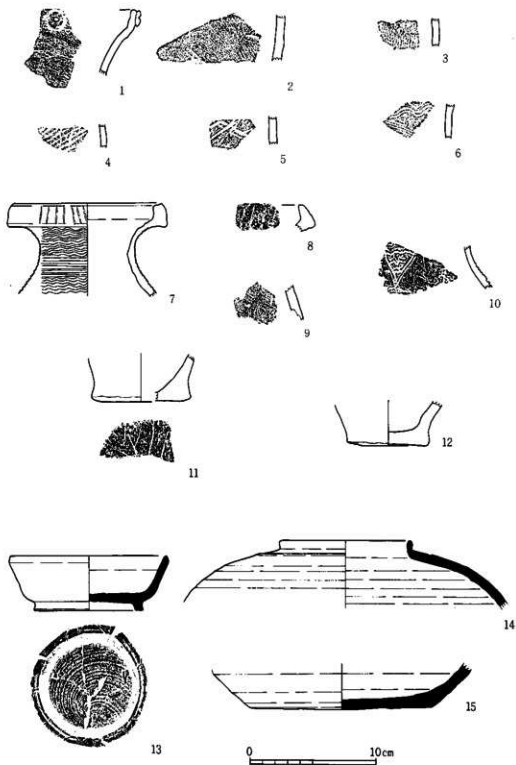
第21圖 TAN-KUR 4598 小壘穴 4



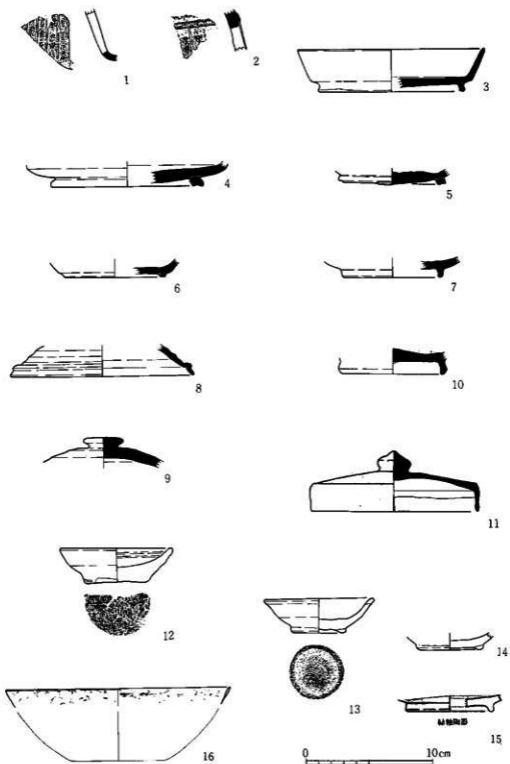
第22圖 TAN-KUR 4598 小壘穴 5・土坑24・26・28
 (小壘穴 5 1~9, 土坑24 10, 土坑26 11-12, 土坑28 13)



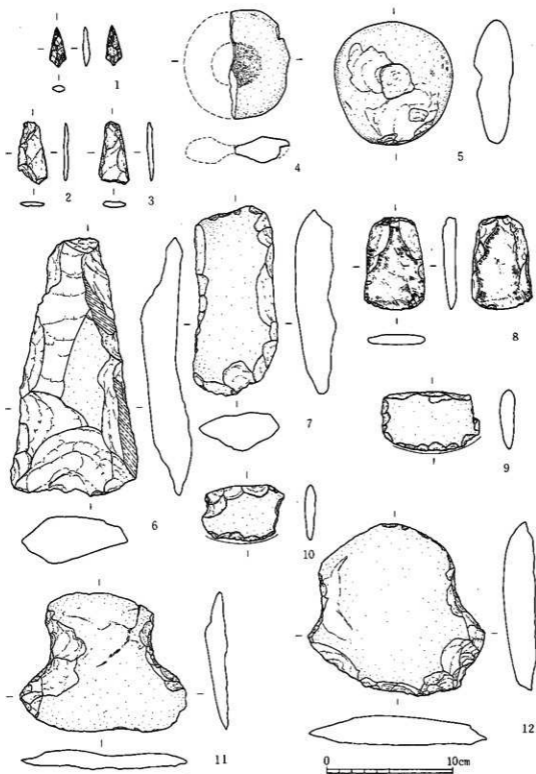
第23图 TAN·KUR4598 掘立柱建物址15·19·21 沟址12
(建15·1, 建19·2, 建21·3, 沟址12·4~14)



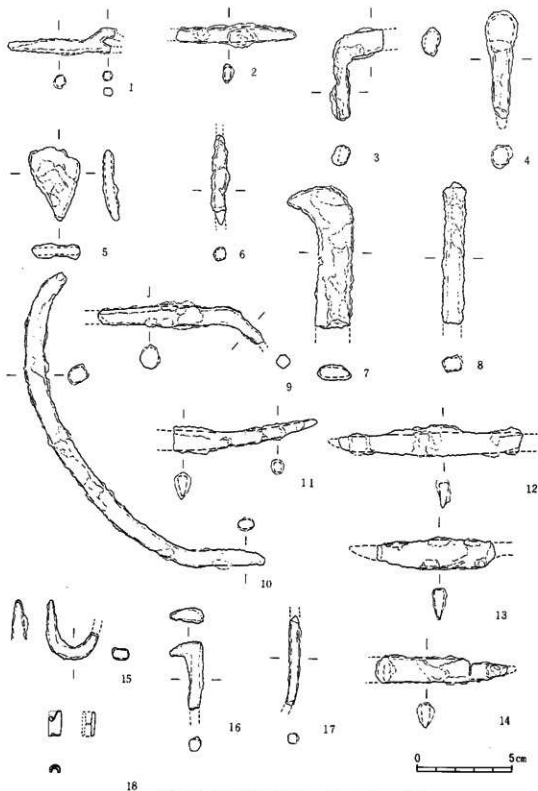
第24圖 TAN·KUR4598 遺構外出土遺物(弥生時代1~12, 平安時代13~15)



第25図 TAN・KUR4598 遺構外出土遺物（須恵器視1・2，須恵器坏3～7，
須恵器蓋8・9，灰軸陶器10・11，かわらけ12，山茶碗13・14，緑釉15，銅碗（さはり）16）



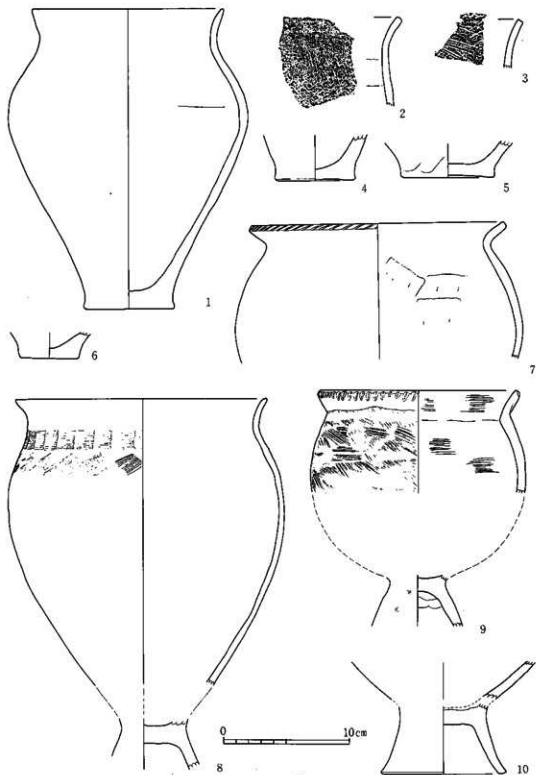
第26图 TAN·KUR4598 遗構外出土石器



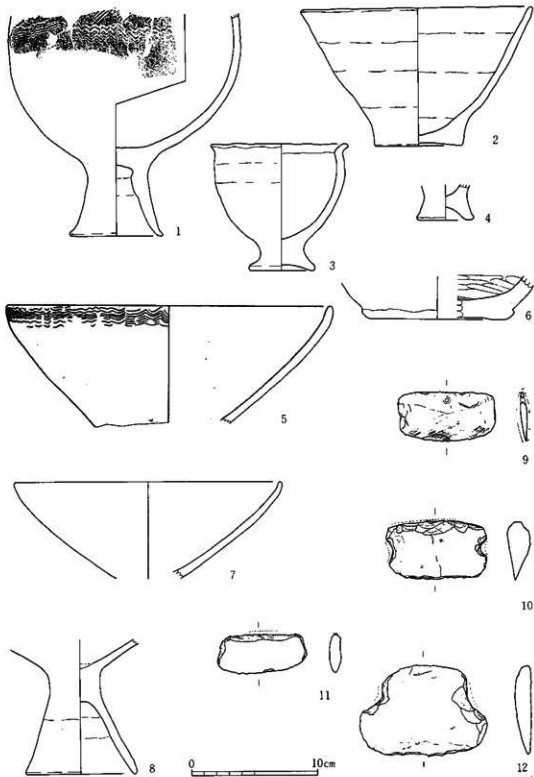
18

第27图 TAN-KUR4598 金属・玉

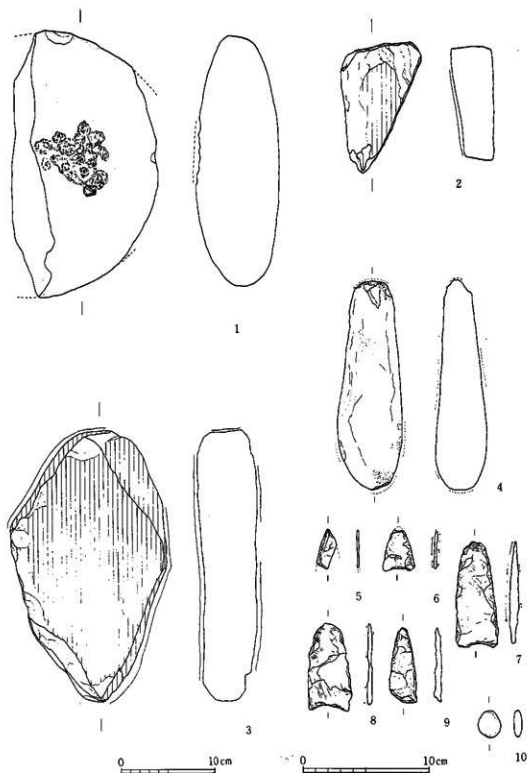
(107号住1~6, 108号住7, 112号住8, 114号住9・10, 小野4 11, BF67 12, BL67 13, BI67 14, BE61 15, BE66 16, BD64 17, 120号住混入18)



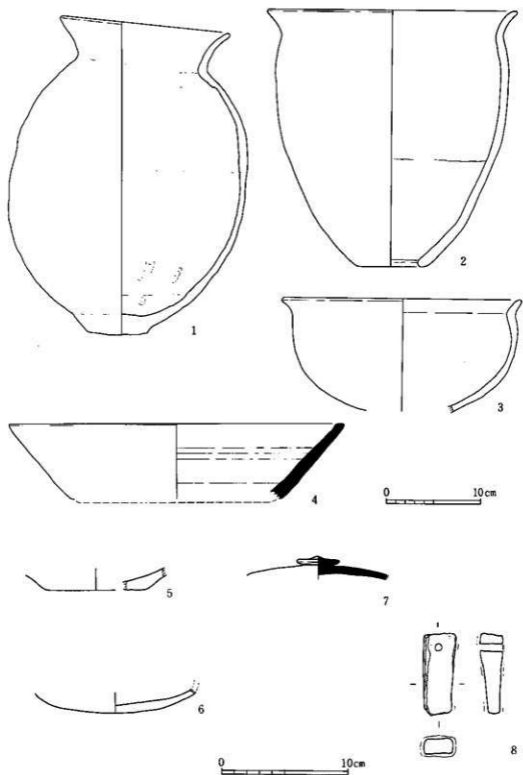
第28图 TAN-KUR 4599 126号住居址



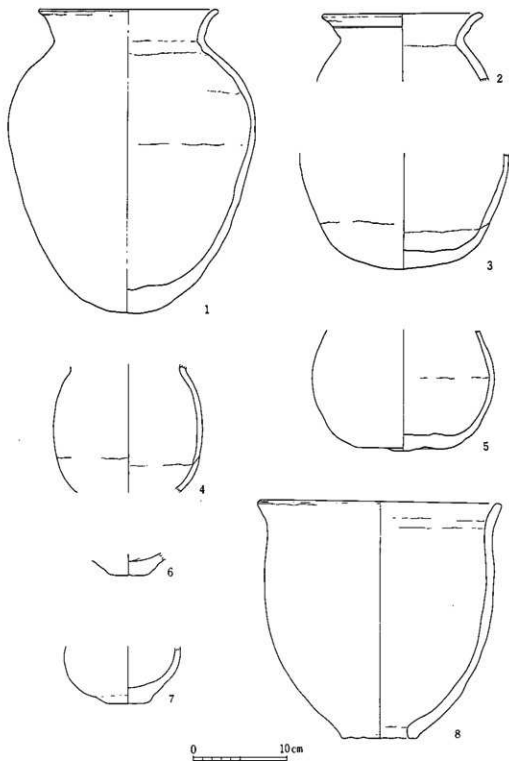
第29图 TAN-KUR4599 126号住居址



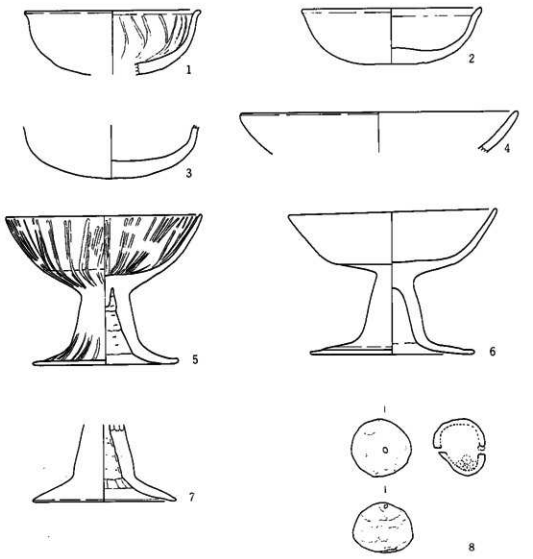
第30图 TAN-KUR4599 126号住居址 (1~3 1/4, 4~10 1/3)



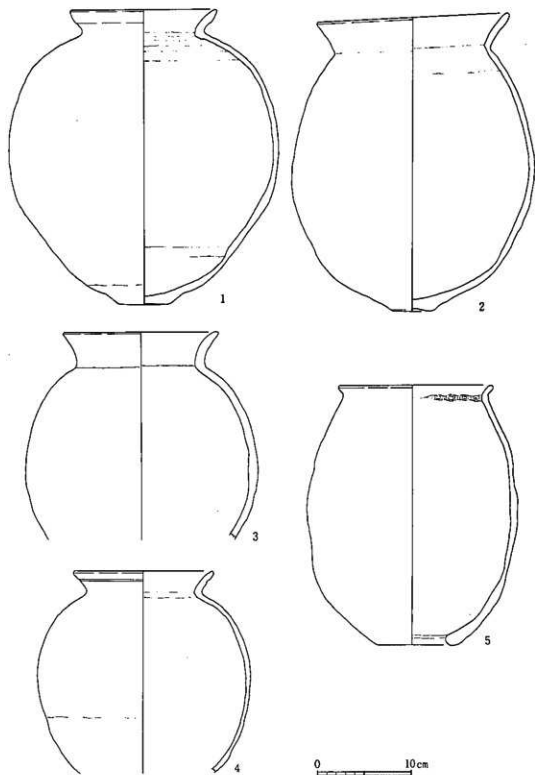
第31图 TAN·KUR 4599 122-124号住居址 (122号住 1~7, 124号住 8)
1~4 1/4, 5~8 1/3



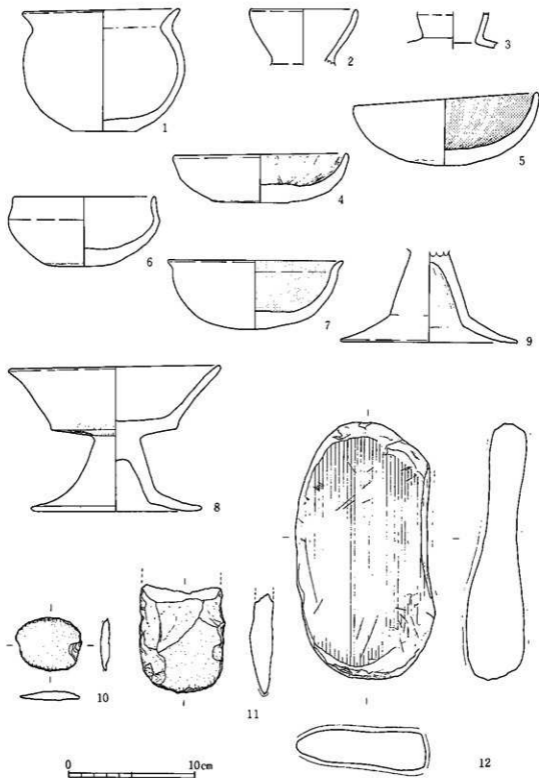
第32圖 TAN-KUR4599 125号住居址



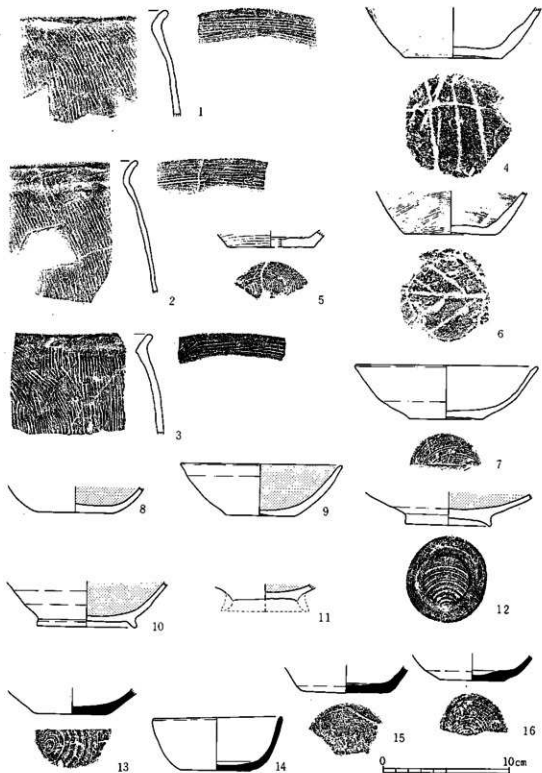
第33图 TAN·KUR 4599 125·128号住居址 (125号住1~8, 128号住9~12)



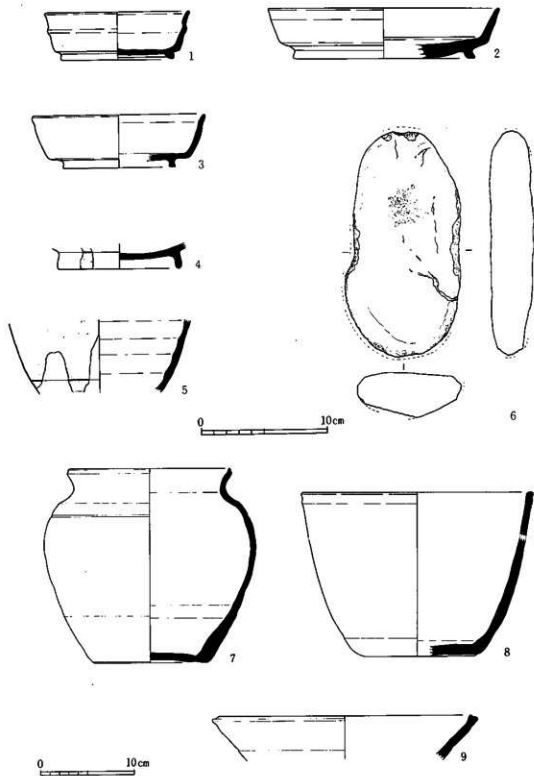
第34图 TAN·KUR4599 129号住居址



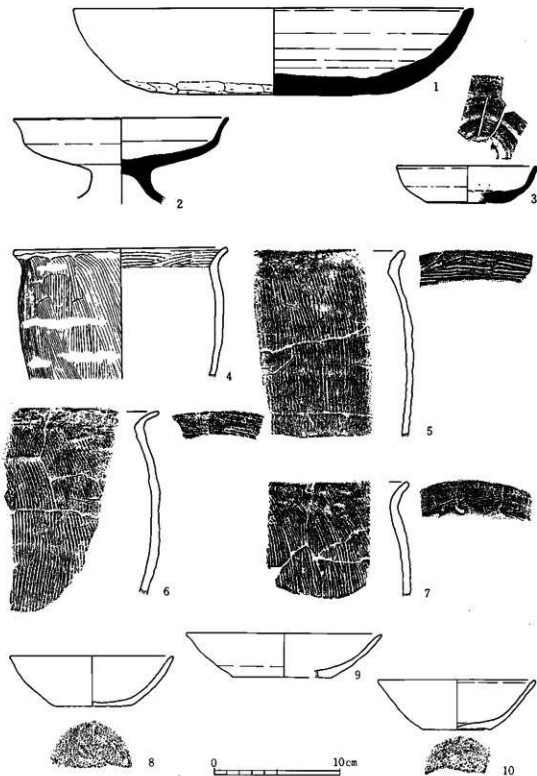
第35图 TAN-KUR 4599 129号住居址



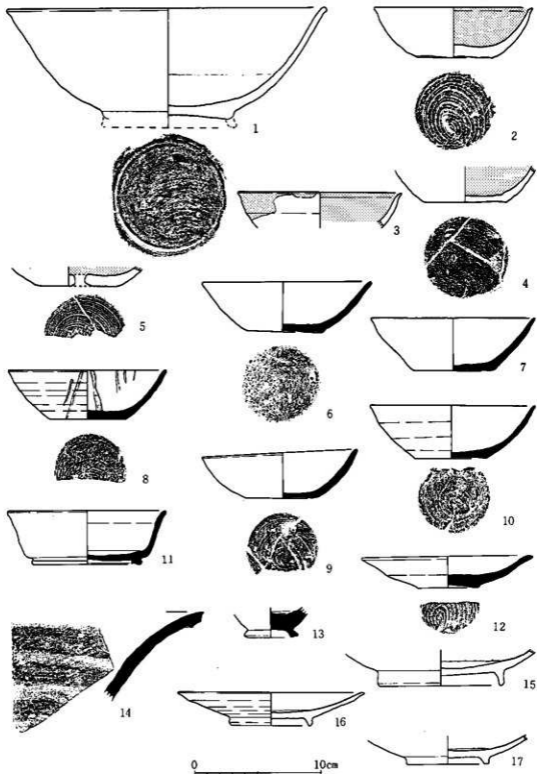
第36图 TAN-KUR4599 123号住居址



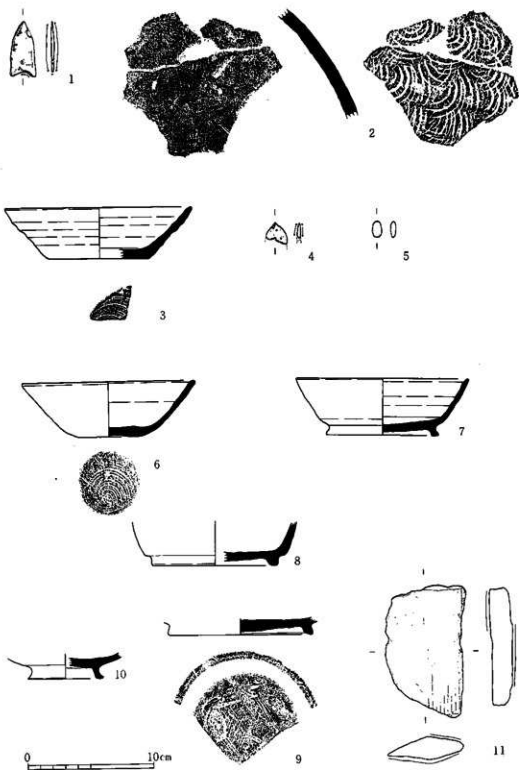
第37图 TAN-KUR4599 123号住居址 (1~6 1/3, 7~8 1/4)



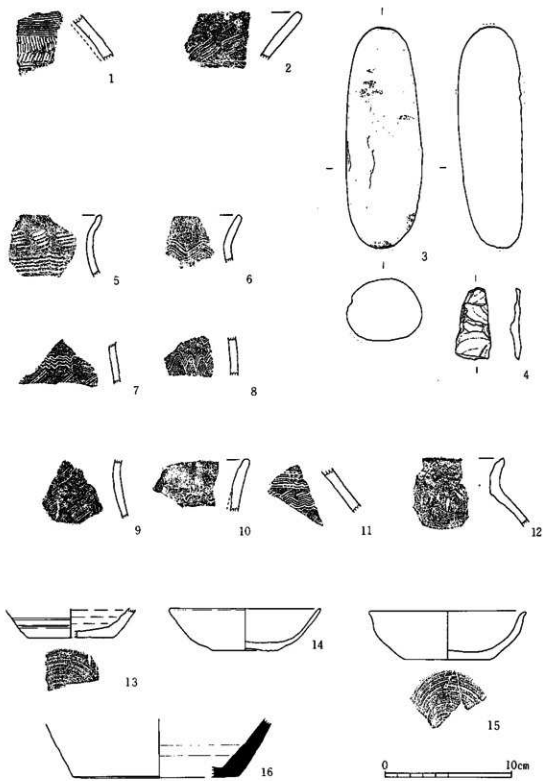
第38図 TAN-KUR4599 AA60・AC61遺構不明住居址 (AA60 1~3, AC61 4~10)



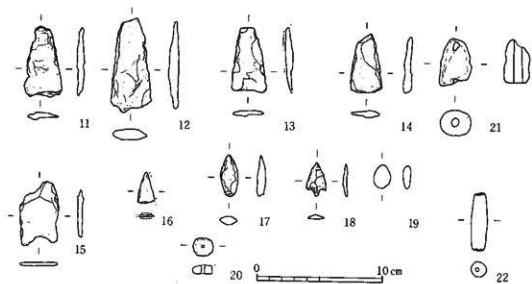
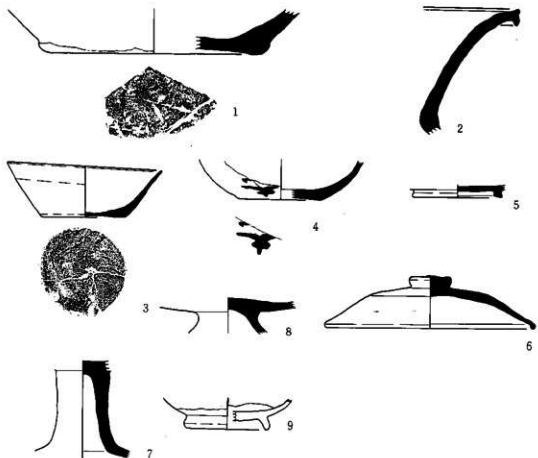
第39图 TAN-KUR 4599 AC61遺構不明住居址



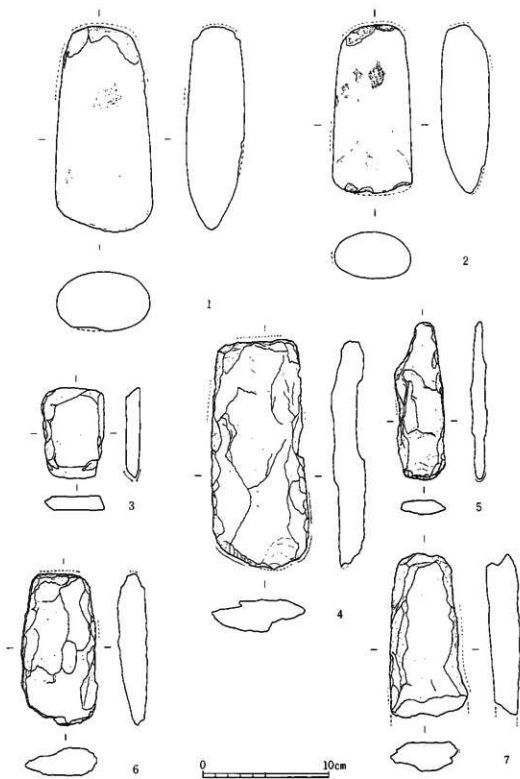
第40图 TAN-KUR4599 127-130号住居址，掘立柱建物址22
(127号住1，130号住2~5，建物址22 6~11)



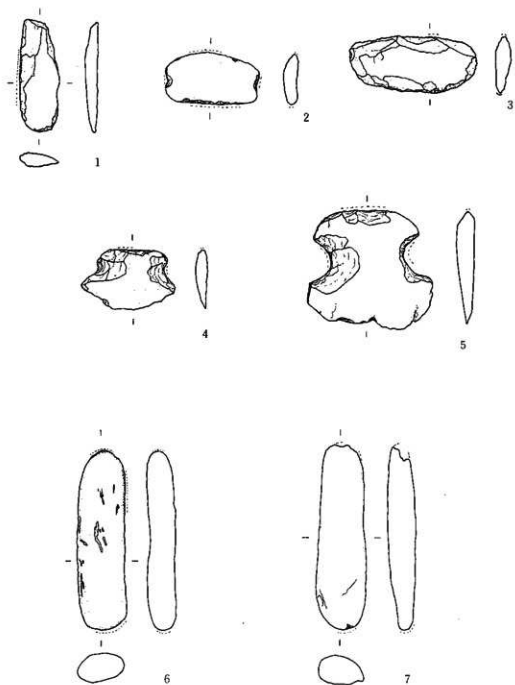
第41图 TAN·KUR4599 方形周溝墓 4·5, 遺構外出土遺物
 (方周4 1·2, 方周5 3·4, 遺構外5~16)



第42圖 TAN-KUR4599 遺構外出土遺物

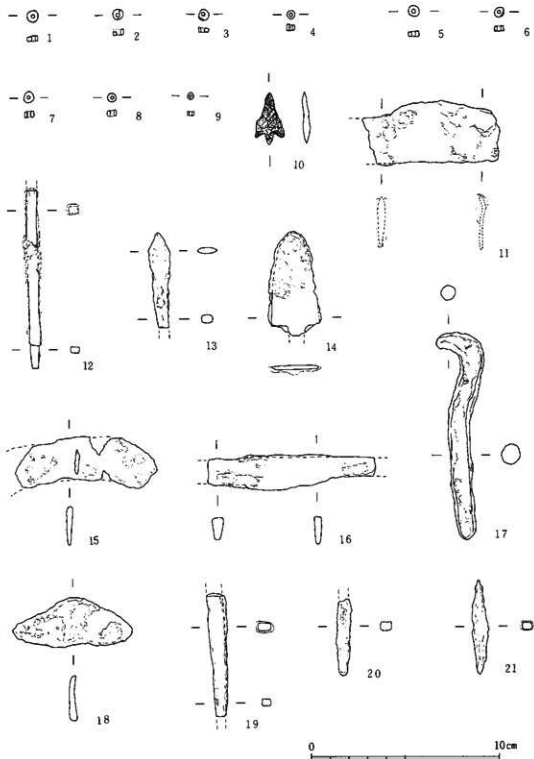


第43图 TAN·KUR4599 遺構外出土遺物

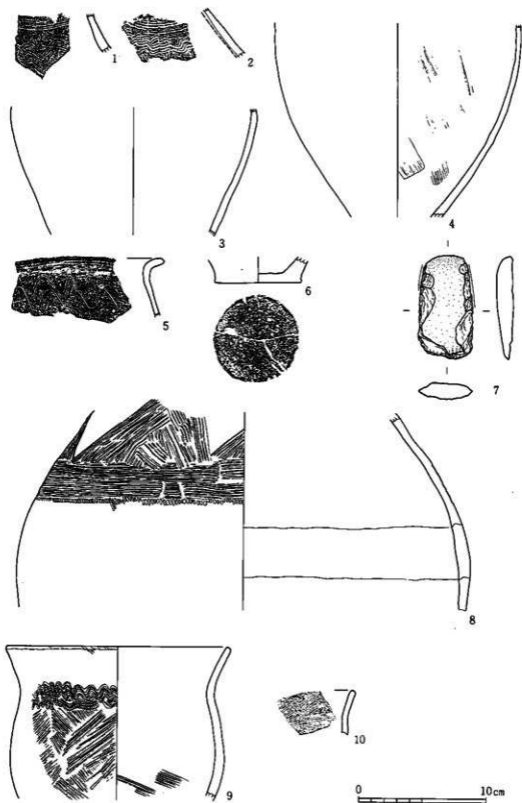


0 10cm

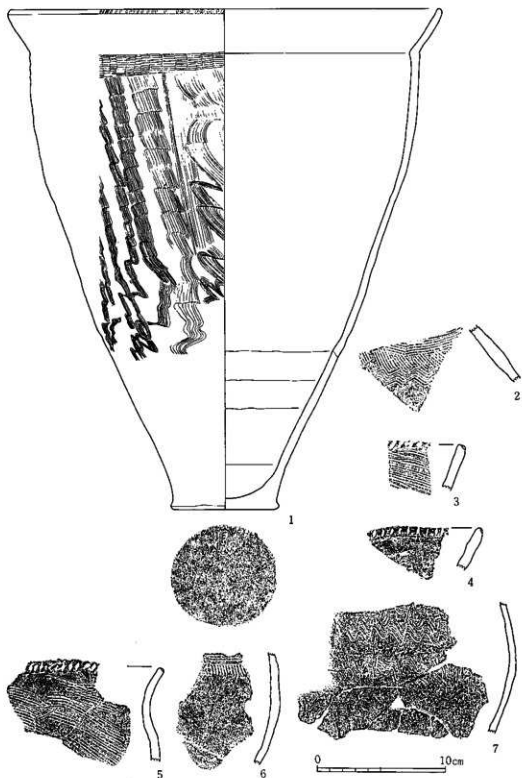
第44圖 TAN-KUR4599 遺構外出土遺物



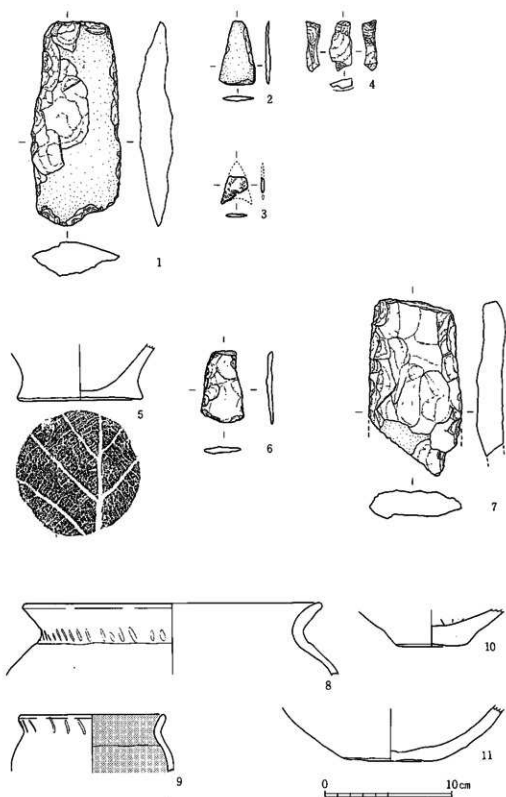
第45图 TAN-KUR4599 白玉・石鏃・金属器
(124号住1~4, 125号住5~10, 137号住11, 138号住12, 遺構外13~21)



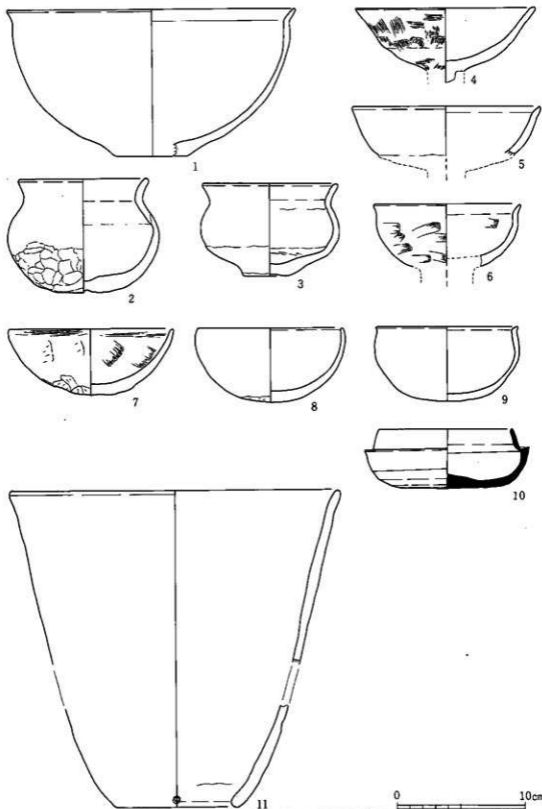
第46图 TAN-KUR4601 132・134号住居址出土遺物 (132号住 1~7, 134号住 8~10)



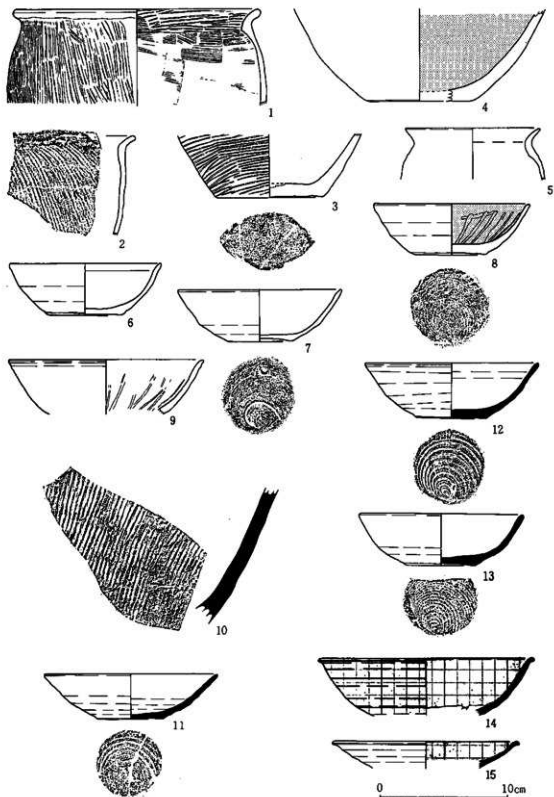
第47图 TAN-KUR 4601 148号住居址出土遗物



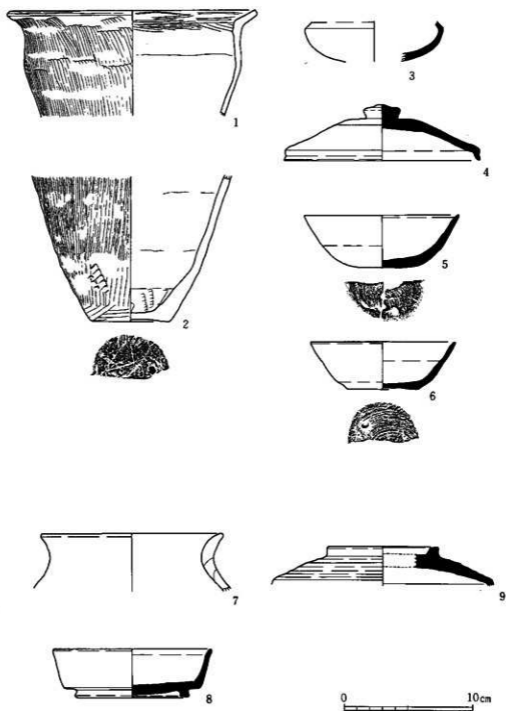
第48图 TAN-KUR4601 148-135-150-4号 住居址出土遗物
 (148号住 1-4, 135号住 5-6, 150号住 7, 4号住 8-11)



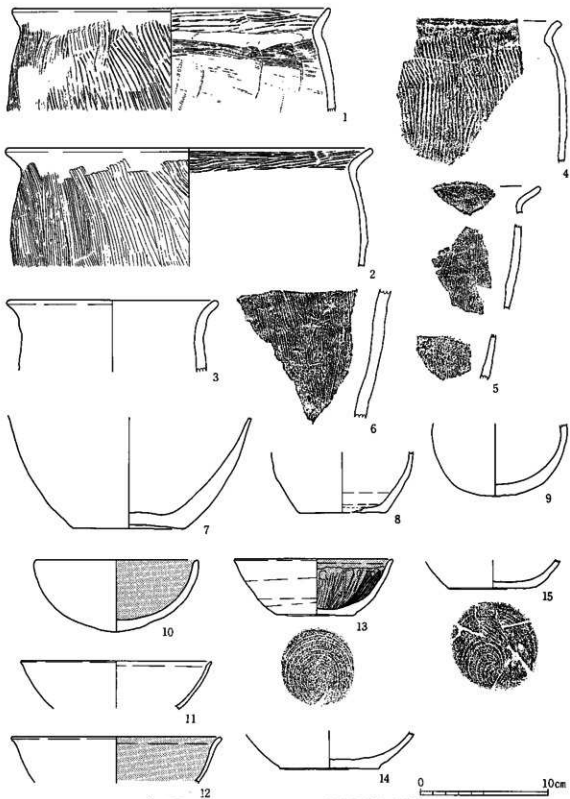
第49图 TAN·KUR4601 138·146号住居址出土遺物
 -162- (138号住 1-10, 146号住 11)



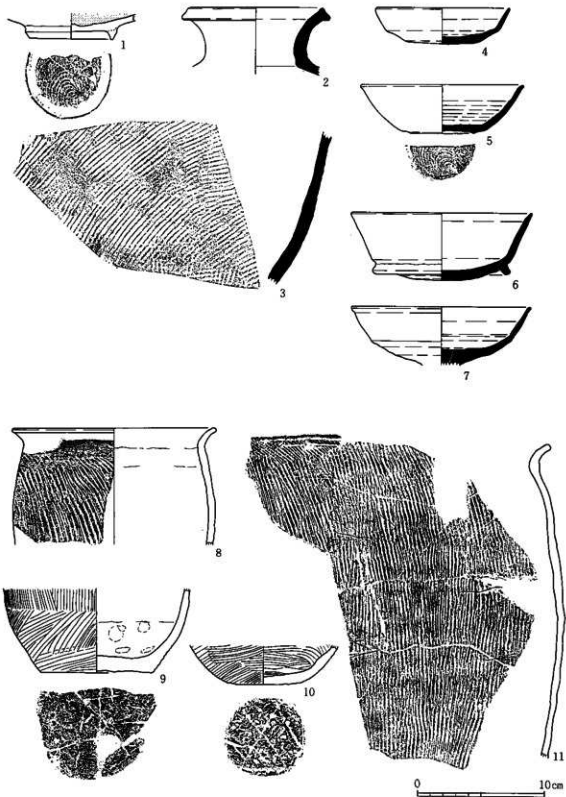
第50圖 TAN-KUR 4601 11号住居址出土遺物



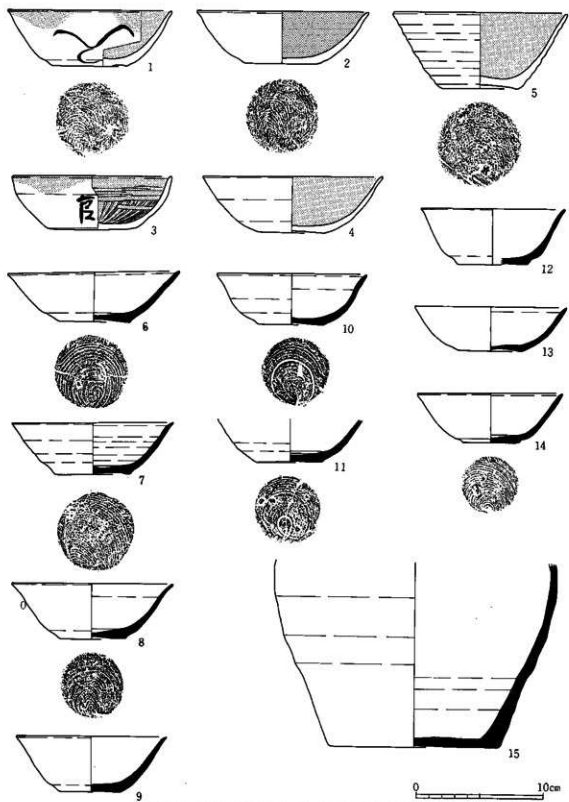
第51图 TAN·KUR4601 133-136号住居址出土遗物
(133号住 1~6, 136号住 7~9)



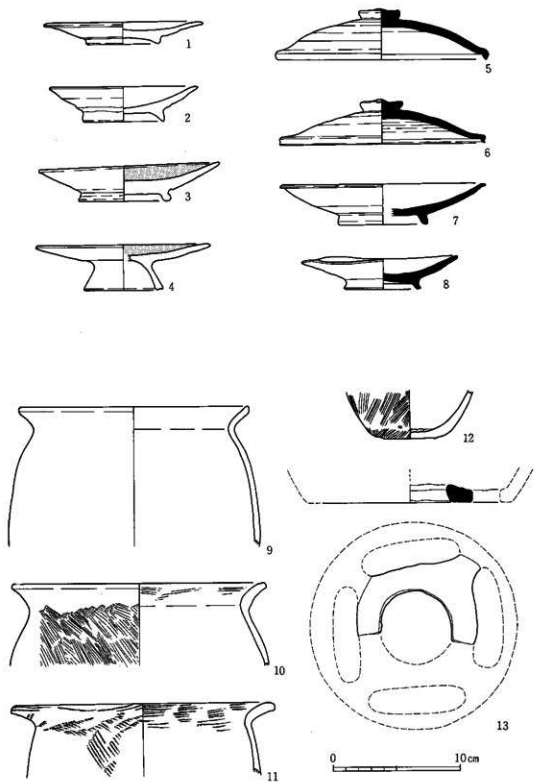
第52图 TAN·KUR4601 137号住居址出土遗物



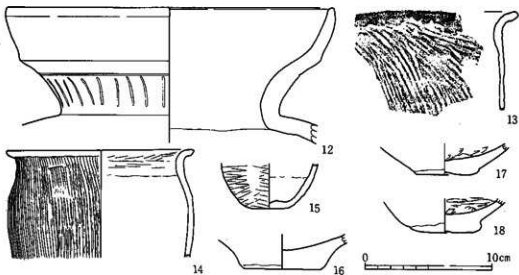
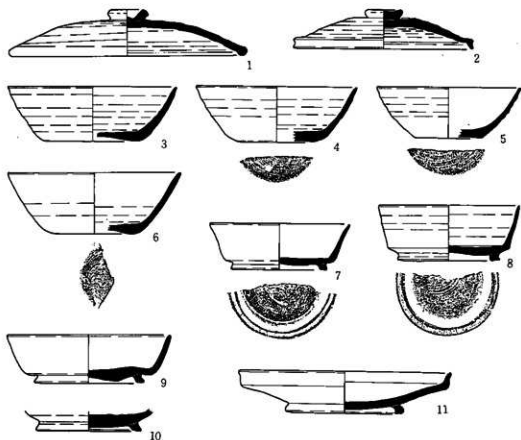
第53图 TAN·KUR4601 137·139号住居址出土遗物 (137号住 1-7, 139号住 8-11)



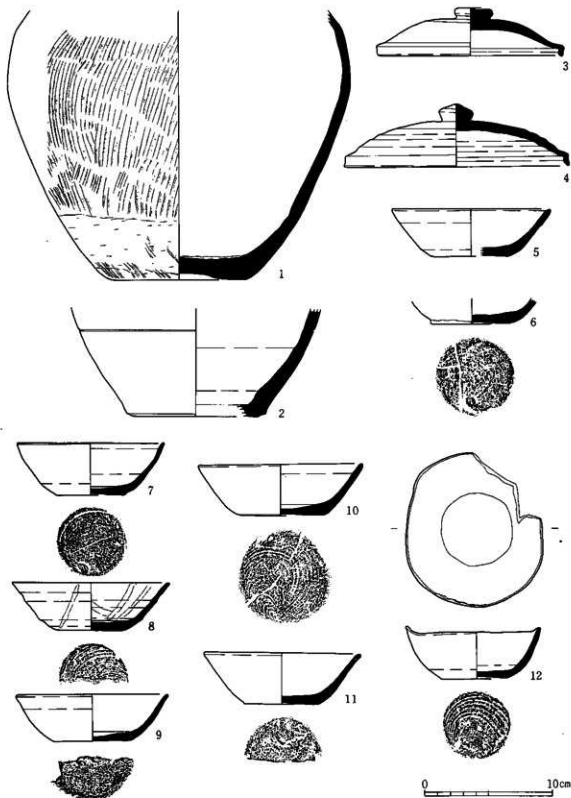
第54图 TAN-KUR4601 139号住居址出土遗物



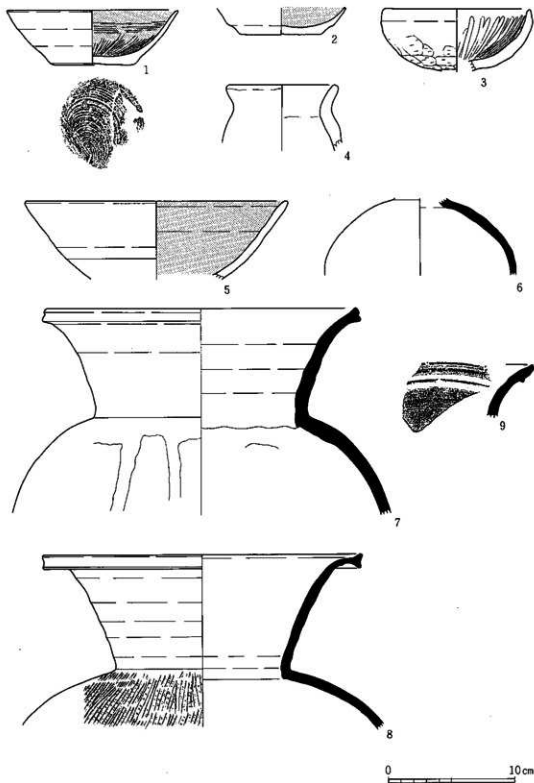
第55图 TAN·KUR4601 139·140号住居址出土遗物 (139号住 1-8, 140号住 9-13)



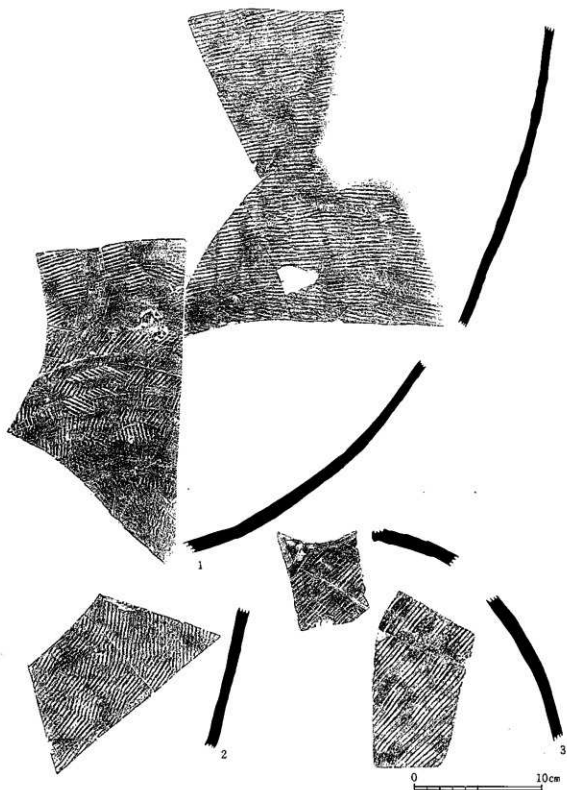
第56图 TAN·KUR4601 140·141号住居址出土遗物 (140号住 1-11, 141号住 12-18)



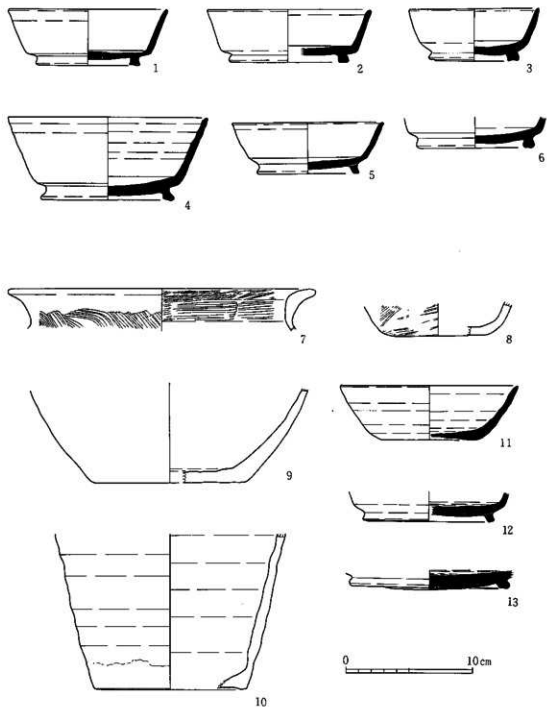
第57图 TAN-KUR4601 141号住居址出土遺物



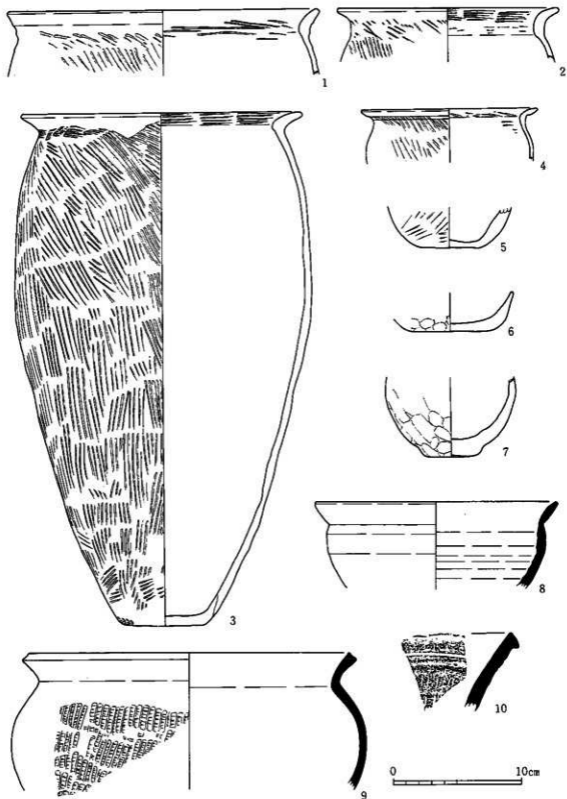
第58图 TAN-KUR4601 141号住居址出土遗物



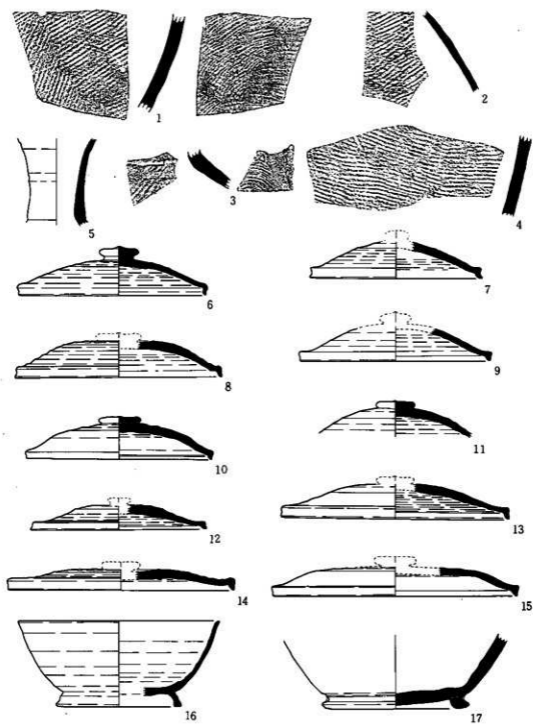
第59图 TAN·KUR4601 141号住居址出土遗物



第60図 TAN-KUR4601 141・142号住居址出土遺物 (141号住 1-6, 142号住 7-10)

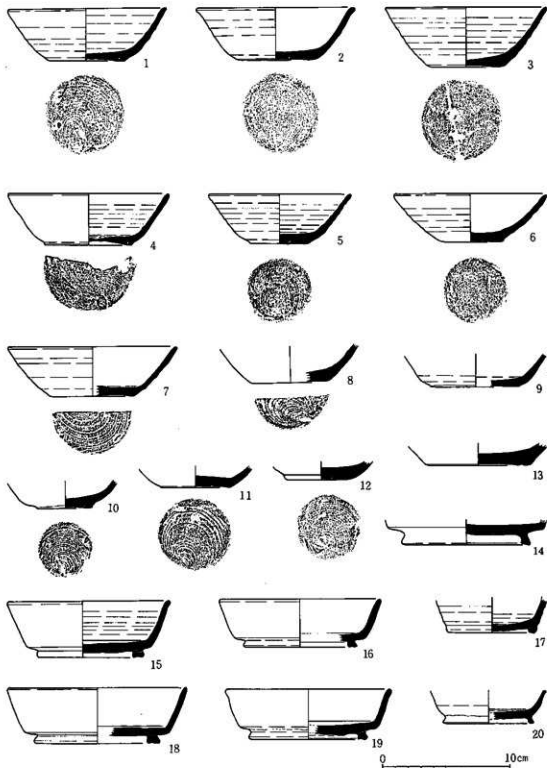


第61圖 TAN-KUR4601 143号住居址出土遺物

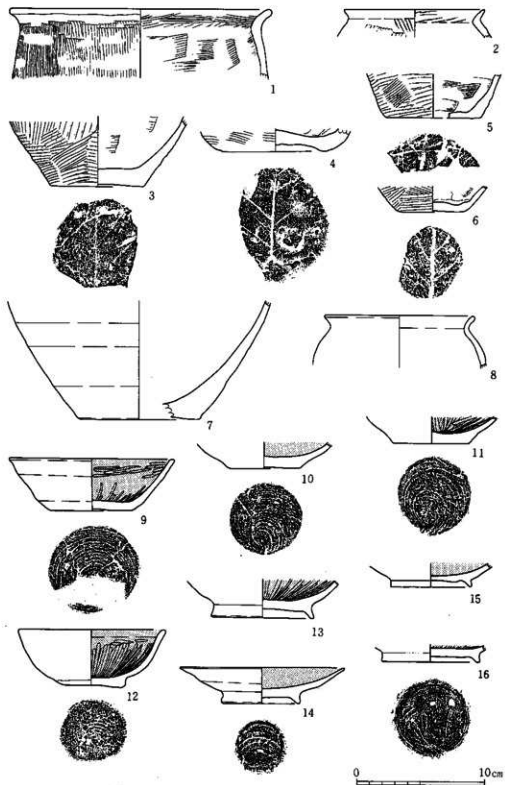


0 10cm

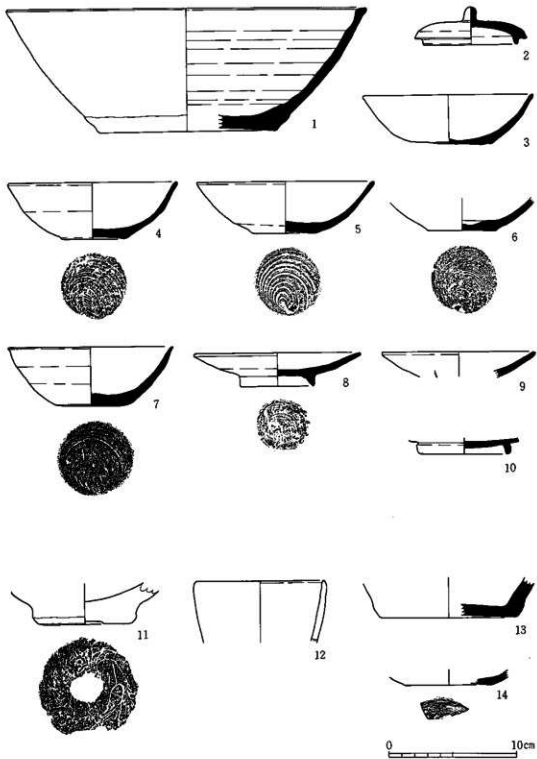
第62图 TAN-KUR4601 143号住居址出土遗物



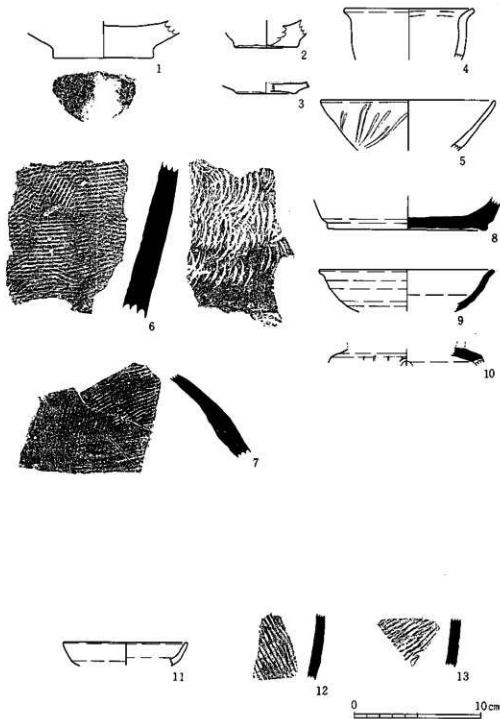
第63图 TAN-KUR4601 143号住居址出土遺物



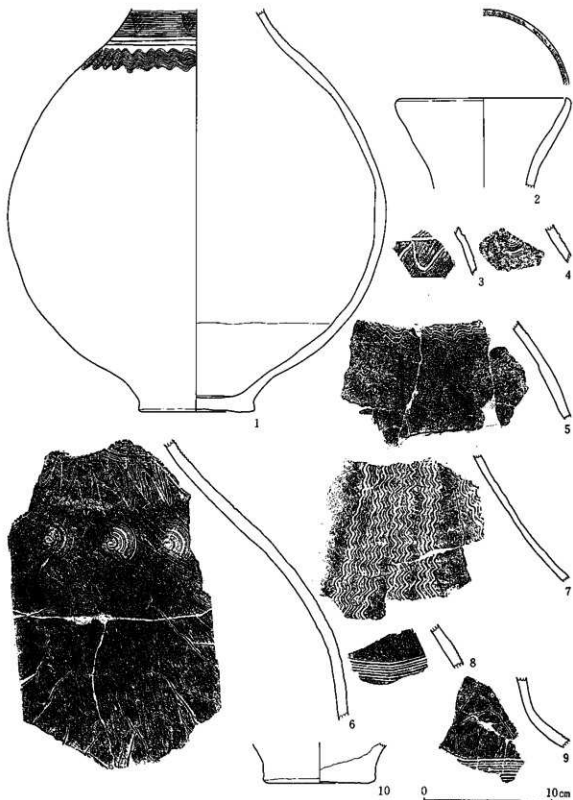
第64图 TAN·KUR4601 144号住居址出土遗物



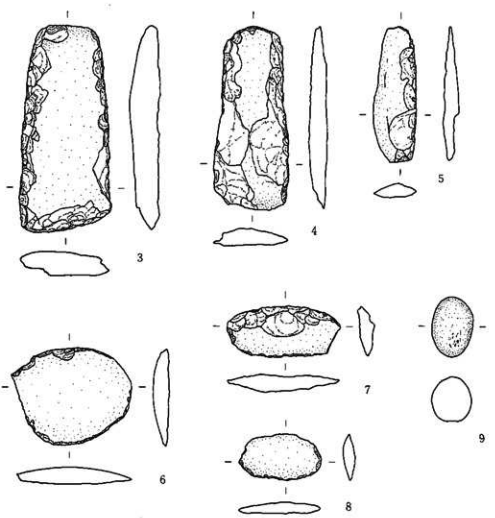
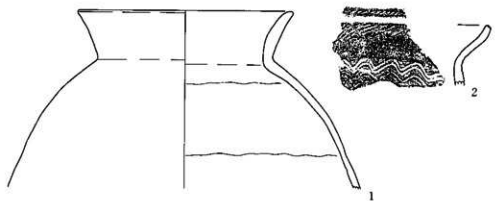
第65图 TAN·KUR4601 144·145号住居址出土遺物 (144号住 1~10, 145号住11~14)



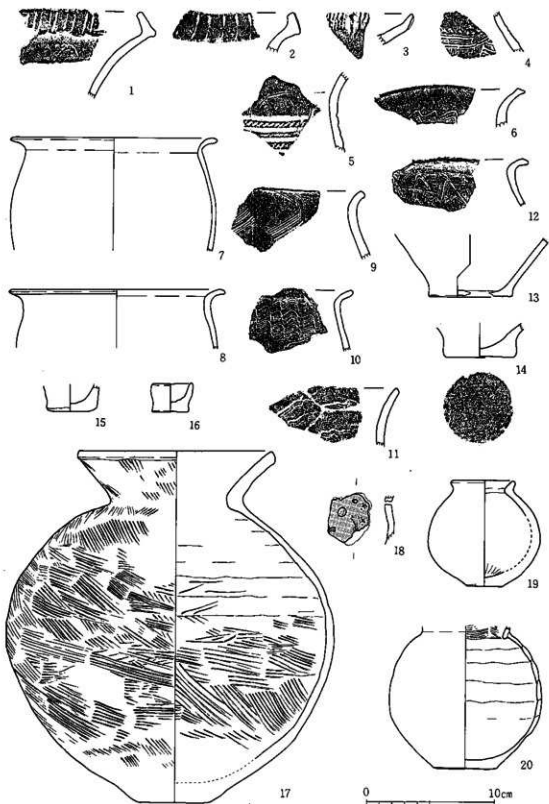
第66图 TAN·KUR4601 147·149号住居址出土遗物 (147号住 1-10, 149号住 11-13)



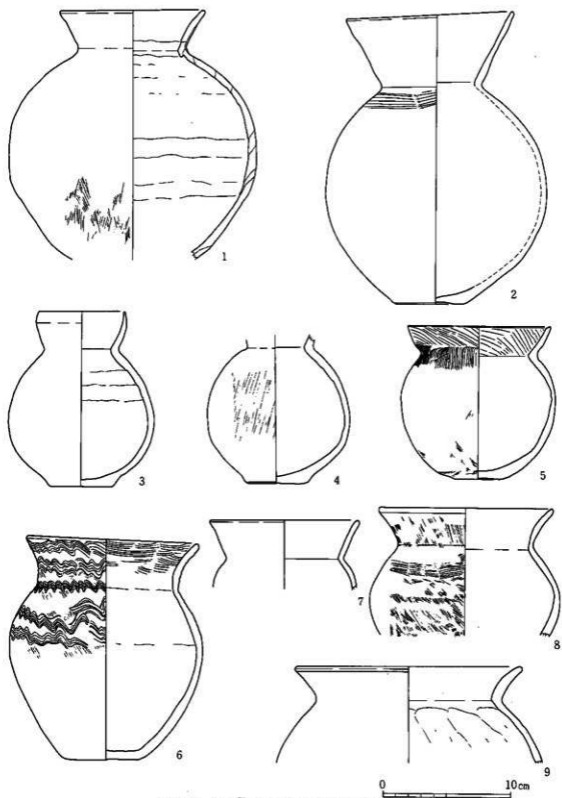
第67圖 TAN·KUR4601 方形周溝墓1出土遺物



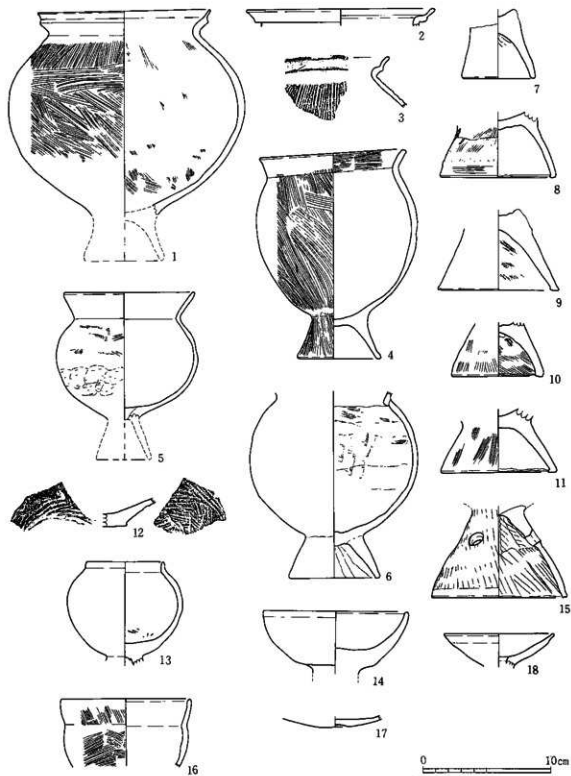
第68圖 TAN·KUR4601 方形周溝墓1出土遺物



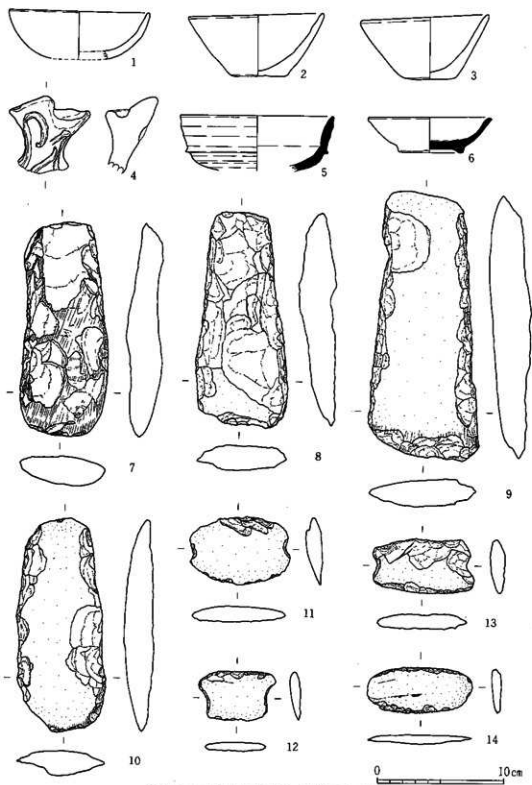
第69图 TAN-KUR4601 沟址12出土遗物



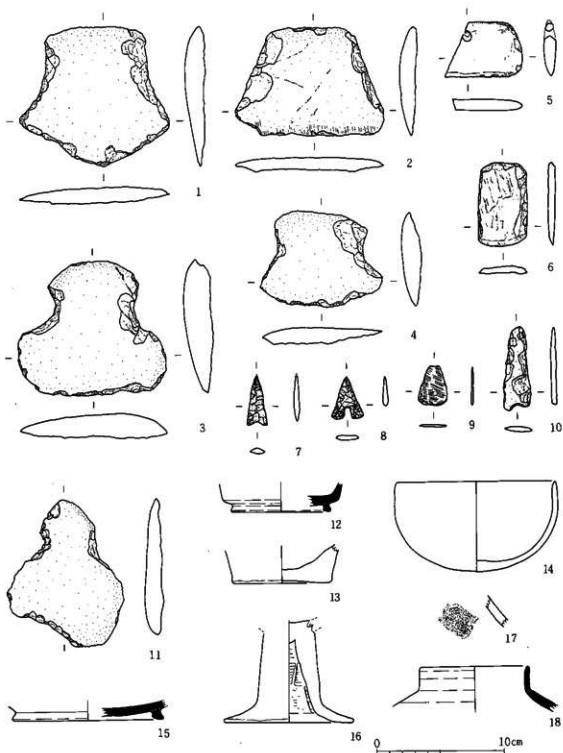
第70图 TAN·KUR4601 溝址12出土遺物



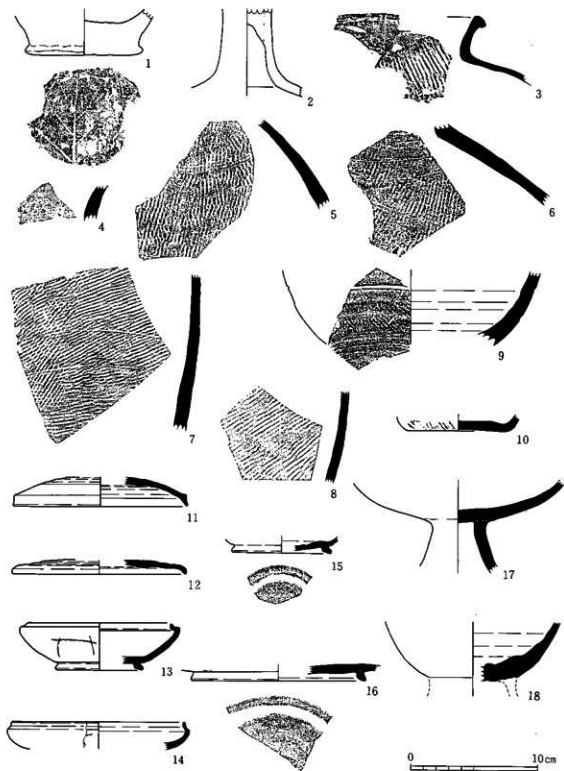
第71圖 TAN-KUR 4601 溝址12出土遺物



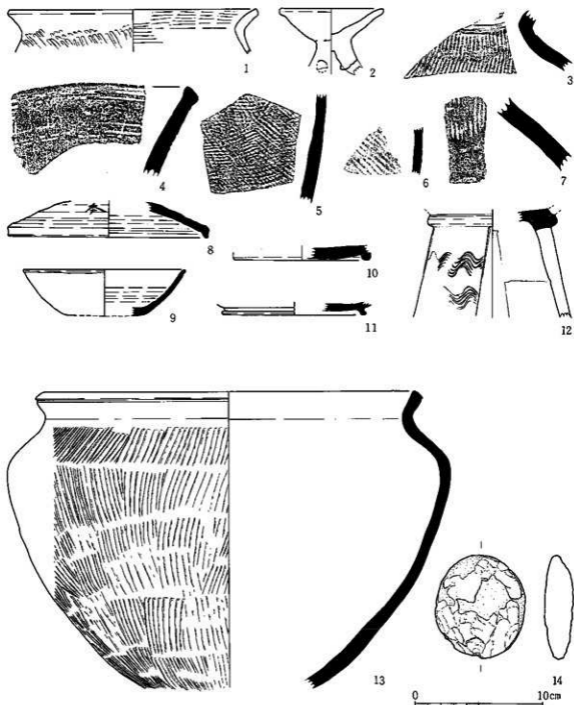
第72圖 TAN-KUR 4601 溝址12出土遺物



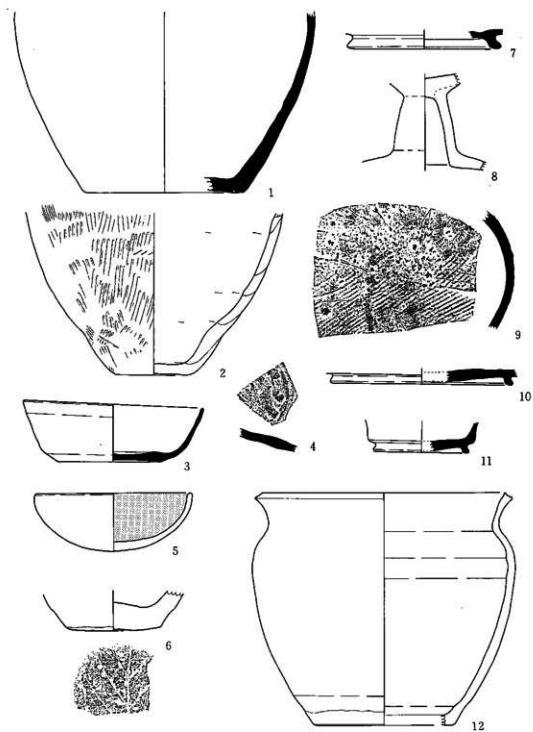
第73图 TAN-KUR4601 溝址12·5·17·25出土遺物
 (溝址12 1-10, 溝址5 11·12, 溝址17 13-16, 溝址25 17-18)



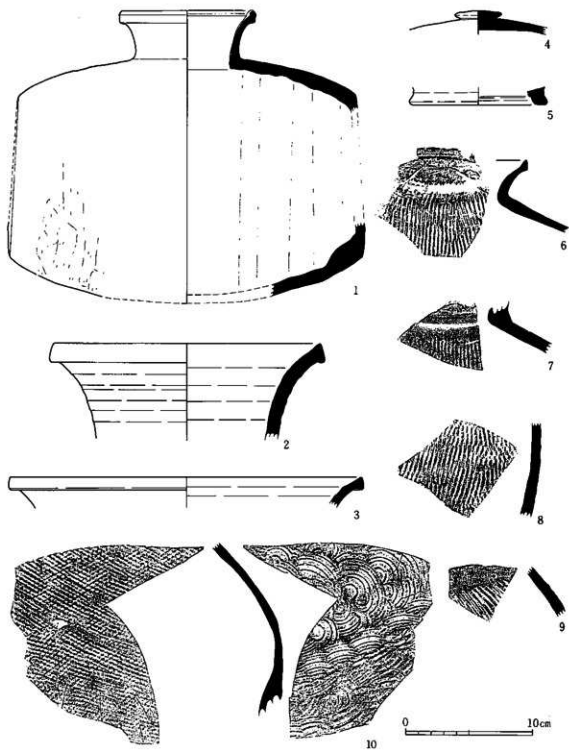
第74图 TAN-KUR 4601 溝址26出土遺物



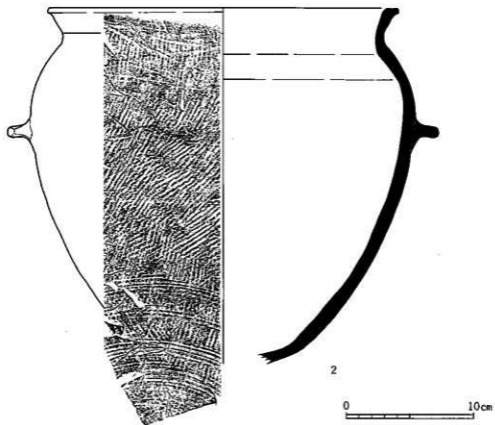
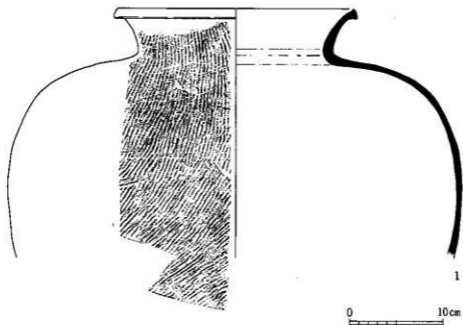
第75图 TAN-KUR 4601 小竖穴8·9出土遗物 (小竖穴8 1-12, 小竖穴9 13-14)



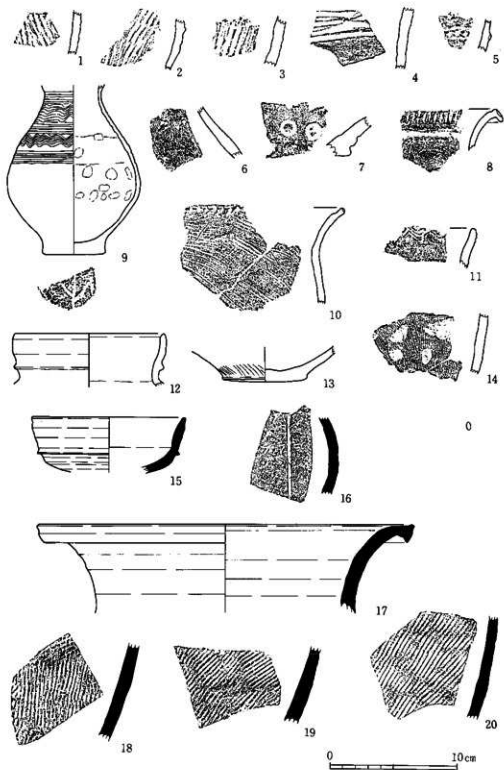
第76图 TAN-KUR4601 建物址26, 土坑33-37-40-42-44-48-50-51出土遺物
 (建物址26 1-2, 土坑33 3-4, 土坑37 5, 土坑40 6-7, 土坑42 8, 土坑44 9, 土坑48 10,
 土坑50 11, 土坑51 12)



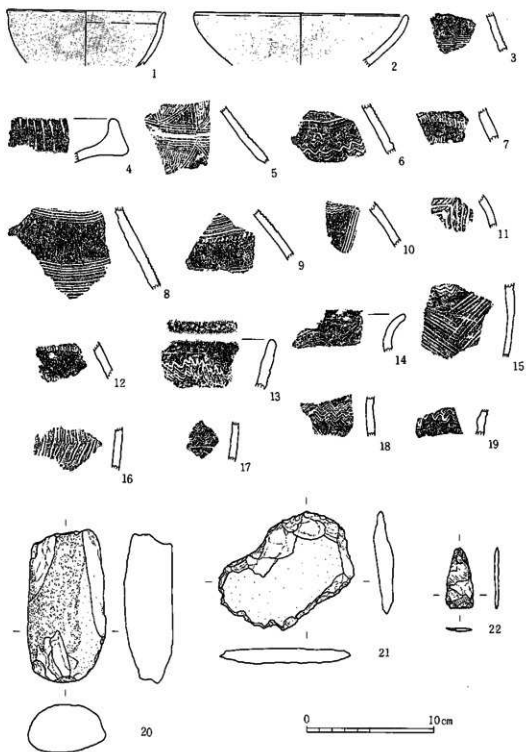
第77圖 TAN·KUR4601 土坑38出土遺物



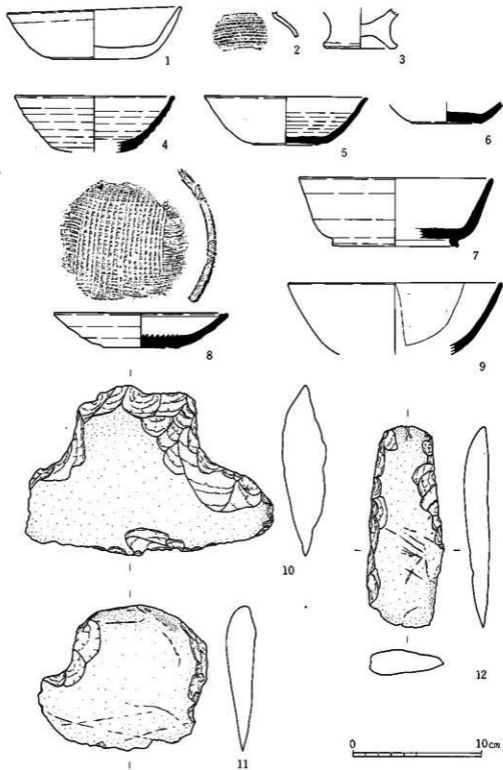
第78圖 TAN·KUR4601 土坑38·43出土遺物（土坑38 1, 土坑43 2）



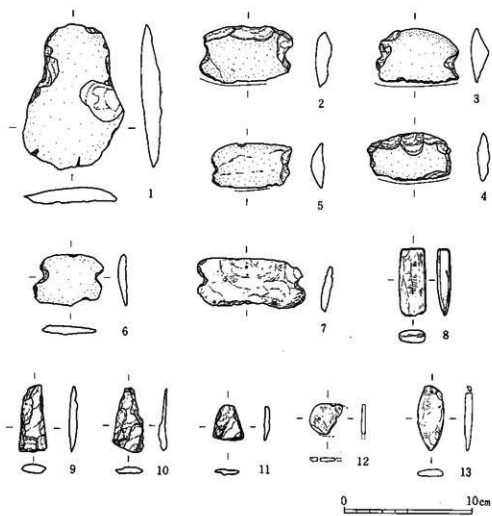
第79图 TAN-KUR4601 遺構外出土遺物



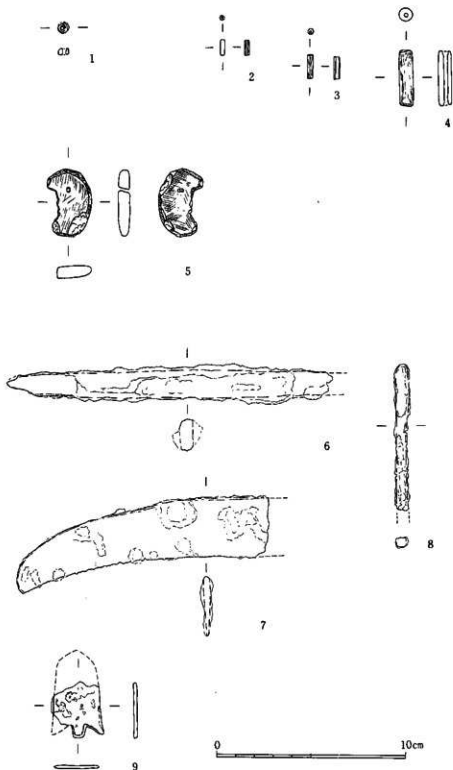
第80圖 TAN·KUR4601 遺構外出土遺物 (方形周溝墓1周辺)



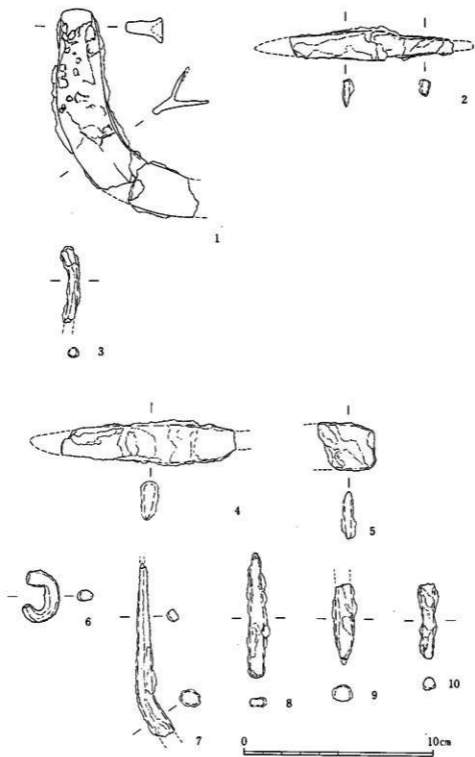
第81図 TAN-KUR4601 遺構外出土遺物



第82図 TAN・KUR4601 遺構外出土遺物



第83图 TAN·KUR4601 出土石製品, 鉄製品
 (137号住 1, 方形周溝蓋 1·2, 溝址 12·3, 土坑 41·4, 遺構外 5, 137号住 6~8, 138号住 9)



第84図 TAN-KUR 4601 出土鉄製品 (141号住1・143号住2・11号住3, 遺構外4~10)

写真図版

図版 1



発掘前の田中倉垣外地籍



遺構分布状況

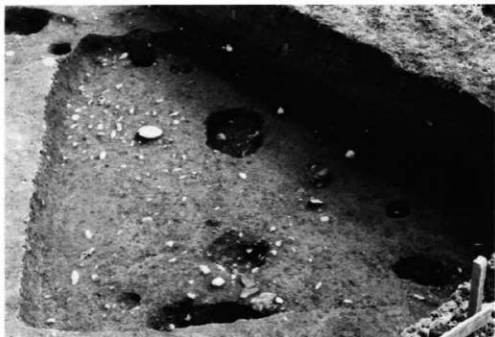


111号住居址



同炉址断面

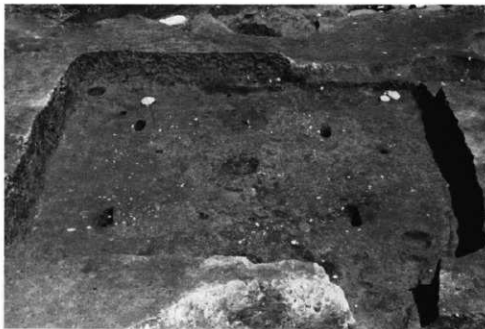
图版 3



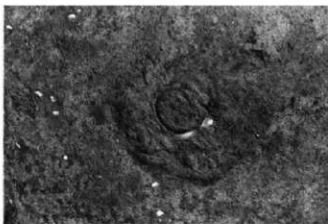
113号住居址



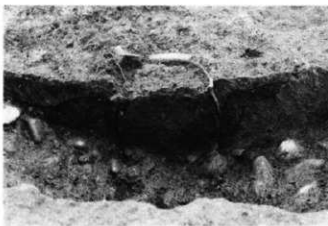
121号住居址



118号
住居址



同炉址



同断面

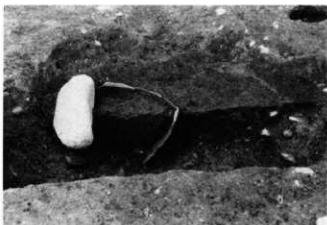
图版 5



120号住居址



同炉址



同断面



107·114·117号住居址



108·109号住居址



107号住居址



同カマド



110号住居址



110号住居址出土
短頸壺蓋



117号住居址

図版 9



112号住居址



同遺物出土状態



掘立柱建物址14



掘立柱建物址16



掘立柱建物址17・18



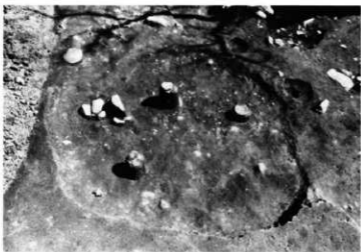
掘立柱建物址19・20



土坑26



小竖穴4



小竖穴5



清址12·23



溝12



溝23
土坑25



杭列



確認調査範囲全景（南より）



同全景（西より）



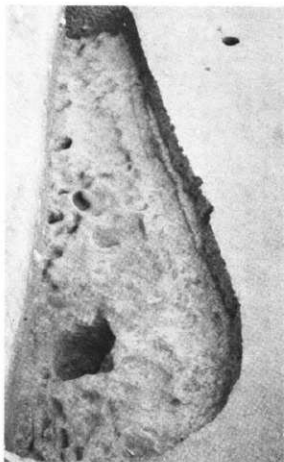
126号住居址



同遺物出土状態



125号住居址



124号住居址



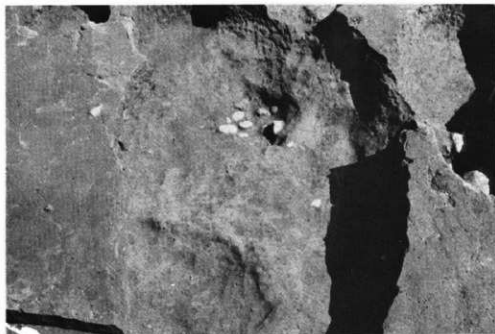
124号住居址出土磁石



123号住居址



掘立柱建物址22



小鑿穴7



石敷址

(南より北東)



(西より南東)



(北より南)





9号住居址



135号住居址



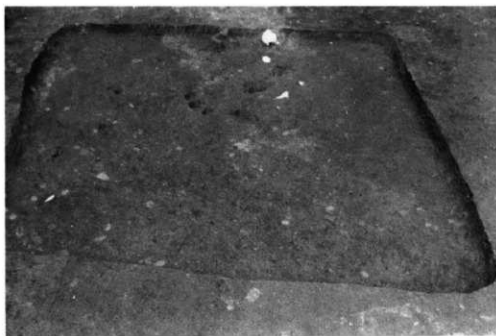
132号住居址



132号住居址
炉址断面



137·138号住居址



140号住居址



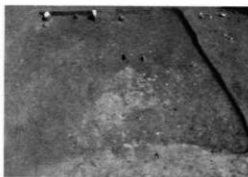
141号住居址



142号住居址



11号住居址



133号住居址



139号住居址



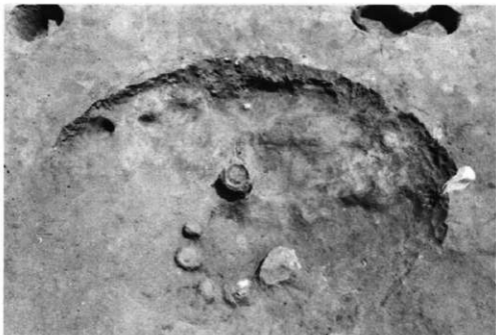
144号住居址



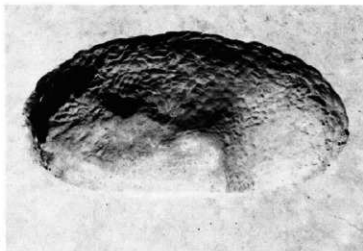
145号住居址



掘立柱建物址25



土坑33



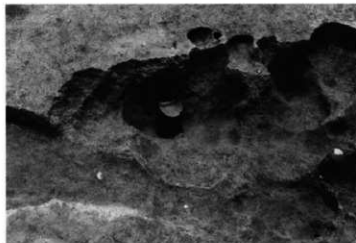
土坑34



土坑37

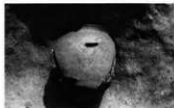


土坑38
遺物出土狀態



土坑43

同出土須恵器壺



土坑48

土坑52



同内部石の状態





小竖穴 9



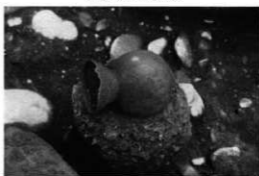
同遺物出土状態



同土層断面

溝址12

同遺物出土状態





溝址5・25



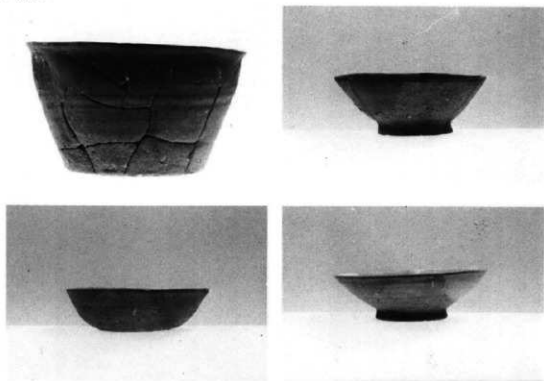
溝址17



方形周溝墓1



同遺物出土狀態



107号住

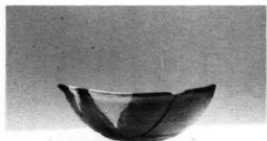


107号住

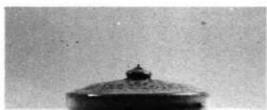


107号住

107号住居址出土遺物

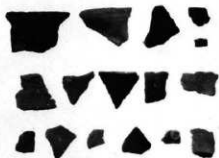


108号住居址出土遺物

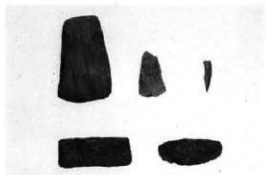


110号住居址出土遺物





111号住



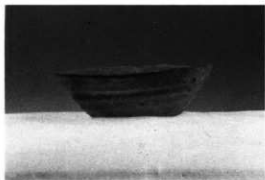
111号住居址出土遺物

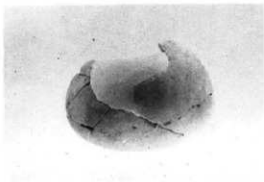


112号住居址出土遺物



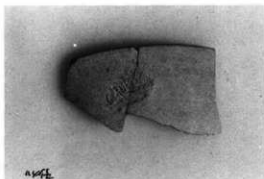
112号住



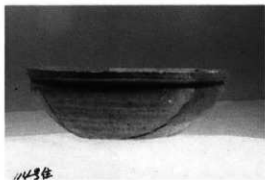


113号住居址
出土遺物

114号住居址
出土遺物



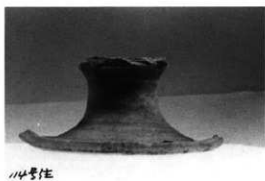
「美濃」刻印
坏破片



114号住



114号住



114号住



114号住



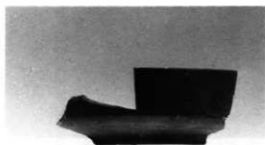
115号住居址出土遺物



116号住居址出土遺物

117号住居址出土遺物

117号住居址



117号住



117号住

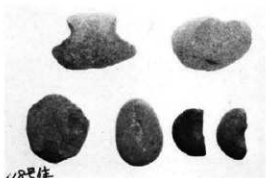


118号位



118号位

118号住居址出土遺物



118号位



120号位

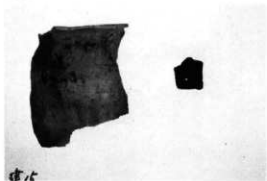
120号住居址出土遺物



120号位



120号位



掘立柱建物址15出土遺物

遺物



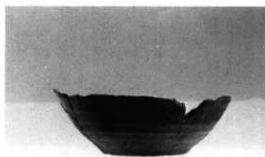
小竪穴4

小竪穴4出土遺物



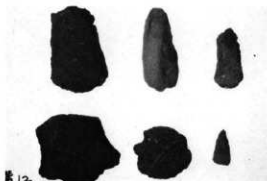
小竪穴5

小竪穴5出土遺物



小竪穴5

溝址12出土遺物



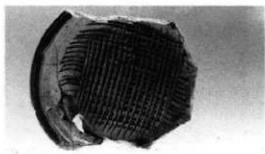
遺物



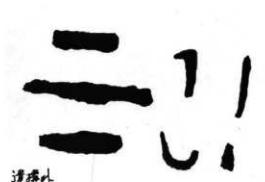
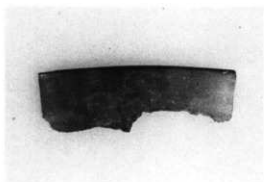
遺器外



遺器外



遺器外



遺器外

田中・倉垣外地籍遺構外出土遺物

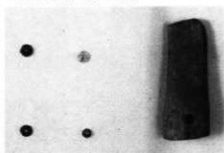
122号住居址出土遺物



123号住居址出土遺物



124号住居址出土遺物



白	砥
玉	石

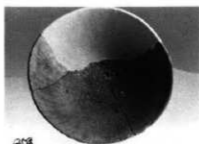


125号住居址出土遺物

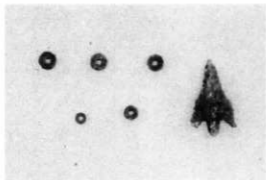
125号



125号

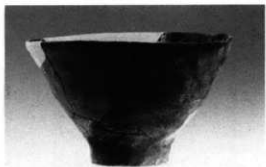


125号





1264



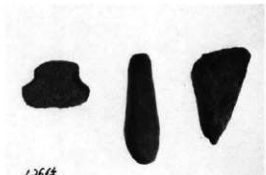
1265

126



1266

126



1267



126

126号住居址出土遺物



127号住居址
出土遺物



1254a



1291a

1-21



1294a

1-22



1296a

1-27



1294a

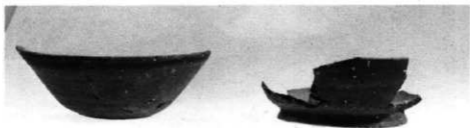
1-20



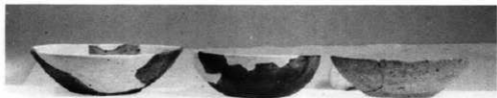
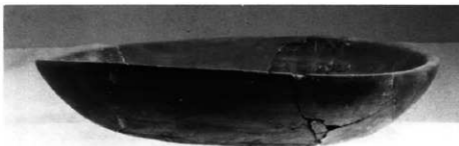
1294a

1-25

129号住居址出土遺物



130号住居址出土遺物



AA60不明住居址出土遺物

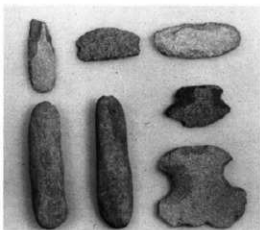


方形周溝墓5出土遺物

確認調査
遺構外出土遺物



墨書土器



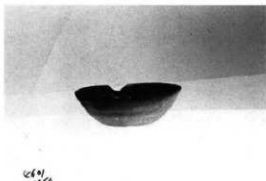
鉄器

図版45



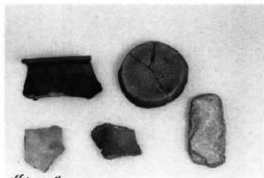
7601 2件

4号住居址出土遺物



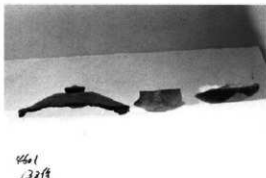
4601
1件

11号住居址出土遺物



7601

132号住居址出土遺物



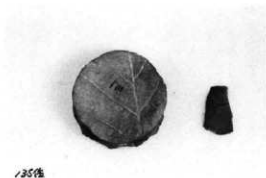
4601
32件

133号住居址出土遺物



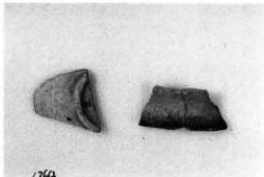
601
130件

134号住居址出土遺物



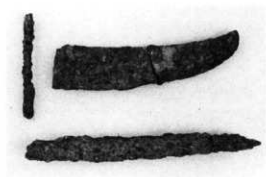
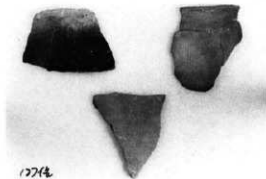
125件

135号住居址出土遺物



7601

136号住居址出土遺物



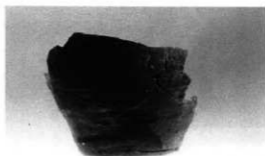
137号住居址出土遺物



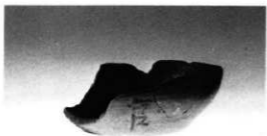
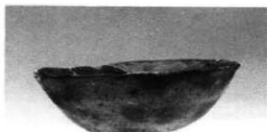
138号住居址出土遺物



1296



1295



1294

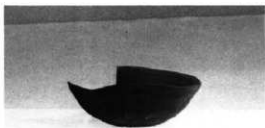


139号住居址出土遺物

140号住居址出土遺物



141号住居址出土遺物



図版49

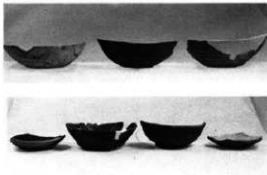
142号住居址出土遺物

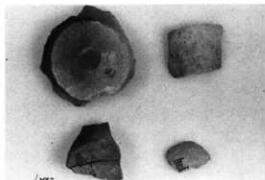


143号住居址出土遺物

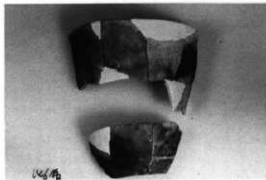


144号住居址出土遺物





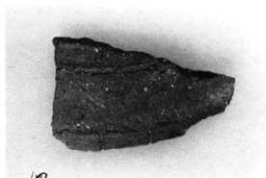
145号住居址出土遺物



146号住居址出土遺物



147号住居址出土遺物



147号住居址出土遺物



148号住居址出土遺物



図版51



1/10

150号住居址出土遺物



1/24

掘立柱建物址26出土遺物



土坑33出土遺物



土坑37出土遺物



土坑43出土遺物



土坑51出土遺物



311



312



313



314



315



清址12出土遺物



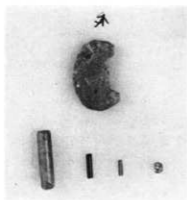
図版53



溝址12出土遺物



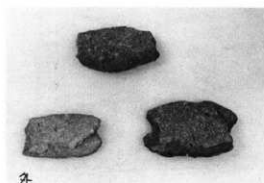
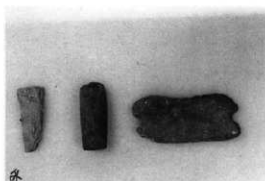
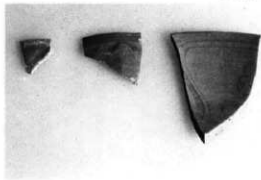
方形周溝墓1出土遺物



TAN-KUR4601
出土玉類

「勾玉 遺構外」

土坑41出土	管玉	溝12出土	管玉	方形周溝墓1出土	137号住居址出土	白玉
--------	----	-------	----	----------	-----------	----



TAN-KUR4601遺構外出土遺物

重機による
トレンチ掘り
(ZAPP21)



ベルコンを使用して
の拵土作業
(確認調査)



遺構掘り下げ
(ZAPP21)





清掃して写真撮影
(TAN・KUR4601)



実測作業
(TAN・KUR4601)



地元小学生が見学に
(TAN・KUR4601)